

**BELLAGÉ**  
DES  
**LEHRBUCHS**  
DER  
**DEUTSCHEN SPRACHE**  
FÜR DAS  
**SELBSTSTUDIUM.**

**(LEHRER.)**

**HEFT 7-13.**

167
6
73

谷口秀太郎  
立案監修  
辻高衡

獨逸語學講義  
第七輯  
附錄

教師  
(Lehrer)



寄贈

獨逸語學雜誌社發行

獨逸語學雜誌社寄贈本

## 凡 例

1. 本誌は之を教科及び教師の二編に頒ちたれば讀者は番號を逐うて雙方を對照すべし。
2. 外國語の修學は其初期に於て正確ならんことを要す。若し之を誤るときは、後に至り、進歩を見ること難し。故に前章を充分に知得せずして後章に移るが如きことあるべからず。
3. 本誌の教科は最も簡明に記述したれば、讀者は成るべく自己の力を以て之を攻究し、而して後教師の編を開き、誤なきか否かを質すべし。
4. 獨逸語は之を變則的に修學する者にてても、一通り文法上の知識を養はざるべからず、而して文法の要は應用にあり、故に本誌に載せたる和文獨譯練習問題の如きは決して之を忽にすべからず。
5. 和文獨譯練習問題は重に文法上一部の應用に留まり其數も隨つて多からざれば、讀者中餘力ある者は教師の編中にある譯文を獨譯し、之を教科と對照して誤の有無を質すべし。

獨逸語の發音を正確に授けんか爲に作りたる新文字左の如し。

1. 「**オ**」は *o* の音を表さんが爲に「**オ**」と「**エ**」とを合して作りたるものにして「**オ**」を發する口附を以て「**エ**」と發音すべし。
2. 「**ウ**」は *ii* の音を表さんが爲に「**ウ**」と「**イ**」とを合して作りたるものにして「**ウ**」を發する口附を以て「**イ**」と發音すべし。
3. 「**チ**」及び「**ツ**」は *ti, tu* の音を表さんが爲に作りたるものにして「**ト**」の口の構へを以て「**チ**」及び「**ツ**」と發音すべし。
4. 「**ヂ**」及び「**ヅ**」は *di, du* の音を表さんが爲に作りたるものにして「**チ**」「**ツ**」を濁りて發音すべし。
5. 「**ホ**」は *hu* 又は或る場合に於ける *ch* の音を表さんが爲に「**フ**」と「**ホ**」とを合して作りたるものにして「**ホ**」の口附を以て「**フ**」と發音すべし。
6. 「**ラリルレロ**」は舌端を上顎に着けて而して後「**ラリルレロ**」と發音すべし。



1) Ostracismus (オストラキスムス) — 上古希臘國法に Athen に於ては 何人にてても國內に勢力を有し民主政を危くする者ある時は市民は之が姓名を土器又は貝殻に記して之を箱中に投じ其數一定の數に達すれば事實の有無を問はず其人を國外へ放逐せり、此一種の秘密投票法を名けて Ostracismus と云ふ。

Athen の人民は Aristides を Ostracismus (秘密投票法) に依つて放逐しき。Aristides を識らざりし所の、一農夫は、彼(農夫)に代りて (für) 彼れ (Aristides) の名を一ツの貝殻の上に書くべく、彼れ自身 (Aristides) を願ひき。彼 (Aristides) は汝に何か爲したか、と Aristides が問ひき。——いえ、そんな事はない、然しながら私は、人が彼を正義なる者と云ふことの、それを忍耐することが出来ぬ(世人が Aristides を正義の人杯と云ふのが氣にくはぬからとの意)、と農夫が答へき。Aristides は全く靜に己れの名を書き付けし。

## 97. 當世流の醫者

- 1) einem beschwerlich fallen 或人に困難になる — beschwerlich は困難に又は煩はしく、fallen は落つるなり
- 2) Das hat gar nichts zu bedeuten それは少しも譯のないことです(それは全く何も意味すべく持たぬ)

田舎の或貴婦人が病氣となりし而して半時間行程其處から距りたる都市(ber は Stadt の冠詞)より醫師を迎へしめき。彼(醫師)が來りし、而して彼女が殆ど充分に再び回復したりし後にも、彼は絶へず (noch immer 尙常に) 彼れの往診(訪問)を續けし。夫れ故にかの貴女は彼に發言しき、(即ち)斯の如き遠き道を彼女の處へ (zu) 爲すべき、

其事は彼に恐くは餘り困難になるであらう故に、彼女は今後彼れの毎日の往診を待たぬであらうことを、おー(どう致しましてとの意)、それは少しも譯のないことです;私はあなたの御近隣にまう一人患者を持つてゐます、ですから私は一ツの蠅打で同時に二ツの蠅を打つことが出来ます(一舉兩得の意)、と醫師が答へき

### 98. 争論

1) das Chamäleon (カメレオン)は亞弗利加、西班牙等に棲息する蜥蜴の一種にして明暗、寒暑及び激昂に依つて其色を種々に變ずる動物なり

2) Wie (was) kann ich dafür? 私はそれに對してどうすることが出来るか、何とも致方なしとの意

3) der Dummkopf 馬鹿者 — dumm は愚なる、Kopf は元來「頭」の義にして「人」の意味に用ゆらるゝこと歴なり

4) War dies das Wort? それは何と云ふ言葉だ(それが言葉でありしか) — 「苟くも人たる者の口にすべき言葉なりしか」との意なり

5) Recht haben 尤もである、Unrecht haben 間違つて居る — Recht は道理、正義、Unrecht は不道理、不正義なり

6) dummes Zeug 馬鹿な事 — Zeug は Ding (物)、Sache (事、物)と同意義なり

7) im Stande sein 能ふ — (六輯 74 節の 2 参照)

8) ebensowenig als.....何々の如く同様に何々せぬ — als は如く、ebenso は同様に、wenig は茲にては nicht と同意義なり

9) Wohl möge es dir bekommen それは汝の口に適(ア)はう — einem wohl bekommen は或人に能く適するなり、mögen はあらうなり

10) posttaufend おや魂消た — 驚きの際に發する間投詞なり

11) Was meinst du damit? それはどう云ふことか(汝はそれを以て何を考へるか) — 「お前の其言葉はどう云ふ意味であるか」との意

21. 僕に言へ、Braun, 君は嘗て Chamäleon を見たか

22. さうとも;屢見る(主言 ich を略せり). 蜥蜴(トカゲ)に等しき小さい、赤い動物じや、さうではないか

21. 赤い? 君は間違つてゐる;そはれ赤くはない、却つて緑じや

22. 併し僕は君に云ふ、それは赤い、僕はそれを併し自分で見たんだもの! 君は、僕が僕の眼を失つた、と思ふか

23. そいつは、眞に、大した損害ではあるまい、若し彼等(眼)が君にまう少し良く役に立たぬならば

24. 君は亂暴だ

25. 誠を云ふ事が亂暴であるなら、僕はそれに對してどうすることが出来るか。僕は君に云ふ: 其動物は緑だ

26. ところが (und) 僕は赤いと云ふ(主張する)んだ。馬鹿者!

27. 何! 馬鹿者ッて! それは何と云ふ言葉だ。君はそれを敢てするか、僕を馬鹿者と名づけることを?

28. おー、君が拳を握る必要はない、僕に君が少しの恐怖も起させることは出来ない。その動物は赤じや、僕は君に云ふ、赤だ、赤だ、赤だ!

29. いや、僕が君に云ふ様に、それは緑だ、緑だ、緑だ、緑だ!

30. さー、茲に Caspar が来る。僕等は彼にこの事件を提出しやうと思ふ(提出して審判を乞はうと思ふの意)

31. 宜しい(私には宜しい). 彼は眼を持つて居る;僕は全く彼れの審判に就いて疑はぬ;僕の方が尤もだと云ふことより、外に彼は言ふまい

Caipar が入り来る

23. 今日は、君(朋友よ)! 此男は、Chamäleon が緑の色を持つて居ると、云ふ; 僕は併し、それは赤いと、云ふ。僕等の内のどつちが尤もか
24. 二人の内の一人も(正しくないとの意)、君等は眼を持たない。それは白いのだ
25. 白い? 馬鹿な! は、は、は
26. 白い? 馬鹿な事だ! は、は
27. お一、勝手に (mir) 笑へ! 僕は然しながら、僕の言ふ事を、直に證據立てることが出来る。昨晚僕は一つ捕へた而してそれを此袋の中へ入れて置いた
28. 出せ、それで(曲直を決しやうとの意)! Braun, 君は見るだらう、それが緑であることを
29. 緑ではない、却つて赤だ。其處の机の上の僕の帽子と同様に、緑ではない。何でも宜いから (mir) 出せ!
30. 諸君(私の朋友等よ)! 君等は二人共に間違つて居る。此動物が白くなければ、僕はそれを食つて仕舞はう
31. それは君にはうまからう。早く、何でも宜いから (mir) 袋を開けい! は一、茲にある
32. 青? 誰がこんな事を考へたであらうか!
33. 青? 僕は殆ど自分の眼に信用することが出来ない
34. 青? おや魂消た! 恐らくは其内に悪魔が這入つて居るのではないか。或は僕は夢を見て居るかしら

Dad が入り来る

35. 諸君(朋友等よ)! 僕は丁度近くに居つて争論を聞き

ました。諸君の各が尤もです、ところが (und dennoch) 亦諸君は皆間違つて居ます

36. それはどう云ふことですか
37. Chamäleon の皮膚は變はる色を持つて居ると、思ひます; 彼は時としては緑、時としては赤く、時としては白く又時としては、君等の御覽の通り、青いのです
38. おやさうですか? は一、さう云ふ譯なら(それが左様にあるなれば)、私共は理由もなくお互に(互に對して)立腹したものですな

### 99. 往時よりの消息

- 1) sich bedienen (再歸動詞) 用ゐる — は二格を支配する動詞なり、故に der Gänsefeder と二格にせり
- 2) in Gebrauch kommen 使用せらる — 使用に於て來る

漸く十四世紀に於て紙が麻布より製造せられき(出で來りき)。六世紀以來人が書くことにまで鵝「ペン」を(二格)用ゐき; 漸く今世紀(我等の世紀)に於て鋼鐵「ペン」が使用せられき。—人が十六世紀に到るまでは (bis zum) 木製の匙を以て食せり; 多くの家具は亦王宮に於てすら木より成り立ちき。此點(關係)に於ては普國の宮中に於て格段なる質素が行はれき。普國の Friedrich Wilhelm 一世王が住ひし所の、部屋も尙壁紙で被ふことなく、家具は如何なる裝飾 (Prunt und Verzierung) もなくありき

### 100.

- 1) das Faustrecht 腕力 — Faust は拳、Recht は權利なり
- 2) Köhler 「ケルン」市の — (五輯 14 節の 2 を見よ)

- 3) zum Vorschein kommen 現はる — Vorschein は現出、kommen は来るなり  
 4) sich daran begeben それに着手す — sich begeben は赴くなり、daran はそれに於てなり

十三世紀に於て、(即ち)獨逸に於て腕力が支配せし時に(暴力の行はれし時代に)、「ライン」地方の城砦 Tre に十一人の Rôln 市の市民が不法に且つ罪なくして獄舎中にありき。四人の一人に一匹の鼠を馴らすことが、爲し遂げられし(自分に一匹の鼠を馴らすべく其事が達せし); 此親しき小獸の可愛らしきことに於てかの人々が、古き記録の云ふ處では、彼等の濃厚なる喜びを持ちき。或日鼠が彼れの穴の内へ潜(モグ)りし而してどんなに呼んでも口笛を吹いても(總ての誘ふこと及び口笛を吹くことに拘はらず)再び出で來らざりき。心配してか四人等が失せたる愛者(鼠)を再び見出さんが爲に、鼠の穴を擴ぐべく着手しき。そのことは彼等に達せざりし、然しながら遙によきことが(彼等に達せし): 彼等は壁の内に洞穴を發見した、その内に鋭き鋸と鐵の鑿とがありし所の。そこで彼等が彼等に小さき悲み(鼠を失ふたこと)より大なる喜びを咲かした所の、神を讚美せし (loben und preisen 兩語共に讚美するの義)、如何となればかの道具の助けを以て不法の(其罪にあらざる)禁錮から逃れることの、その事が彼等に出來し (möglich werden) 故に

### 101. 口を滑らす

貴婦人(羅紗商店にて): 値段はそれでよからうが(値段は已によくあるであらう)、然し (aber.....doch) この着物の色は除りばつとして居る

販賣人(すかさず): どうぞ、それでは (ja) あなたがそれを御洗濯さへなされば宜う御座います(只だ洗濯すべく要する)(即ち商人は思はずも口を滑らして着物の色の褪め易きを漏らせり)

### 102. 不謙遜

Gretchen (女兒の名)は彼女の誕生日に小供の心を喜ばせる多くの小さい進物を以て贈られた(贈物を受けた)。殊に(最も多く)彼女は新しき「ペン」軸に就いて喜びし、それを以て彼女が「インキ」で彼女の第一の書き試しをなさうと思ひし所の。今私の娘は併し恐らくは甚だ満足してあるか、と父が問へり。はい、お父さん、甚だ満足です、今私が私に(私の爲に)只尙一の「ピアノ」を願ふ計りです、と小さき女兒が確言せり

### 103. Alexander の制慾

- 1) weit und breit 界限に — weit は遠く、breit は廣きなり  
 2) voll Bewunderung 最も驚歎して — 之を直譯すれば驚きの満ちて、一杯になり  
 3) einen (uns) für etwas halten 或人を(我等を)何々とする、又は何々と思ふ

Alexander 大王が彼れの軍勢を率ゐて (mit) 一大沙漠を通して來りき、その(沙漠)内には界限に水があらざりし所の。遂に一兵卒が少しを發見したりき而してそれを兜に入れて (in) Alexander に持ち來れり。彼れの兵卒が彼と同様に (eben so wie er 彼れの如く一様に) 渴の爲に喘ぐことを、然しながら此者 (Alexander) が見し時に、彼 (Alexander) が話せし: 私が茲に(此場合に於て)飲む所の、唯一の者であ

るべきかと(此場合に於て我一人水を飲むに恐びむやとの意)而して其水を地上に注ぎし。そこで總てが王の節慾に就いて最も驚嘆して呼びき; 立て(鼓舞の詞)! 我等を率ゐり行け! 斯の如き王が我等を率ゐるなれば、我等は死すべしとは思はぬ!

### 104. 骨折甲斐なし

- 1) nicht der Mühe wert 骨折甲斐なし — wert (値して)は二格を望む形容詞なり、故に der Mühe (骨折)は女性の二格なり、而して此文には主言及び動詞を略せり
- 2) Obacht (オプ、アハト) sehen 注意する — Obacht は注意にして geben は與ふなり
- 3) Taschendieb 掏摸 — Tasche は「ポケット」、Dieb は盗人なり

裁判官(獄丁に對して): 貴君は此男を再び彼れの監房へ連れ歸れよ — 併し貴君は注意せよ、彼が途中で貴君の「ポケット」を空にせぬ様に!

掏摸: 併し、判事様、彼は「ポケット」の内に實に只一つの「ハンケチ」と一つの木製の煙草入とを持つて居るだけです

### 105. 手折られたる花

手折られたる花を可なり長く保存せんが爲、人が彼等を折り取りたる後直に全く(全部を)「アラビヤゴム」が溶解せられてある所の、水の内に浸さねばならぬ、然る後に吾人は二三分間彼等を乾かし、然る後に吾人は彼等を花瓶の内に挿入す。「ゴム」は花柄及び花瓣に固着す。是に依つて人の保證する所では、花が久しき間、加之彼等が已に枯れてある後にてても(後の然る時にても)、色及び形を保つ

### 106. Bismarck の臨終の(最終の)詞

或講演に於て Duden 博士は是迄未だ公にならなかつた(公に於て來らなかつた)所の、事を報告せり — 即ち Bismarck 公は彼れの死際(シニギワ)に(彼れの死する臥床の上にて)彼れの臨終の詞として、『愛すべき神よ、余は信仰す、私の不信仰に助けよ(余の信仰の足らざる所は余を助けて信仰せしめ給への意)而して余を汝の天國に於て取れ』と祈禱したと云ふ事を(報告したに反る)

### 107. 好き答

- 1) einige Mühe haben 多少の骨折を爲す — einige は多少のにして Mühe は勞、骨折なり

千八百七十年の或戦役に於て若き普魯西の一士官が彼れの(大將の)望遠鏡に依つて敵の動靜を觀察せし所の、彼れの(大將の)馬を保ちし(馬の動かぬ様に轡を取りし)、右及び左に榴弾が打ち込み來り而して僅の(einig)距離に於て破裂せし; 榴弾が唸りつゝ、頭を越へて飛び行きし、馬が騒ぎし(不穩になりし)而してかの中尉(普魯西の士官)がそれを靜むるに多少の骨折をなせしことは、怪しむに足らず(不思議でない)。あい、あい(茲にては士官の殊勝なるに満足の意を表したる間投詞にしておい、おゝと云ふが如し)、想ふに(私が信ずる)、貴君は多少こはかつたであらうな? と大將が云ひき。はい、閣下、貴君が打たれるかも知れないと、私は恐れました、とかの士官が答へき



### 108. 主馬頭 Froben.

- 1) der Stallmeister 主馬頭 — Stall は厩及び其他の家畜小屋、Meister は棟梁、頭なり
- 2) der Kurfürst 撰帝侯 — Kurfürst は撰擧、Fürst は諸侯なり、中古より獨逸帝國の瓦解に至るまで獨逸皇帝を撰ぶ権利を有せし諸侯にして其數初は七人なりしが後には九人となれり
- 3) auf etwas eingehen 或事を承諾す
- 4) tödlich getroffen 致命の傷を受けて — tödlich は「死すべき」、getroffen は treffen (中てる)の過去分詞にして「中てられて」なり、即ち彈丸に申りて致命の傷を受けたるを云ふ

大撰帝侯 Friedrich Wilhelm は Fehrbellin の (bei) 戦闘に於て白馬に(本來は四格)騎しき。それ(白馬に騎して居ることを)瑞典人が發見したりき而して絶間なく彼等の銃を彼(大撰帝侯)を目差して (auf) 向けし。近く彼れの周圍に彈丸が「ビュービュー」云ひし、彼(撰帝侯)が大なる危険の内に漂ひし位 (so daß)。此事(大危険中にあること)を彼れの主馬頭 Froben が認めし、と (so 斯様に、何々と)人が物語る。撰帝侯よ、あなたの白馬は臆病である、私に彼(白馬)を與へよ、而して私の栗毛に(本來は四格)乗れ! と彼が呼ぶ。何も氣付くことなき(主馬頭の言に深意のあることを知らざりし所のとの意)、撰帝侯は交換を承諾す。數分間の後に此高尚なる Froben が一つの彈丸から致命の傷を受けて馬より落つ。彼 (Froben) は彼れの忠義の犠牲となりたり

### 109. 好き徴候

- 1) die Schwerhörigkeit 耳の遠きこと — schwer は困難に、Hörigkeit は聞くことなり
- 2) sich die Ohren zuhalten 自分に耳を蓋ふとは自分の耳を蓋ふと云ふに似寄りたる言葉にして獨逸にては斯の如き言ひ現はれり多し

紳士: さてあなたのお父さんの耳の遠いのは未だ相變らず (noch immer) 止まなんだか

令嬢: 左様です(止みましたとの意)! 昨日私が歌ふた時に、彼は已に自分の耳を塞ぎました

### 110. 學校の出來事(學校より)

- 1) in die Höhe steigen 昇騰する — Höhe は上なり、steigen は昇るなり

教師: 人が寒暖計を湯(熱き水)の内に挿入する時に、何故に水銀が昇騰するか

生徒: それは(文法上の主言)彼に下で餘り熱くなるからです(水銀が下にては熱くして耐へ難きを以て昇騰するのでとの意)

### 111. 眞の所有

- 1) im Vertrauen 内々で — Vertrauen は信すること、他言せざるを期することなり
- 2) steinreich 非常に富みたる — Stein は本來石又は堅固の義にして形容詞の前に結合する時は sehr の意味となる

Friedrich Wilhelm 第四世王は或時一大銀行の所有者に(四格)問ふて曰く: 貴君は私に内々で言へ、貴君は一體如何程所有なさるか — 陛下よ、たつた四千「ターセル」です、と理財家が答へき — そんな筈はない! 貴君は然し非常の金満家である、と王が話せし — 陛下よ、と答がありき(金満家が答へしとの意)、私が所有して居ります所の、總ての金子を私は一夜の内に(夜を越へて)失ふかも知れませぬ(失ひ能ふ)、然しながら此四千「ターセル」を私は此頃或病院の建築に寄贈しました、而してそれが私の消失すべからざる所有であります

### 112. 「シリア」に於ける乳汁の販賣

1) einer und der andere 誰れ彼れ — einer は或人、der andere は他の人にして邦語にて甲し乙も、誰れ彼れ杯と云ふに同じ

2) irgend ein 或る — irgend は總て不定の事柄を表はす時に用ゐる言葉にして ein と結合して用ゐらるゝこと屢々なり

我が風俗の如くに(それが我等の處で風俗である如くに)、乳汁を車に積みて運び廻り若くは罐に入れて持ち來らずして(持ち來る代りに)、「シリア」に於ける乳汁販賣は遙かに異つて居る(出來る)。「シリア」の乳汁販賣者は彼れの一群の山羊を街道を通して追ひ而して「ミルク、ホー」と云ふ彼れの呼聲を響かしむ。然る時には買人の戸が開き、而して乳汁商は彼等(買人)の各々に隨意の山羊から乳汁を搾る。買人の誰れ彼れがある山羊を好むであらう時には、其時には彼が只だそれを云ふことを得(云ふべく持つ)

### 113. 鋼鐵「ペン」の採用

1) Jemandem Glück wünschen 或人に祝辭を呈す — Glück は幸福、wünschen は希ふ、祈るなり、即ち或人の爲に幸福を祈ることなり

2) alles 大切なこと、主眼 — 此語は悉皆又は結了杯の意味を有するものにして本文の如き場合に於ては目的を果す義なり

3) es dahin bringen 何々する様にさせる — dahin は其處へ、さうなる様に、bringen は持ち行く es は不定代名詞にして意味なき補足音なり

4) eine ganze Generation 或全き時代の者(即ち後世に於て或時代の者は殘らずとの意なり) — Generation 人間一代を云ふ

5) sich bedienen (再歸動詞)用ゐる — は二格を支配する動詞なり、故に der Stahlfedern は複数の二格なり

英國の貧しき教師 Berrey が鋼鐵の「ペン」を發明した時に、或人は彼に祝詞を呈せり。發明計りでは何にもならないことだ(發明は何にもであらぬ)、然しその發明物を普及させ能ふと云ふことは、大切なこと(主眼)であると、彼が答へき(答にまで與へき)。私は私の鋼鐵の「ペン」が學校で採用せらるゝ様にさせるならば、その時には小供等が決して鵝鳥の羽根の軸を切ることを學ばぬ而してある全き時代の者が鋼鐵「ペン」を(複數二格)用ゐねばならぬ。而してそれが又左様に叶ひき

### 114. 餘り言葉に拘泥し過ぎて

(餘り言葉通りに取られて)

1) das Schafengehen 就寢 — schlafen は寢る、gehen は行くなり、即ち二語にて寢に行くことなり

2) ein Eßlöffelvoll 一食匙一杯 — Eß は essen (食する)を約めたる言葉にして Löffel は匙、voll は滿ちたる又は一杯の義なり

醫師: さあ處方書を上げませう(今あなたは處方書を持つよ)。此藥劑を藥舗で作らせ而して晩方就寢前に四食匙の水を入れて一食匙(食匙一盃)の藥劑を服用なさい(取れよ)

Michel: それは而し六ヶ敷御座ります(六ヶ敷行く)、先生——私は宅に只三ツの食匙を持つばかりです

### 115. 温厚なる者は幸福なり

1) Sir (英語 für と發音す) は其意獨逸語の Herr と同じ

2) von Zorn und Wut hingewiffen 憤慨に堪えずして — Zorn は怒、Wut は烈しき怒、hinweisen は奪ひ取る、引き取るなり

3) auf die Kniee fallen 跪く — auf die Kniee は膝にて、fallen は落つるなり (六輯 68 節の 1 参照)

4) um Verzeihung bitten 謝罪す (許すことの爲に願ふ) — bitten (願ふ) は常に前置詞 um を望む動詞なり

有名なる英國の勇士にして発見者たる Walter Raleigh 氏は或時激烈なる若き男よりいたく罵詈せられたり、それは彼を加へ決闘にまで挑みし所の、Raleigh は然しながら否みき。憤慨に堪えずして、彼れの相手(即ち若き男)は彼に衆人の面前に於て顔面に唾せし、而して恥辱を受けたるものは何をなせしか。彼は彼れの「ハンカチーフ」を引き出し其場所を拭ひ而して静に言ひし: 若き男よ、私は此恥辱(顔に吐き掛けられたる唾)を私の頬から拭ふ如くに其通り容易に汝の血を私の神靈より拭ひ去ることを得るであらうならば(人を殺し其血にて己れの神靈を穢したるを拭ひ去ることが出来たならばとの意)、眞に私は汝に決闘を否まなかつたであらう。此温厚なることがかの癩癩強き若者を屈服せし; 彼は跪き而して謝罪せり

### 116.

1) Cousin (佛語 kufäng' と發音す) 従兄弟

2) zum Vorschein kommen 現はる (第 100 節の 3 を見よ)

3) zu Atem kommen 息を繼ぐ — Atem は呼吸なり

小なる Franz が或日彼の遊仲間の者等と海濱で浴せし(海水浴をして居つた)、彼れの大きな従兄弟が彼を差し上げ彼を深く大浪の下に沈めし、あつぷーと息を吹きながら彼が再び現はれし、而して彼が再び息を繼ぎ終つ

たりし時に、然しながら全く驚いて叫びし: 若し汝が私を溺死させるならば、然るときには私はそれを私のお母さんに云ふよ

### 117. 當世の召使

下女(他の下女に對して): 云へ、Auguste よ、御前は既に何ヶ所卒業したか(何軒亘つて來たかとの意)

### 118. 雨より雨垂の内へ

1) von Regen in die Traufe 雨より雨垂の内へ — 小害を避けんとして大害に陥ることを示す諺にして茲にては「簀を叩いて蛇を出す」と云ふ我國の諺と其意相同じ、Traufe は屋根より落つる雨のことなり

主婦: 併し、先生、貴君は實に欠呻をなさいます; 貴君は蓋し我等の處で退屈なさいますか

紳士: どう致しまして、私は決して退屈しませぬ、私が欠呻する時は、私は何となく (mir) それをするのです、空腹になるものですから(何となれば私が飢を持つ故に)

### 119. Solon.

1) Gymnasion は往古希臘人が體育上の練習を爲さんが爲に設けたる練習所なりしが後には哲學者、辯士等をも養成せり

2) auswendig lernen 語記する — auswendig は外方に向くなり、即ち書物を見ることなくとの意なり、lernen は學ぶなり

3) den Tod fürs Vaterland sterben 祖國の爲めに死す — sterben は元來自動詞にして補足言を要せざる言葉なれども死の方法、目的又は原因等を現はす場合には動詞中に含まれたる意味の名詞を補足言として用ゐることあり、即ち本文の den Tod fürs Vaterland (祖國の爲の死を) は sterben (死す) の目的を現はしたるものなり、此外 einen guten Schlaf schlafen (善き眠を眠る)、einen blutigen Kampf kämpfen (烈しき戦を戦ふ) 等も此類なり

Athenの立法者はかの賢明なるSolenなり。彼は小供の教育の上に最も重きを(大なる重量を)置けり。童兒は六歳に至るまで(bis zum)母の側に留まりき;然る後に彼等が學校を見舞ひき。より大なる童兒等はGymnasiumを見舞ひき。それは空地(空きたる場所)、園及び森を持つたる大なる建物でありき、そこにて人體が走ること、相撲を取ること、投げること及び飛ぶことに於て練習せらる、所の、其他、人が青年を茲(Gymnasium)で演説術に於て授業し而して彼等をして國法(國の法律)を諳記せしめき。十八歳を以て(十八歳に至れば)青年が楯及び鎗を得し。其際に彼は戦争に於ての彼れの立場を決して去らぬこと、武器を決して卑怯に依つて辱しめぬこと及び喜んで祖國の爲に死なんとすることを誓はねばならざりき

## 120. 開穿せられたる泉

1) Todesquä 致命の彈丸——Tob は死、Quä は鑄造したるもの、義にして茲にては彈丸のことなり

Sebastopolの攻圍の間に露國の堡壘より此都市(Sebastopol)の外部の或山へ榴彈が飛び來り、而して其處に一つの泉を開穿せり。小なる水流が彈丸によつて打ち割られたる岩の道(岩中の水路を云ふ)を通して注ぎ而して自今、全き攻圍の間、新鮮にする所の水の剩餘を以て(人を新鮮ならしむる充分の水を以て)近傍の渴したる兵員を養ひし(手當せし)。故に敵の致命の彈丸が多くの疲勞したるもの及び渴したるものに對して幸福の扶助者となつた

## 121. 小豪傑

1) Laut von sich geben 聲を發する——von sich geben は自分より與ふにして即ち發するを云ふ

2) mein Herz! 我最愛なる者よ——Herz は元來は心の義なれども屢意中の者又は最愛なる者杯と云ふ意味に用ゐらる

3) ja は打消の言葉を強むる爲に用ゐること屢なり、即ち本文の場合の如きは是なり

Strigが烈しく頭を机の角に突き當てし、然しながら痛の叫聲を發せず。彼れの母が來る時、彼は彼女に彼れの不快なる出來事を物語り、而して此者(母)が同情を表しつ、彼に(四格)問ふ;而して汝は少しも叫ばなかつたか、我が最愛なる者よ。Strig: いえ(泣きませんでした)、私の泣くのを聞いて呉れたであらう所の、者は一人も居ませんでしたもの(私を聞き能ふたであらう所の、何人も其處にあらざりし)

## 122. さかねち

1) abgeführt (abführenの過去分詞)は避くる、外づして他に移す杯の意味を有する詞にして茲にては「さかねち」の意なり即ち他人より仕掛けられたる難題、恥辱等を旨く外づして反對に其人を苦しむるを云ふ

2) sich bei einem melden lassen 或人の處に名刺を通せしむ——sich melden は自分を告ぐる、lassen はせしむなり、即ち自分の名刺を通せしむることなり

3) für etwas halten 何々とする、何々と思ふ

Saphirは嘗て或歌女に就いて或反對なる批評を書きたり。此者(歌女)が彼を探せし而して彼女は彼に(本來は四格)出遇はざりし故に、一枚の名刺の上へ「嫉妬深き獸類よ」と書きし而してそれ(名刺)をSaphirの戸へ貼り付けし。翌日(次ぎの日に)Saphirは此貴女(歌女)の處で名刺を通せしめ而して進み入りながら云ひし: 貴君は昨日

貴君の訪問を以て私に(本來は四格)名譽を與ふべき友情を持ちし、而して其際貴君の名刺を置き忘れなかつた、それ故に貴君に答禮の訪問を爲すことを、私は私の義務だと思ひました

### 123.

1) niederreißen 破壊する — nieder は下にの意にして reißen は引き裂く又は引き倒す意なり

2) könnte 及び wäre は können 及び sein の過去可能法にして茲にては假定の意味を有す

3) Steinaufhäufung 石の堆積 — Stein は石、Masse は一容積の物又は堆積の義なり

現今破壊せらるゝ所の、大なる支那の城壁は一萬六千哩の長さを有す。彼は底面に於て二十五呎而して上では十六呎の厚さなり(厚くある)。彼れの高さは多くの場所に於て三十二呎を計算す。此城壁を破壊することは非常なる勞力を要す; 人が同一の時間に於て一つの都市の家を破壊し能ふならん、このもの(都市)が二百五十萬以上の人口を數ふる巴里に比し二倍程大きくあつても、此支那の城壁は凡そ二千年前に築かれ; 凡そ二百萬の人間がそれに於て働いてありき。韃靼人の進撃を防止することの彼れの目的を此城壁が決して達せなかつた(満さなかつた)。今や此巨大なる石の堆積が遂に堤防、水道及び公なる建物の建築に要用なる使用を見出すならん

### 124. 不幸中の幸

1) Schramme は殊に抓傷、擦傷の如き皮膚の傷を云ふ

2) daraufhin それに對して — darauf は其上に、それに對して、hin は方向を現はす詞にして「へ」の意味を有す

隣人の雙子の内の一人が階段を迂り落ちた而して其際額に大なる擦傷を得たことの、其事に就いて小さき Trude (女兒の名)が聞いた。彼女がそれに對して心底からの確信より證言する: それは然しながら實際眞の幸福である、今や人が彼等(雙子)を併し兎に角區別することが出来る

### 125. 各國の(總ての)語は此處で話さる

1) Restaurants (料理店)は他國語の變化に隨ひ Restaurants に語尾 s を附して複數となしたるものなり

2) die Weltausstellungstadt 萬國博覽會開設の都市 — Welt は世界、Ausstellung は博覽會 Stadt は都市なり

3) eine große Menge 數多の — Menge は容積、人數の義なり

此廣告を人が今甚だ屢々萬國博覽會開設の都市巴里に於ける料理店の窓に於て讀む。近頃或來客は斯様な料理店の主人に對して云へり: 貴君は此處に蓋し數多の通辯を持たねばならぬでしやうね?

亭主答へて曰く: 一人も持ちませぬ。

それでは (nun) 一體誰が各國の語を話すのですか

御得意様と御客様とです、且那樣

### 126. 當世の召使

1) zurücktragen 戻しに行く — zurück は戻す、返すの意にして、tragen は運ぶなり

2) gefagt の下には助動詞 habe を略せり

妻(下婢に對して): 私は然しおまへに已に二時間前に云ふた、彼(帽子)は私に値段が餘り高い(直段に於て餘り高くある)から、此新しき帽子を女小間物屋に戻しに行け(戻しに行くべし)と。それに (und) 今彼(帽)は未だ茲にある。なせおまへは行かないのか

下婢: 私は已に此帽子を持つて來る際に、若し帽子が奥様(恵み深き妻)に餘り高くあるであらうならば、私がそれを買ひまじやう、と女小間物人に云ひましたから

### 127. 不思議なる噴火山

Mount de Aqua — Mount (maunt と發音す)は山、Aqua は水、de は獨逸語の von の義なり

2) zu den Seiten 四方へ — Seite は側になり、茲にては複數なるが故に多くの側の義にして四方八方の意なり

3) artesischer Brunnen 掘抜井戸 — artesisch は佛國の地名 Artois (artoa と發音す)より作りたる形容詞にして artesische Brunnen は Artois 風の井戸との義なり、蓋し掘抜井戸は此地より始まりたればなり

中部亞米利加に於ける Guatemala 國の首府より南方數哩の處に Mount de Aqua 即ち水山と云ふ名稱の許に知れ渡つてある所の、大なる山が立つ。時々此山の上では噴火山に於けるが如く破裂が起る。然る時には彼(山)は然しながら灰、「ラワ」(熔岩)及び火を噴出せず(投げ揚げず)して却て大流を爲して(勢強き流れに於て)山の四方へ低地に於て注ぐ所の、澄みたる冷水を(噴出するに反る)。此不思議なる自然の掘抜井戸はあの熱帶國の住民に取つて何たる (welch ein) 幸福であるであらう(如何にも幸福なりとの意)

### 128. Alexander 大王 Bucephalus (馬名)

#### を乗り靜む

- 1) Talent は古代の貨幣の名にして凡そ三千「マルク」に當る
- 2) sich vor etwas fürchten 或物を恐る — sich fürchten は vor を望む動詞なり(第六輯 66 の 2 參照)
- 3) fallen lassen 落とす — fallen は落つるなり、lassen はせしむるなり
- 4) im Trabe 駢歩(カケアシ)にて — Trab は馬の足を互ひ違ひにして駢けることにして足飛にあらざるものを云ふ
- 5) steigen は之に伴ふ言葉によりて下るとも上るとも譯す

Alexander 大王の父 Philipp 二世が或時 Bucephalus と稱せし甚だ貴き馬を十三「ターレント」の非常なる價にて買はうと思ひき。然しながら何人も (kein Mensch) それに乗りて (darauf) 騎し能はざりし位、それ(馬)が左様に荒くありし故に、それ故にそれ(馬)を再び導き去ることを、彼が命せし。そこで尙若年なる Alexander は彼(自分)をして一度それに乗つて騎せしむべく、彼れの父に(本來は四格)願ひし。彼れの父がそれを彼に許しき。馬が彼れ自身の蔭を恐れしことを、Alexander は認めたりし故に、それ故に彼はそれ(馬)を太陽に向つて導きし、それを撫で而して靜に己の「マントル」を落せし(落ちしむ即ち茲にては脱ぎたることなり)。そこで (und) 彼は馬の上へ飛び乗り而して駢歩(カケアシ)にて騎し去りし。總ての居合せたる者は心配の爲に戰慄せり。併し彼等は彼 (Alexander) が再び歸り來り而して馬を全く意の如く(隨意に)御し能ひしことを、見し時に、彼等總てが驚嘆してありき

彼 (Alexander) が馬から下りたりし後に、彼を彼れの父が抱き而して呼びき：吾子息よ、汝の爲に或他の王國を求めよ、「マケドニヤ」は汝に取つては小さ過ぎる(餘り小さくある)

### 129. 私は靜に あることを學ぶ

- 1) Examen aufstellen 試験を爲す
- 2) gewahr werden 認める — gewahr は werden と結合するに非ざれば用ゐらるることなし
- 3) die Hände (die Händchen) ineinander legen 手を重ね合して置く — ineinander は互に於てにして、legen は置くなり

思ひ掛けなき參觀人(訪問、來客)が勉強なる小供等の一群が注意深く授業に従ひし(授業を受けて居りし)所の、教場の内に入り來つた、而して試験をなした、それ(試験)に於て彼女(各女生徒)が學んだ所のものを、各女生徒が熱心に現はさんとせし(現はすべく求めし)所の(試験を爲せしに反る)。そこで彼女の年齢によれば中々 (noch lange 尙ほ長く) 此處に屬せないが(就學の年齢には未だ中々達せぬのにとの意)、然し尤も眞面目に(大なる眞面目を以て)女教師の側の彼女の腰掛の上に坐りし所の、小さき少女を外來人(參觀人を云ふ)が認めし。汝は果して何を學ぶか、我が小兒よ、と彼(參觀人)が親しく問ひし而してそれを大なるものから見た如く(起立することを年長の小供等から見覚えたる如くに)此少女が起立せし、手を重ね合せて置き而して言へり：私は靜にして居ることを學びます

### 130. 小兒部屋の出來事(小兒部屋より)

- 1) sich mit etwas beschäftigen は或事を勉む、或事を職務とす又は或事を爲すの義なり、故に本文の sich mit Frage beschäftigen は問を爲すことなり
- 2) es giebt ある — 本文に feinen Menschen と四格を用ゐたることに注意せよ(第五輯 4 節の 9 参照)

小さき五歳の Carl は今日實に眞面目の問を爲して曰く：御母さん、全く死な、い人間は一人もありませんまいか(全く一人の人間があらぬか)

いえ、總ての人間は死なねばなりません (es は文法上の主言)

さうですか、さうすると (dann) 終りの人間を誰が葬りますか。

而してそれに對して何か答へらるゝ前に(何も答へられぬ内に)答を自ら見出したる事を、眞に嬉んで Carl が云ふ：分りました(私が已に知る)、それを(最後の人間を)天使が迎へ而して彼を天へ擔ひ昇るのでしやう

### 131. 満足させること難し

- 1) Besuch abtatten 訪問を爲す — Besuch は訪問にして、abtatten は與へる又は果すの意なり
- 2) die Ferien は永休みの義にして單數なき名詞なり

Emma (女兒の名) は容易に満足せしむべくあらぬ所の、小なる女兒である。叔母が近頃其家に訪問をなせし時に、彼女(叔母)は Emma が(四格)烈しく泣きながら隅に立つて居るのを見出しき。一體おまへは何故に泣くのか? と彼女(Emma)が問はれき。私のあ……兄さんや姉さんは

皆んなや……や……休みを持つから、それに (und) 私は少しも(休みを)持たない。ぶ……ぶ……ぶ……ぶ(泣き聲)——しておまへは一體何故少しもお休みを持たないの？ なせなら……なせなら私はまだ學校へ行きませんかからだわ

### 132. 失敗したる遁辭

「マリー」(下女の名)よ、「ピアノ」の上に少なくとも六週間の塵が積つて居るではないか

然し (aber,……doch) 奥さん、それは前の下女(私の女先任者)の罪であります。私は實にやつと三週間以來茲にあります(茲に来てより未だ三週間にしかならないのですから)

### 133. 虎の憶病なること

- 1) der Blutdurst 血を好む慾—— Blut は血、Durst は渴すること、渴望することなり
- 2) Es fehlt an etwas 或物に缺乏す(其れが或物に於て缺ける)
- 3) sich zu etwas anlehnen 或事にまで身構する
- 4) in die Flucht jagen 追ひ遣る—— in die Flucht は逃走に於てにして、jagen は追ふなり

虎は最も危険なる猛獸の一なり；如何となれば彼れの血を好む慾は飽かすべからずにある故に。然し人が亦彼を恐るゝことの、理由を大に (so sehr 左様に甚だ) 持つとは雖ども(人の虎を恐るゝは大に理由あることなれども)、然れども (so doch) 彼れの憶病なることの例に乏しからず(例に於て缺けぬ)。——嘗て東印度に於て一つの團體は少なき旅行(茲にては遠足の意)より休まんが爲に、或河の岸にて樹の蔭の下に坐した。不意に虎が近くの叢

林より現はれ出で而して團體の上へ飛ぶことにまで身構せし時に、總ての者が戯れ而して喜んでありし(虎の出で來りて飛び掛らんとせし時は丁度總ての者共が戯れ喜ぶ真最中なりしとの意)。總てが氣遣しく樹の後に押し合ひし；何人も逃ぐることを敢てせざりし、況や、此恐るべき動物の上へ飛び掛ることをや。そこで不意に、動物が集合したる人の上へ飛び掛かゝりし時の、其瞬間に於て一貴婦人が思はず識らず彼女の日傘を開きし而して彼(日傘)を其猛獸に差し付けし(猛獸に對して保ちし)。驚かされて虎が直に振り反り而して近くの蘆の密なる茂の間に消滅せり、それ(蘆)の動搖が尙遙に彼れの逃走の速さを認めしめし所の(蘆云々に反る)。——斯様に往往或猛獸に(取りて)新しき現象である所の、最もつまらなき物が此者(猛獸)を追ひ遣り能ふ、而して落ち付きて居ること、頓智とが往々(nicht selten 稀ならず)斯様なる場合に於て人命を助くべき爲の、最も確實なる手段である

### 134. さかねち

- 1) pensioniert (paughioniert と發音す) 恩給を與へられたる、恩給を受くる
- 2) nach etwas duften, riechen 或物の香がする(或物の方に匂ふ)

老いたる恩給を受くる少佐：久し振りて(永き時の後に)私は今日の祭典に(今日祭典にまで)復た私の軍服を着した

中尉：その臭ひが致します(それを人が嗅ぐ)、少佐殿部屋中(全き部屋)が樟腦と「ナフタリン」(藥名)との臭がします——それが爲に既に(私は)頭痛が致します



少佐：貴殿は間違つて居る、中尉殿。私の軍服は彈藥の臭ひがするのです。——貴殿が未だ其臭ひを知らぬ斗りです

### 135. 不愉快

- 1) Hochzeit halten 結婚式を舉ぐ
- 2) am Tage zuvor 前日 — zuvor は前の、am Tage は日に於てなり
- 3) wie üblich 例により — üblich は一般に又は通くの意なり

結婚式を舉げんと欲せし所の、若き地主に其前日一匹の牡牛が逃走せり而して捕へられ能はざりし。地主が出立せし而して牡牛に關して彼に電報を送る様に彼れの管理人に(本來は四格)申し付けし。——結婚式(三三九度の式)が済んで(經過して)ありし而して宴會(食事)の際に例により入り來つたる祝電が朗讀せられき；報知と又彼れの祝賀とを結合せんと欲せし所の、管理人の電報も亦その内に(多くの祝電の内に朗讀せられたとの意)。其電報に曰く(其電報が次の如く響く)：御目出たう、牡牛がつかまつた

### 136. 歌ふ樹

- 1) der Handelswert 價額 — Handel は商業又は貿易、Wert は價額なり

亞弗利加旅行者 Schweinfurt 氏の報告によれば亞弗利加の或範圍に於て土人が Sofar と名づくる所の、樹木がある、それは屢々歌ふ様なる音を響かしむることの、それで著名である所の。此ものは奇妙なる成立を持つ(此音は奇妙なる原因に依て起るものなりとの意)。此樹は即ち、

亞拉比亞の商人并に昆虫より尊重せらるゝ所の、樹脂を含蓄す、一ツのもの(前者と云ふ義にて亞拉比亞商人を指す)よりは其(樹脂の)價額の爲に、他のもの(後者即ち昆虫)よりは美味なる食物として(尊重せらるゝに反る)。此樹脂を得んが爲に昆虫より此樹の枝が多くの小さき穴に於て穿たる、(此樹の枝に多くの小孔を穿つを云ふ)。今や風が此樹の梢に於て吹き込む時には、其時には彼(風)が枝の小さき孔に於て含まる、而して是に依つて低き豎琴の絲の音に似たるかの奇妙なる歌ふ様なる音が成り立つ

### 137. 土耳其の金言

只だ段を踏んで (auf) 人が階段の上へ(高き處へ)登る——千度聞け、只だ一度話せ(千を聞いて僅に一を語れ)——實行なき賢者は雨なき雲の如し——憂苦なき人はあらず、若し斯の如き者あらば、然る時はそれは人に非ず——自分を搔く爲に、人は爪を持たねばならぬ——隣人の鶏は我等に鵝鳥と思はるゝ、(人の物は何にても善く思はるゝ、ことにして隣の苦菜など、云ふが如し)——捕へられぬ(自分を捕へしめぬ)所の、盜賊は正直なる男とせられて居る(正直なる男として値する)——千人の友多きにあらず、一人の敵少なきに非ず(千人の朋友は少なくある、一人の敵は多くある)

### 138. 思ひがけなき答

- 1) mit einem (ihnen) Geduld haben 或人に對して忍耐する——之を直譯すれば「或人と共に忍耐を持つ」となれども其意義は或人に對して忍耐することなり

簿記掛：旦那(店主様よ),今日は私があなたの店に御奉公してから丁度二十年目です(私が貴君の務に於て立つことの,それが二十ヶ年である)!

店主：どれ程長く私はおまへに對して忍耐したかと思ふことが辨るでしやう(如何に長く私が貴君に對して忍耐を持つたかを,そこで貴君が見る)!

139.

1) eine glückliche Ehe führen 幸福なる配偶を保つて行く、夫婦相合して幸福に世を送る

高尚なる娘：さて、お父さん、あなたが御満足なさるでしやう! まあ (da) 私の證書を御覽なさい：經濟學は：最優等；天文學は：優等；水彩畫と音樂とは：可

お父さん：それはゑらい、それは非常にゑらい。それで (nun) おまへの未來の人(配偶を云ふ)が尙少しく家政のことを理解し、煮たり「ミシン」縫をしたりすることが出来るならば、其時にはおまへ等は甚だ幸福なる配偶を保つて行くことが出来やう

140. 珍らしき無私慾

1) herbeifchaffen はこちらへ持ち來ること又は取り來ることなり、並にては徵發と譯すとも可ならん

2) einer Sache (二格) aufichtig werden 或物を見る、或物を認む — aufichtig は常に werden と結合して用ゐらるゝ詞にして通常二格を支配す

3) der eisgraue Kopf 白髪頭 — eisgrau は Eis (氷) と grau (灰色の) とを結合したる文字にして氷の如き灰色のと云ふ義なり、氷は純白ならざるを以て獨逸人は此色をも灰色と云ふ、獨逸人の所謂灰色の頭とは邦語の所謂白髪の頭のことなり(第六輯 74 節の 4 参照)

4) sich zu etwas anbieten 或事を承諾す — は或事に自分の一身を捧ぐるを云ふ  
5) unnötiger Weise (二格)無用に — unnötig は無用なる、Weise は仕方なり、而して二格にしたるは名詞を副詞狀に用ゐたるが故なり

獨逸國を荒せし所の、七年戰爭に於て一騎兵大尉は馬糧の徵發にまで命令せられき。彼は彼れの騎兵中隊の眞先に立ちて(先頭に於て)彼に指定せられたる土地、(即ち)或淋しき谷の方へ赴きし、そこには人が叢林よりは何も見ざりし所の。彼は其間に一つの貧乏らしき小屋を認めし、打ち敲きし、而して白髪頭の老人(白髪頭の頭を持つたる或年取つたる男)が進み出でき(或は文法上の主言)。父よ、と彼に(本來は四格)將校が話しかけし、私の輩(兵卒等のことを云ふ)が馬糧を取り來り能ふ所の、田野を私に示せ! — 直に、と老人が答へし、嚮導者たることを承諾せし而して騎兵中隊を谷を下つて導きし。彼等が凡そ四分の一時間行程を行軍したりし後に、彼等は或美なる麥畑に(本來は四格)出逢ひき。— これは、我等が探す所の、其物である、と騎兵大尉が呼びき。— 尙一瞬間御辛捧を、と老人が言ひし、さうすれば (und) 諸君が満足させらるゝであらう (sollen)! 彼等は夫れ故に先へ進軍せし而して道の四分の一哩の後に(四分の一哩の道を進軍した後にとの意)或他の麥畑に (bei) 到着しき。騎士が馬から下り、田野を刈り、麥を馬の上へ縛り付け、再び乗り而して騎し去りき。そこで騎兵大尉は彼れの嚮導者に向つて (zu) 云ひし：よき父よ、おまへは我等を無用に進軍せしめた；最初の田野は此ものよりもよりよくありき。— それはさうかも知れませんが(其事は蓋しあり能

ふ), 然しながらそれは(最初の田野は)私に屬せぬ, と老人が言ひき

### 第十九和文獨譯問題解答

1. Mein Onkel bleibt während des Sommers auf dem Lande.
2. Er wird morgen auf die Jagd gehen.
3. Wir wollen in das Zimmer gehen.
4. Wir lernen in der Schule Deutsch sprechen.
5. Sie gehen um acht Uhr in die Schule.
6. Durch das Fenster sieht deine Mutter.
7. Der Fisch lebt im Wasser.
8. Der Fischer wirft Net in's (in das) Wasser.
9. Nach langer Abwesenheit bin ich erst gestern zurückgekommen.
10. Kommen Sie morgen Nachmittag zu mir!
11. Seid ihr aus der Stadt gekommen?
12. Ich habe dieses Brief von meinem Bruder erhalten.
13. Mit der Axt fällt man die Bäume.
14. Wir schreiben mit der Feder.
15. Dieses Buch ist für mich zu schwer.
16. Wir wollen über die Brücke nach Hause gehen.
17. Das Bild hängt über der Thür.
18. Die Wandtafel hängt an der Wand.
19. Unter dem Tische schläft eine Katze.
20. Ein großer Baum steht vor dem Hause.
21. Der Schüler trat vor seinem Lehrer.
22. Unter meinen Freunden ist er der jüngste.
23. Wer klopft an die Thür?
24. Hinter dem Hause ist ein großer Garten.

### Zeitung (新聞)

1. 親王小松宮は San Sebastian へ赴きたり, 彼處より Madrid へ旅行すべき爲に, 其處(Madrid)にては彼が若き王 Alfonso 十三世に菊花章を捧呈すべき所の

1) Alfonso XIII. は茲にては三格なるが故に Alfonso dem Dreizehnen と讀むべし

2. 世界中の最小の自働車を亞米利加人 Coof 氏は所有するならむ. 此僅に (nur) 四呎の長さの車は一時間に十英里を經過す. Coof 氏は其二人の小さき小供と共に之を運動用に使用す

1) Mr. は英語 Master の略にして獨逸語の Herr と同意義なり

3. 懷中猿. 常に新しき娛樂を考へ出すよりは其他に何も用事のない(其他に何も爲すべく持たぬ)所の, 「ニュー、ヨーク」の優美なる貴婦人達は現今彼等の散歩の際に小さき懷中猿を携帯す(自分に添ふて擔ふ). 此動物は實際普通の「ポケット」に於て暮す程, 左様に小さくある. 彼等は長き柔き毛と房々したる(生ひ茂りたる)尾と, きらきらしたる眼とを持つ, 而して其體は只だ四五寸長くある. 顔は二十五錢貨より大きくあらぬ. 此動物は甚だ馴れ馴れしくある而して殆ど或鳥の如き聲を有す

1) Taschen-Affchen 懷中猿 — Tasche は「ポケット」なり, Affchen は小猿なり

2) Unterkunft finden 暮す — Unterkunft は生計, 衣食住, finden は見出すなり

3) hell funkeln きらきら輝く — hell は明なり, funkeln は輝くなり, 花火を散らすなり

4. 本年(今)九十一歳になれる「フリストール」の大孤  
 兒院の創立者「ゲオルク、ミッセル」氏は近頃報告せり、  
 未だ嘗て彼れの事業に對し寄附を何人にも願はなかつ  
 た(一人をも寄附の爲に願はなかつた)所の、彼は現今六  
 十年以上管理する所の、彼れの建設(即ち孤兒院)に於て  
 十二萬三千の孤兒を養ひ、着せ而して教育したことを(報  
 告せりに反る)。其費用は殆ど七百萬弗を總計す

1) Dollars は Dollar の複数なり(第五輯新聞 19 の 2 参照)

5. 「アラジル」の咖啡 千八百九十六年に「ブラジル」の  
 「サントース」港が亞米利加の市場に凡そ二千萬弗の價で  
 而して一斤に付12 $\frac{1}{2}$ 錢の平均相場で一億六千五百八十五  
 萬三千七十四斤の咖啡を供給した。歐羅巴は六千七百  
 萬弗の價で而して17,71錢の平均相場で三億七千八百八  
 十四萬千二百二十七斤を得たり

6. 駝鳥の強さ。吾人は(man)、「アビシニア」の土人が駝鳥  
 を(本來は二格)兩脚の騎乗動物として使用することを、時  
 々旅人より聞きたり。此鳥がそれにまで(騎することに  
 まで)充分力を有することを、近頃 California 州 Bajadene の  
 一新聞通信員は證明しき。彼(通信員)は成長したる駝鳥  
 に乗り而して此ものにて(此ものに乗りにて)一百「ヤード」  
 遠く騎行せしのみならず、此姿勢に於て(駝鳥に乗りた  
 る姿勢にて)己れを撮影せしめき(寫眞を取らせたり)

1) hin und wieder は hin und her と同意義にして「あちら、こちら」又は「時々」の意  
 なり

2) Yards は英語にして Yard の複数なり

3) nicht nur....., sondern auch 何々のみならず——一語毎に之を直譯すれば nur は  
 「のみ」、nicht は「ならず」、sondern は「却て」、auch は「亦」なり

7. 事物の變遷驚くに堪ゆ(如何に總てのものが遷り  
 變ることぞ)。見苦しき煤多き炭、その所有を總ての國  
 民が渴望する所の、炭が高價なる黒き「ダイヤモンド」(即  
 ち石炭のことなり、蓋し石炭は誠に有益なるが故に斯  
 くの如く云ひたるなり)となり得るであらうと云ふこと  
 を、誰も嘗て豫想しなかつた。尙十四世に於て、倫敦にて  
 は不潔な濃煙を發する石炭を焚くことが嚴しく禁じら  
 れし而して其叛人は高き罰金を以て課せられねばなら  
 ざりき。やつと蒸氣機關の發明と共に世人が(man)石炭  
 を尊重することを、始めた

1) sich nach etwas sehnen 或事を渴望す——sich sehnen は前置詞 nach を望む動詞なり

8. 女子の特權は、平均男子よりも高齡に(本來は四格)  
 達することである(達することのそれである)。何人にて  
 も己れの知己の範圍に於て見廻す所の者は、鰥夫よりは  
 より多く寡婦があること、即ち(also)女子の生存期は男  
 子のそれ(生存期)よりは長きものであると云ふことの、  
 觀察を爲す。綿密なる統計は、百歳以上を數ふる所の、  
 六十六人の内、四十三人は女性に而して二十三人は男性  
 に屬することを、證明した。近頃の報告に依れば加之四  
 十一人の百歳の男性及び百十二人の百歳の女性が一萬  
 人の上へ來る(一萬人に付百歳の男子四十人、百歳の女  
 子百十二人の割合なりとの意)

1) das Privilegium 特權——本文の如き場合に於ては通常は特性と云ふべきを長壽  
 をも一つの權利の如く見做し斯の如き文字を用ゐたるものなり

2) eine längere 及び die の下には Lebensdauer を略せり

9. 軍艦の上にて最近の英國の發火演習は、全速力に於ける(充分なる航行に於てある所の)船の大砲より發砲せらるる所の、每一百發の内、三十一發が平均命中することを證明した

10. 電氣市街鐵道及び自轉車に依つて、我國(米國の事なり)の多くの馬及び騾馬(馬と驢馬との雜種)が餘分になつた。馬及び驢馬の價は千八百九十二年以來半分も下落したことを、農業課が報告す、馬の下落高は五億弗而して驢馬のそれは(ie 下落高)は八千萬弗と見積らる

11. 小供掠奪者たる鷺。二三週間以前に四歳の一小女はすんでのことに掠奪を好む鷺の獲物となつたであらう。それ(小女)が數人の他の小供等と地の上で遊びし間に、突然一羽の鷺が射下り來りし、叫ぶ小供を着物に於て掴み而してそれを空中を通して自分と共に持ち去りき。然しながら幸にして只だ短距離に過ぎざりき(近き距離の上)。想ふに、彼は尙一層しつかり捕へんと欲せし(尙より固く握むことを得んと欲せし)而して夫れ故にその小供を彼(鷺)に適當と思はる、場所にて再び地上に卸しき。此死ぬる程驚きたる小供を再び彼れの爪に於て掴むことの、その事が然し彼に達せざりし前に(達せし前に)大なる童兒が走り來つたりし、それは猛鳥を追ひ斥けし所の、此童兒等の三人が鷺との此戦から悪しき搔き疵(爪の負傷)を得た

1) wie es schien 想ふに。—— 那が見ゆる所では、それが思はるゝ所では

12. 燕の飛行は電光の通過よりも七倍速し。一觀測

### 獨逸語學講義規則

— 本社は通信教授の方法によりて獨逸語學の普及發達を謀り學校に入り親しく講義を聽問すること能はざるもの、爲に講義録を發行す  
— 本社の講義録を獨逸語學講義と稱し毎月一回二十五日發行す  
— 講義録の講修期を二ケ年とし其學年は五月に始まり翌年四月に終るものとす  
— 講修者にして二年の講修を終り其修業證書を望まるときは試験の上之を送與すべし  
— 但試験は通信試験に依る其期日及手續は學年末の講義録に廣告す  
— 入會金は金貳拾錢とす  
— 入會せんとする者は入會票に住所姓名を(楷書にて明瞭に)記入し入會金及講修費を添へ申込まるべし  
— 但講修費は一ケ月金參拾錢とし毎月十日迄に前納せらるべし  
— 但し一時に半ケ年以上を前納せるときは左の割合による(郵券代用は一割増)

— 一半年分 一金壹圓七拾錢

— 一壹ケ年分 一金參圓參拾錢

— 講修費を拂込まるときは引續き講義録を配付するを以て別に受領證を送付せず、特に領收證を望まるときは返信料を送らるべし  
— 但し講修費盡きたるときは封紙に朱印丸形を押し通知すべし  
— 講習者の都合により中途廢學せらる、とき既收の講修費の殘餘ある場合には之に對する講義録を配付し現金の返戻を爲さず  
— 講義録中に疑問あるときは通信を以て質問することを得  
— 但し質問書は字體明瞭に記し講義録の號數並に頁數を必ず示し返信料を添付せらるべし  
— 質問の趣旨不明瞭なるときは講義録の意義了解し易きとき又は講義録以外に涉るときは答案を與へざるべし  
— 質問の有益なりと認むるものは其答案を講義録に掲載し各自の參考に供すべし  
— 講修者は住所姓名等を變更したるときは新舊住所氏名を併記し直ちに通知せらるべし

## 申込所

東京市牛込區中町三十五番地

獨逸語學雜誌社

谷口秀太郎 立案監修  
辻高衡

# 獨逸語學講義

第八輯

## 附錄

教師 (Lehrer)

寄贈

獨逸語學雜誌社發行

# 獨逸語學講義 第七輯

注意

廣告料 一行五號活字二十四字詰前金拾錢、半頁前金參圓、一頁前金五圓とす、一回以上連載は二割を減す  
領收證 代金領收證は別に送呈せず、講義の到達を以て其證とす、但し領收證入用の方は別に郵券若しくは端書を送らるべし  
郵券代用 本社への御照會は必ず郵券若しくは端書を送らるべし  
照會 郵便小爲替には受取人欄内に(牛込區中町三十五番地獨逸語學雜誌社)と必ず記入せらるべし  
爲替 本誌は前金にあらざれば一切發送せず、前金盡きたる節は封に朱〇を押して之を通知す  
前金 一冊金參拾五錢(見本)  
定價 每月一回二十五日  
發行日

●本講義規則入用の方は郵券貳錢送附の事

不許翻刻

發行所 獨逸語學雜誌社  
東京市牛込區中町三十五番地  
印刷所 東京築地活版製造所  
東京市京橋區築地二丁目十七番地  
印刷者 野村宗十郎  
東京市京橋區築地三丁目十五番地  
編輯者 東儀季治  
發行者 兼

明治三十五年十一月三十日發行  
明治三十五年十一月二十九日印刷  
明治三十五年五月二十七日第三種郵便物認可

明治三十五年五月二十八日內務省許可

## 凡 例

1. 本誌は之を教科及び教師の二編に頒ちたれば讀者は番號を透うて雙方を對照すべし。
2. 外國語の修學は其初期に於て正確ならんことを要す。若し之を誤るときは、後に至り、進歩を見ること難し。故に前章を充分に知得せずして後章に移るが如きことあるべからず。
3. 本誌の教科は最も簡明に記述したれば、讀者は成るべく自己の力を以て之を攻究し、而して後教師の編を開き、誤なきが否かを質すべし。
4. 獨逸語は之を變則的に修學する者にも、一通り文法上の知識を養はざるべからず、而して文法の要は應用にあり、故に本誌に載せたる和文獨譯練習問題の如きは決して之を忽にすべからず。
5. 和文獨譯練習問題は重に文法上一部の應用に留まり其數も隨つて多からざれば、讀者中餘力ある者は教師の編中にある譯文を獨譯し、之を教科と對照して誤の有無を質すべし。

獨逸語の發音を正確に授けんか爲に作りたる新文字左の如し。

1. 「**オ**」は *ö* の音を表さんが爲に「**オ**」と「**エ**」とを合して作りたるものにして「**オ**」を發する口附を以て「**エ**」と發音すべし。
2. 「**ウ**」は *ü* の音を表さんが爲に「**ウ**」と「**イ**」とを合して作りたるものにして「**ウ**」を發する口附を以て「**イ**」と發音すべし。
3. 「**チ**」及び「**ツ**」は *ti, tu* の音を表さんが爲に作りたるものにして「**ト**」の口の構へを以て「**チ**」及び「**ツ**」と發音すべし。
4. 「**ヂ**」及び「**ヅ**」は *di, du* の音を表さんが爲に作りたるものにして「**チ**」「**ツ**」を濁りて發音すべし。
5. 「**ホ**」は *hu* 又は或る場合に於ける *ch* の音を表さんが爲に「**フ**」と「**ホ**」とを合して作りたるものにして「**ホ**」の口附を以て「**フ**」と發音すべし。
6. 「**ラリルレロ**」は舌端を上顎に着けて而して後「**ラリルレロ**」と發音すべし。

## 141. 父の訓戒

- 1) der Hohenstaufe (Hohenstaufen) は十一世期の中頃より起りたる獨逸の王家の名にして其祖は Friedrich von Biren なり
- 2) zum Unglück gelangen 不幸となる — 不幸にまで達す
- 3) wehe dem Lande (einem) 國(或人)は憫然なり — ist dem Lande (einem) wehe thun [國(或人)に腦みを爲す]の略なり

Hohenstaufe 家の皇帝 Friedrich は彼れの邪道に陥りたる子息 Konrad に次の如き感銘すべき言葉を書き送りし：國王も他の人間の如く生れ而して死す。彼等(國王)が今德行及び智識に於て彼等(他の人間)に優れて居らぬならば、其時には彼等(國王)は、支配することを得ずして(支配すべき代りに)、支配せらる、而して彼等(國王)の無智と不德行とは彼等(國王)に只不幸となるのみならず、却つて人民等をも共に腐敗の中に引き入れる。故に、宜なる哉聖書に曰く(道理を以て聖書が言ふ)：その國王が小供である所の、國は(本來は三格)憫然なり！ 汝は將來地球上の或人間よりもより多くの國民を支配せねばならぬ、夫れ故に、汝は精神及び徳の優れたることに依つて而して血統及び名義に従つてのみでなく國王であることの、其方へ怠らず勉むべきことは、汝に缺ぐべからざる責任なりと

## 142. 愛國心の境界

- 1) Champagner (發音 schangpanjer) 「シャンパン」酒 — は佛國の州名 Champagne (發音 schangpanje) より命したる名にして Champagner Wein (シャンパンエ州の酒)の略稱なり
- 2) einen nach etwas fragen 或人に或事を問ふ — fragen は nach を要する動詞にして或人を或事の方へ問ふとして用ゐらる。

Bismarck 侯が物語る：私は想ひ起す、私が嘗て陛下の許にて食事せし時に、其時に私は私の「コップ」の中に、私に疑はしく思はれし所の、少しの「シャツパン」酒を持ちき。侍臣がその壺を以て再び巡廻をなせし(酒を注ぎ廻はりし)時に、私はその商標を窺ひ見やうと試みし、其事(窺ひ見ると)は然しながら私に達せざりし、何となれば壺が「ナフキン」を以て巻きつけられてありし故に。私はそこで(darauf)皇帝の方へ向きし而して彼に(本來は四格)商標を問ひき

皇帝が答へし：それは獨逸の Schaumwein (酸酔酒の意)である；朕は彼を愛國心より飲用す

それに對して私は皇帝に答へし：陛下よ、私に於ては愛國心が胃の邊に於て止むと

### 143. 一つの和合もなし

Friedrich 大王は或日不意に或村の學校へ進み入りき。教師は直に王を認識せし(國王であると云ふことを識りしとの意)、然しながら鄭重なる(深き)敬禮を爲すべき代りに、彼は君主に僅に(nur)點頭せし、亦彼れの天鵝絨の頭巾をも被つた儘で居りし而して、彼が暫くの後に小供等を解散せしめしまで、靜に先へ教授しき。然る後に初めて(erst)彼は彼れの頭を露出せし(脱帽せしとの意)、鄭重なる(深き)敬禮を爲し而して言ひき：陛下は私の不敬を許せ！何となれば若しも、私の上に尙或人があると云ふことを、小供等が知るであらうならば、其時には全く彼等(小供等)との和合があらぬであらう故に(小供等が我を馬鹿にして居り合ひ難きに至らんととの意)

### 144.

- 1) etwas zum Singen bringen 或物を歌はせる — 或物を歌ふことにまで持ち來たす
- 2) so.....auch 左様に(甚だ)何々すと雖ども亦 — so は auch と結合するときは通常「とは雖ども」の意味を有す、但し auch は時としては其文章中にあらずして他の文章中に置かるゝこともあり、即ち本文の如き是なり

始めて洋琴を見た所の、或印度人は、其ものを彼れの同族に次の如く記述せし(洋琴のことを次の如く書き送りしとの意)：白哲人種は、甚だ大にして三本の脚を有する所の、動物を所有す。彼等(白哲人種)は、若しも彼等が彼れ(動物)の白き齒の上を — 二三のもの(即ち二三の齒)は亦黒くある — 指を以て打ち廻る時には、それを歌はせ能ふ。然る時には一人の男子又は婦人、往々亦只一人の弱き小供でもこの動物の開きたる口の前に、坐わる、而してそれ(動物)は直に歌ひ始むる。それ(動物)は鳥よりも遙により聲高く歌ふ、然しながらそれ(動物)は、人がそれを曳き摺り去らぬならば、決して其場所から動かぬ、而して亦、彼れの口が甚だ大きくあるけれども、噛まぬ

### 145. Socrates と Xenophon.

- 1) Socrates は希臘の有名なる賢人にして耶穌降誕前四百七十年 Athen に生る、一彫刻師の子なり
- 2) Xenophon は希臘の將軍にして且つ歴史家なり、耶穌降誕前四百三十四年頃に生る、Socrates の門人なり

Socrates は、秀でたる天才を有する(von)立派なる若者なる、Xenophon を彼れの交際の内へ引き入るべく望みし。或時彼(Socrates)は彼(Xenophon)に狭き街道にて出遇ひ而し



て彼に己れの杖を突き出しき(彼れの前に杖を突き出して道を遮りしとの意)。若者が立留まりき。どうぞ私に云へ、何處で人は粉を買ふか、と Sofrates が始めき(言ひ始めしとの意)。市場で、と答がありき。而して油は? 同一の處で、併し賢且つ善になる爲に、人は何處へ行くか。若者が黙し而して答に就いて考へし。私に従ひ來れよ、私がそれを汝に云はうと思ふ、と賢人(Sofrates)が話しき。其後この兩人は親密なる友誼を結びし、而して Xenophon は後に著述家及び將軍として當世(其時代)及び後世に於て大に尊敬せられし(高き尊敬に於て自分を置きし)所の、男となりき

### 146. 金子か勳章か

- 1) Friedrich II. は茲にては三格なるが故に Friedrich dem Zweiten と讀むべし
- 2) wie sie は welche (それは何々する所の)と同意義に解すべし
- 3) eines Leutenants erwähnen 或中尉に就いて記載す—— erwähnen は二格を支配する動詞なり、故に eines Leutenants とせり、斯の如き場合に於ける二格は「何々に就いて」又は「何々の事な」と譯すべし
- 4) etwas verdienen は或物を得る價あり、或物を得るに該當す杯の意なり
- 5) einen zu sich bescheiden 或人を自分の所へ呼び寄せる—— bescheiden は kommen lassen と同意義にして「來らしむ」又は「呼び寄せる」なり
- 6) Er (Einer, Ihm, Ihn) 汝、お前——此語はもと三人稱男性の單數(er)を大文字にて書し二人稱としたるものにして總て眼下の者に對して用ゐらる(第六輯 85 の 4 参照)
- 7) Friedrichsdor は古き金貨の名にして十七「マルク」に當る、本文に 3 の 語尾あるは複數の形なり
- 8) Verdienstorden 勳章—— Verdienst は勳功、Orden は勳章又は單に章の義なり
- 9) Verzeihen Ew. Majestät! 仰では御座りますが(陛下許せよ)—— Ew. は Euer の古語 Euer の略字なり、茲にては女性の一格なるが故に Eure と讀むべし、verzeihen は往々人の言葉を遮ぎらんとする時又は之に對して反對の意見を述べんとする時杯に人に許容を乞ふ辭なり、即ち邦語にて「仰では御座りますが」「失禮では御座りますが」又は「中言では御座りますが」杯と云ふが如し

大將 Seyblich が嘗てかのより小さき戰鬪の一に就いて Friedrich 第二世に報告を爲せり、それ(戰鬪)は七年戰役に於て殆ど毎日起りし所の、而して其際よき指揮と模範たるべき勇敢なることに依つて卓んで而して夫れ故に恐くは一つの勳章を(得るに)價した所の、一中尉に就いて賞揚して記載せり

王は其若き士官を自分の處へ呼び寄せしめし而して打ち解けて彼にまで云ひし:

おまへは私の聞いた處では勇ましく動作した。私はおまへをそれに對して賞せんと欲す。茲に百 Friedrichsdor がある而して茲に勳章がある。おまへは撰べよ

暫くも考へることなく、士官が金子の方へ掴みき。

名譽を汝は併し身體の内に持つて居ない様に見ゆる(おまへは己れの身に少しも名譽を持つて居ない様だとの意)、と王が不満に云ひし

士官が憶面なく答へて曰く、仰では御座いますが、私は負債を持つて居ります而して私は先づ彼等(負債)を拂ふことを、名譽が望みます(名譽上負債を返却せねばならぬとの意)、勳章を私は已に二三日の内に取りまじやう

よし、吾俸よ、おまへは勳章をも只等しく持ち行け、おまへは彼(勳章)を(得るに)價す、と Friedrich が士官に肩の上を叩きつ、言ひき

### 147. 天 則

- 1) Dafür kann ich nichts それはどうも致し方はない(それに對して私は何も能はぬ)

女料理人：私が近頃あなたの處で買った所の、十二個の卵の内六個は腐つて居ました!

女小賣商人：ねいさん(親愛なる小供よ——親愛なる意味にて總て年少の者に向つて用ゐる)、そりやあどうも致し方はない。丁度腐つた(怠惰なる)人間がある様に、亦腐つた卵もあるのです! そりやあ自然の法則です

### 148. 蠅の飛行

1) vermögen は können と同意義の言葉なり、然れども此語は常に zu を附したる動詞と結合す、故に sich fortzubewegen vermögen とせり

通常の室内の蠅は最近の觀察に依れば一秒間に三十回の羽ばたきをなす、(即ち)一時間には拾萬八千回となる(それは一時間には拾萬八千回を爲す)、速力、それを以て彼(蠅)が飛行し(飛行すべく)能ふ所の、速力は殆ど或急車列車のそれ(速力)に匹敵す、彼(速力)は即ち一時間に三十七哩を計算す。夫れ故に若しも蠅が絶へず(immer)同一の方向に於て飛行するであらうならば、其時は彼(蠅)は二十八日よりより少なき日數にて世界一週の旅行を爲すであらう。悲しきことには(leider)未だ誰も蠅をこの遠距離の飛行にまで仕込み能はなかつた

### 149. 魚の年齢

1) Gehörsteinchen 耳石——Gehör は耳、聽官又は聽くことにして Steinchen は小石なり、聽道中に在る石灰鹽質の結晶體なり

2) 3. B. は zum Beispiel (例へば)の略なり

魚の年齢を人は彼等の大きさに於て識ることが出来る、少なくとも若き魚のそれ(年齢)を(識ることが出来る)

る)。老いたる魚に於ては年齢がその大きさに依ては最早充分に定められぬ(自分を定めしめぬ)、何となれば魚は彼等の後年(後の年齢)に於ては最早成長せぬ故に。或魚の年齢を充分に定むべき、方法を、近頃 Senfen 博士は發見した。魚は即ち彼れの頭の内に耳石を持つて居る、而して此もの(耳石)は、樹木と同様に、年輪を形成する(生じ而して形作る)、それ(年輪)に於て年齢が充分に察せらる、(自分を察せしむる)所の。獨逸の海の漁業の利益の爲に、委員會が成り立つ、それに亦 Senfen も屬する所の。これ等の(die)探究者が捕へたる魚に於て爲した所の、實驗は大部分驚くべくある;即ち(fo)例へば人が、九歳よりより年取りてあつたであらう所の、一尾の Stunder をも未だ捕へなかつた(Stunder は長壽の魚なりと言ひ傳ふれども九歳以上のものはなかりしとの意なり)

### 150.

1) einen in Verlegung setzen 或人を狼狽させる——或人を狼狽に於て置く

學者 Bentley は彼れの交際に於ては非常に未熟で且つ狼狽して居りき; (夫れ故に)彼は殆ど未だ嘗て優美なる(貴婦人杯の澤山來る)集會へは來なかつた。嘗て彼が或伯爵夫人の許に招待せられたりし時に、彼は其處にて大なる集會に(本來は四格)出遇ひき。此事(即ち多くの人が集會したること)は、彼が非常に驚かされ而して間もなく再び去りし程、彼をそれ程狼狽せしめき。あの奇異なる男は誰でありしか、と或人が問ひき。——それは、椅子が「ヘブライ」語又は希臘語で何と云ふかを、(彼は)知

る位、それ程博識なる男である；然しながら彼は、如何様に人が其上に座わらねばならぬかを、知らぬ、と伯爵夫人が答へき

### 151. 平時に於ける Bur 人の生活より

- 1) der Bur は南亞弗利加の住民にして Transvaal 人杯のことを云ふ
- 2) zu Werke gehen 仕事に取りかゝる、着手す — zu Werke は仕事にまで、gehen は行くなり
- 3) Familienglieder 家族一同 — Familie は家族、Glieder は Glied (關節、四肢、會員等總て物體又は一團體の一節を爲すものを云ふ)の複數にして、茲にては家族の各員を云ふ意なり
- 4) Namenszug 名前 — Zug は列の義にして、Namenszug とは一列に書き認めたる名のことなり
- 5) zustande kommen 出來上る、成功する

銃を Bur 人はよく使ふことが出来る、然しながら筆を(使ふことは)出來ぬ。若しも Bur 人は己れの名を或書き物の下に書かねばならぬ時には(或書き物に署名せねばならぬ時には)、彼は非常に謹慎して(考深く)仕事(即ち書くこと)に取りかゝる。机の隅は注意して拭き清められ、家族用の聖書が其上に置かれ而して紙は恭しく擴げらるゝ。家族一同が机の周圍に押し集り而して、來るべき所の物を(本來は二格)片唾を呑んで待つ。靜にせよ、父は彼れの名を書かねばならぬ、と母が小供等に耳語する。そこで(mun)父は筆を握む、袖を彼(父)は己に搔きあげた、而して除々に彼は彼れの名前を書く。凡そ四分間に於てそのこと(名前を書くこと)が出來上る、而して溜息をつきながら彼は其製作(即ち手蹟)を眺め而して満足して起ち上る。

### 152.

- 1) mich dünkt 思はる — 之を直譯すれば「私を思はせる」なり
- 2) Majestätsverbrecher 大不敬漢 — Majestät は帝王の尊稱にして、Verbrecher は犯人の義なり、即ち皇帝の威嚴を毀損したる罪人を云ふ

Napoleon 一世は Sena の戦の前の夜に於て露營を檢閲せし時に、彼は一人の若き擲彈兵が(本來は四格)、焦げたる半分食ひ盡したる馬鈴薯を手を持つて(手に於て)、火の側に寢入りたるを見出しき。——惘然なる小供等よ、と皇帝(Napoleon)が云ひし、睡眠は彼(擲彈兵)を食事の際に襲ふた(彼は食事をしながら寢入つて仕舞つたわいとの意)。馬鈴薯よ！八日以來彼等(兵士等)の唯一なる食物よ！併し、彼等(馬鈴薯)がうまさうに匂ふ様に、思はれる(馬鈴薯が未だ火中に在ると見えて香ばしき匂がする様じやとの意)！斯の如く言ひて(此言葉を以て)彼は劍の尖を以て一個の果實(即ち馬鈴薯)を火中より取りし而して食すべく)始めき。其間にかの兵士が醒めたりき。睡惚けたる眼を以て彼(兵士)は一人の招きもしない者が(本來は四格)彼れ(兵士)の食物を滅する(食ひへらす)のを見し。誰が汝に、私の馬鈴薯の内から取ることを、許したか。——私は飢を持つ、同僚よ、と皇帝が云ひし；汝は私に、尙一個の馬鈴薯を取ることを、屹度(idon)許して呉れるであらうな。——左様さ(mun)、若しも汝が空腹であるならば、其時はそれが稍異つて居る(汝が空腹ならば致し方はないがとの意)；然しながら然る後には(一つ貰ふたらとの意)；右向け右！(右へ向いて歸れとの意なり、兵士なるが故に斯の如く號令の言葉を用ひたるものなり)——然るに

(dennoch) 此確定せる指示にも拘はず皇帝が更に手を着けし時に、兵士は遂に怒つて立ち上り、皇帝を襟に沿ふて掴み而して彼を荒々しく揺ぶる——此瞬間に於て彼(兵士)は彼(皇帝)を認識する(皇帝たることを識りしとの意)——吾皇帝よ、吾皇帝よ！あなたは私を銃殺せしめよ、私は大不敬漢である、私は死を願ひます！——静にせよ、他の者等を醒すな、吾は汝に怒りはせぬ！——只骨折を以て、此擲弾兵を静むべき、そのことが Napoleon に達せし(Napoleon はやつとのことに此擲弾兵を静めることが出来たとの意)、それ(擲弾兵)は今や非常なる(最も大なる)熱心を以て總ての馬鈴薯を火中より取り出し而して聲高き謝罪を以て彼等(馬鈴薯)を皇帝に捧げし所の(擲弾兵云々に反へる)。汝は蓋し黙して居らうと思へ！吾は汝に怒らぬ；従順にあれ而して誰にも此出来事を物語るな——斯く言ひて(此言葉を以て)彼は向き變り而して彼れの檢閲を續けき

### 153. 騎士の一節

(騎士に関する出来事の一節)

- 1) gefangen nehmen 擒にする——gefangen は捕へてなり、nehmen は取るなり
- 2) Glogau は普國の Silesien 州にありて Ober 河に接したる都名なり
- 3) Er 汝(本輯 146 節の 6 を見よ)

有名なる騎兵大將 Seydlitz は旗手として往々主張したりし、馬と共に擒にせらるゝ(自分を擒にせしむる)所の、騎士は鈍物で且つ怯者であると。或時 Friedrich 大王の鹵簿の内に加はりて (in) Glogau 城砦の橋を越えて騎しき。彼等(鹵簿中の人々)が橋の中央にありし時に、王の

合圖に依つて彼等の前後の翻橋(ハネバシ)が引き上げられし、而して Friedrich が、汝は吾が捕虜である、と言ふて(言葉を以て) Seydlitz に向きし

まだです、陛下！と大膽なる騎士が答へし、彼れの馬に拍車を與へし、橋の欄干を越えて Ober 河へ飛び込みし而して岸へ遊びし。旗手として彼は此大河の内へ飛び込みたりし而して騎兵大尉となつて再び出で來りし(河中へ飛び込む際には一旗手に過ぎざりしも王彼れの勇敢なるを嘉し直に騎兵大尉に任じたるを以て斯の如く云ひたるなり)、斯様に甚だしく王に此騎士の一節(一出来事)が氣に入らりき

### 154. 結婚の廢止

1) Enslaverei は奴隸にて居ること、奴隸の狀態杯の意なれば之を「奴隸」と譯したれども人にはあらざるなり、注意すべし

巴里にては或婦人會に於て議會への (an) 建白書が決められし、それ(建白書)の内には結婚の廢止が請求せらるゝ所の。結婚は最も悪しき奴隸(奴隸的のこと)である、而して奴隸は併し廢止せられて居る。各の結婚上の約束は、一時ですらも、禁せられねばならぬ而して一ヶ年に至る迄の禁獄を以て罰せられねばならぬ云々 (u. f. w.)。小兒等は母の名を襲ひ(擔ひ)且つ公なる建設に於て養育せられねばならぬ。而してそれを此婦人等は自由と名づける！然しながら人間は、若しも彼等がもとの(古き)神の秩序及び自然の秩序を見捨てるなれば、斯の如き愚なることに到る。彼等が己れを賢なりとする故に、

彼等は愚者になれり、と云ふ聖書の言葉は常に (eben) 誠  
で留まる

### 155. 紙の發明

- 1) wenig は茲にては nicht と同意義なり
- 2) auf den Gedanken kommen 思ひ付く——考への上に来る
- 3) zc. は etcetra (等、採)の略なり

昔の埃及人は「モーゼス」の時代に一種の紙を持ちし。彼等は蘆に似たる植物なる、紙樹よりそれを拵へし。此植物の繊維の細微なる層が「ナイル」河の水を以て潤ほされたる盤の上に擴げられ而して熱き粘着力ある「ナイル」河の水(熱き水とは湯のことなり)を以て塗られし。第一の層の上に人が第二の層を置き、兩者を壓搾し、之を日光に乾かし而して之を牙を以て滑澤にせし(此處の sie は beide を指す)。David の時代に猶太人及び隣國の國民等が獸皮の巻物の書物を持ちき。其後皮が石灰を以て熱せられ而して滑澤にせられき。人が彼等(皮)を小亞細亞の Pergamus (Pergamon) 市より Pergament と名けし、其處 (Pergamon) では人は其術を最もよく理解せし所の。印度人は耶蘇降誕前已に木綿紙を發明したりき。此物は併し丈夫で(保つべく)あらざりし。人がそれ(木綿紙)にまで暫くの間木綿の襪褌を使用したりし後に、或獨逸人は麻布の、(襪褌)でもそれが出来ぬか(行かぬか)、と思ひ付きし。而してそこに見よ(注意を喚起する言葉)、それが出来し。此發明は千三百年頃に當る(落つる)。此麻の紙は最も堅牢にして最も便利なり、此物なかりせば活版術は只徐々の進歩を爲したであらう。然るに近頃木綿、樹木の繊維、

葉等の如き他の物質も亦共に紙にまで使用せらる：これより製せられたる物は然れども中々あんなに堅牢ではない

### 156. 信心の試験

- 1) die Kirche leer finden は之を直譯せば「寺を空しく(空しくあるを)見出す」にして、finden には斯の如く四格の名詞と一個の形容詞とを其補足言として用ゐらるゝと屢なり
- 2) einem nach etwas fragen 或人に或事を問ふ(或人を或事の方に問ふ)——fragen は斯の如く四格の補足言及び前置詞 nach を望む動詞なり(本輯 142 の 2 を見よ)
- 3) bekannt geben 告示する、公にする——bekannt は知れ渡りて、geben は與ふなり
- 4) Gotteswegen (神の爲に)は Gott と前置詞 wegen とを結合したるものなり、又 Shretwegen (あなたの爲に)は人稱代名詞の二格 Syrer と wegen とを結合したるものなり、斯の如く人稱代名詞と前置詞と結合する場合には其代名詞の幹に et を附すものとす、meinetwegen, Shretthalben 等も皆此類なり

佛國の王 Ludwig 十四世は或日曜に教會堂が(本來は四格)常になく廷臣等に就いて空しくあるを(廷臣等の出席なきをとの意見出し而してそれに就ひて非常に(尠ならず)驚きたりき。彼(王)は宮内大臣に(本來は四格)その原因を尋ねき。陛下よ、と此者(宮内大臣)が答へし、私は、あなたが今日は説教を見舞はれぬ(説教を聞きには赴かれぬ)であらうことを、告示せしめし、それを以て陛下が一度なりとも (auch einmal)、誰か獨り敬神の爲に而して誰があなたの爲に教會堂に来るかを、知り給はん爲に

### 157. 願はしからざる慈善者

- 1) Samariter は「サマリア」人のことなれども慈善家の意味に用ゐらるゝこと屢なり、新約全書路加傳第十章三十三節に「或サマリアの入旅して此に来り之を見て憫み」云々の句あり、是れ此意味の出所なり
- 2) das verrenkte Bein einrichten (脱臼したる)脚をはめる

- 3) aus Leibeskräften 力を極めて、全力を盡して — Leib は身體、Kräften は Kraft (力)の複数之三格なり
- 4) auf etwas achten 或事に頓着す — achten は注意す、尊ぶ又は重すなり
- 5) ziehen は引く、zerren は強く引くなり

有名なる英國の詩人 Byron は或時瑞西へ來りし、散歩の騎行(馬に乗りて遊び歩くこと)の際に彼れの馬が物おぢし而して彼を投げ落せし、直に二三の農夫が急ぎ來りし、それは彼を(三格)補助し而して彼を再び起せし所の、然しながら何たる不幸ぞ! 憐れなる者 (Byron) が跛行しき、彼は一ツの脱臼を蒙むつたであらう。脚を再びはめんが爲に、他の者等は力を極めて脚を捕へて(an)引くのに、一二の者は彼を肩の下に(彼れの肩の下、即ち彼れの脇の下をとの意)掴みし、Byron が叫び而して自分を防禦せし、然れども活潑なる農夫等は其事を頓着せざりし、却つて平氣で引くべく續けし、次に此詩人の同國人が其處にまで來りし、それは此者(詩人)を彼れの苦しみから救ひし所の

此全き仕事(脚をはめんとて農夫等の爲したる仕事)は全く無意味であつた。Byron が脚を少しも脱臼せなかつた、却つて — 彼は以前より跛行せし、彼はもとより農夫等に其事を云ふた、然れども彼を(彼れの言ふことを)此者等(農夫等)が理解せざりし故に、夫れ故にそれは(農夫等のなしたることは)彼にもとより何も用立ち能はざりし

### 158. 富

- 1) Es geht einem übel (それが或人に悪しく行く)とは貧乏な暮らしをすることなり
- 2) es besser (gut) haben より幸福に暮す(それをよりよく持つ) — es は指示したるものなし、熟語に於ては斯の如く不定代名詞を補足音として用ゐること屢なり

- 3) reich begütert 十分に富みて — reich は充分に、豊に、begütert は富まされて、財産を賦與せられてなり
- 4) Mangel an etwas leiden 或物に缺乏す、不自由をする — Mangel は缺乏、leiden は憫むなり
- 5) Bewahre mich Gott! とんでもない、いやな事だ — は拒絶の意を強く表はしたる言葉にして之を直譯すれば「神我を保護し給へ」となる、即ち神にその事のなき様に保護を祈る意なり

或貧しき若者が或時其以前の教師と再び會合せり而して彼に痛く訴へし、それが彼に甚だ悪しく行くこと、彼れの以前の學校友達の此者やあの者が遙により幸福に暮すことを:(即ち)彼等は充分に富んであり、彼は之に反して總てのものに缺乏すと(訴へし云々に反へる)、汝は果して實際左程貧しくあるか、汝は實に充分なる健康に於て私の前に立つ、と教師が話せし、彼(教師)は彼れ(若者)の右の手を握りつゝ、彼(教師)が言ひ續けし、此手 — 力強く且つ仕事にまで適したる — 汝は彼(手)を蓋し千 Taler で汝より (dir) 買ひ取らしむるであらうか、とんでもない、どうしてそれが私に氣に入り能ふか(そんなことがどうして私の意に適ひましやうかとの意)と、若者が話せし、教師は言ひ續けし、左様に爽快に神の(神の造りたる)美しき世界へ眺める所の、汝の眼、汝は彼(眼)を蓋し幾何の金子で渡さうと思ふか、而して汝の耳、それを通して鳥の歌や、汝の友達の声が汝にまで入り込む所の、汝の耳、汝はそれを蓋し王の寶で交換するであらうか、どう致しまして(決して然らず)、と若者が答へし、然らば (nun denn, so), 汝は貧しくあることを訴へるな; 汝は總ての金に(本來は四格)優る所の、財産を持つ、と教師が答へし

### 159.

- 1) Boraxlagerung 硼砂の層 — Borax は薬品の名、Lagerung は本来は礦床と譯す
- 2) von großem Wert sein 大なる價格である — 斯の如く名詞へ前置詞を附する時は、往々形容詞の意味となることあり、故に茲にて von großem Wert を「甚だ値して」と譯すも可なり
- 3) ausbeuten は利益を取り出すことにして茲にては採掘の意なり

California の死谷(死の谷)は實に昔は一つの深き湖でありし。明に吾人は (man) 尙谷を包圍せる山壁に於て六百尺の高さに於ける古き水派の痕跡を認むることが出来る。谷の底は海面以下二百尺の處に存在す。太平洋よりの風は、それが谷に(本来は四格)達する前に、四個の連山を越へて吹かねばならぬ、而して全く乾燥して居る。地球の何れの場所も乾燥せること及び堪ゆべからざる暑さに於ては此死谷に匹敵せぬと、云ふことである(人が云ふ)。湖は夫れが爲に漸々乾燥したのである(乾燥させられてある)。谷の底の上の硼砂の層は大なる價額であらう、然しながら人はそれを採掘することが出来ぬ、何となれば仕事は彼處にては殆ど不可能の事である故に

### 160. 合つて居る(勘定などの)

教師: Karfchen よ、三つと四つで幾つになるか(幾つを爲すか)。生徒は黙して居る。教師: では (nun), 若しも私が汝に三つの「カナリヤ」鳥を與へ而して尙四つ與へるならば、其時は汝は幾つを持つか。生徒: 九つです、先生。教師: どうして九つか。生徒: へい、家に私は實に既に二つ持つて居ます

### 161. 蟹の赤く染まること

- 1) Kochprozeß 煮沸の處置 — Koch は煮ること、Prozeß は處置、行爲なり
- 2) zum Verschwinden bringen 消失せしむ — 消失に於て持ち來たす

蟹は煮る際に赤く染まると云ふことの、觀察は屢々爲さるゝが、此現象の原因は甚だ僅に知れて居る。蟹の甲の内には即ち、一ツの赤きものと而して暗青色のものとの、二ツの色素が存在して居る。二ツが合して生きて居る蟹の色を顯はす。吾人は (man) 二ツの色素を「アルコール」を以て處理することに依つて別々に分解することが出来る。斯の如き分解は即ち (nun) 煮沸の處置に依つても出来る。沸騰する水の作用に依つて暗黒なる色素は溶解せられ而して消失せしめらる。それが爲に赤き色素は愈々明に現出する、何となれば彼(赤き色素)は水中に溶解すべくあらぬ故に

### 162. 如何に早く人が讀み能ふか

- 1) es handelt sich um etwas 或事を爲すに至る、或事に關係す
- 2) in sich aufnehmen (自分に於て受け取る)は茲にては己れの眼中に受け入れること、即ち讀過することを云ふ

誰でも速に書き能ふ所の者は、凡そ一分間に三十言を書く。之に反して讀むことの速さは、殊に印刷文字、それを越えて眼が移り行くことの出来る(すらすらと早く見ることの出来る)所の、印刷文字を讀むことに至れば、甚だ種々である。達者なる讀者は(それは然し高聲に讀まなくとも善い所の)一分間に三百乃至四百言を讀み下すこ

とを人が普通に云ひ能ふ。然し人が左様に甚しく急がぬならば、それがより善くある(さう急いで讀まない方が善いとの意)。食物をぐいのみにする事の、それが身體に有害である、精神にも精神上の滋養(學問杯を言ふ)の斯の如きぐいのみは少なからず有害なり

### 163. 老人に對する尊敬

- 1) Katharina II. は茲にては女性の一格なるを以て Katharina die Zweite と讀むべし
- 2) hätte er gemeint は wenn を略したるを以て hätte を文首に置きたるなり(第五輯6節の4参照)

露國の有名なる女帝 Katharina 二世は老いたる人々に高き尊敬を示すを常としき、殊に若しも彼等(老いたる人々)が功勞ありし者なれば(功勞を己れに得たりしなれば)一例を擧ぐれば(10)嘗て宮中の宴會の際に老いたる伯爵 Osterman が彼女(女帝)に對して坐せし、而して此者(Osterman)の側に一人の小姓が立ちし、それに女帝が目示(メクパセ)せし所の、伯爵 Ostermann は然しながら此目示は彼(Ostermann)に價せしと(彼にしたものであると)、考へし、夫れ故に立ち上り而して、彼女(女帝)の命令を(命令の方に)問ふ爲に、女帝の處へ趣きし

直に Katharina は立ち上り、伯爵を窓の處へ導きし、其處にて非常に親しく二三の言葉を彼と話せし而して然る後に初めて彼女の場所を再び占めき(再びもとの座に着せしとの意)

老いたる紳士に對する斯の如く甚だしき(多くの)謙遜に就いて伯爵夫人 Golovin の驚きに對して然しながら女

帝が答へし：私の目示が彼(Ostermann)に價しなかつたことを(Ostermann にしたのではないことを)、彼が認めたであらうならば、その事がかの老いたる男(Ostermann)に愉快にあらなかつたであらうと、私は信ずる。今や彼は惱まされなかつた(不愉快を感じなかつたとの意)而して私を以て満足してあるであらう!

老人に對する顧慮(老人を勞はり顧みてやること)の何たる美なる證據ぞや!

### 164. 大膽なる答

- 1) sich gefürchtet und berühmt machen 恐れられたるもの及び有名なるものになる—— gefürchtet 及び berühmt は便宜上茲にては名詞の如く譯すべし、sich machen は自分を爲すにして即ち werden と同意義なり
- 2) etwas zur Verfügung haben 指揮する—— Verfügung は支配、命令なり、即ち或物を己れの命令の下に持つなり
- 3) Freibeuter は己れの勝手に人の物を取る者にして殊に海賊を云ふ

大なる世界征服者 Alexander 大王の時代に、Diomedos と云ふ名を持つたる、大膽なる海賊は界限で恐れられたるもの而して有名なるものになりし、遂に有力なる支配者(即ち Alexander)に、彼(Diomedos)を彼れ(Alexander)の勢力の内へ得ることの、それが達せしまで(Alexander が遂に彼を征服することが出来しまでとの意)

大膽者よ! と Alexander が怒つて捕虜に(本來は四格)呼び掛けし、如何に汝は、斯く久しく世界を不安に爲すべく而して平和なる商業を妨ぐることの、それを敢てし能ふたか、何でも汝に出遇ひ而して他の財産の掠奪に依つて汝を富有にする所の、總てのものを汝は汝に於て(自分の方へ)奪ひつ、(商業を妨ぐ云々に反へる)



私はそれを爲せしと、この大膽なる海賊が、王の周圍の者(侍臣)を驚かせし所の、磊落を以て答へし、何となれば汝も亦汝の(利益)を認めし如く私も私の利益を認めし故に！人が汝、その汝は大なる艦隊を所有する所の、汝を、汝が世界を掠奪する時には、大なる征服者と云ふことのみ(征服者と云ふことの相異なるのみとの意)、私が只一つの船を指揮する故に、私は海賊と名づけられるのに(人が汝を大なる征服者と云ふ云々に反へる)

豫想外に(豫期に反して)この勢強き支配者(即ち Alexander)はこの慥面なき海賊に怒らざりし、却つて Diomedos を直に彼れの役務の内へ取りき(己れの部下に加へしとの意)

### 165. 伶俐なる動物

- 1) noch nicht flügge geworden まだ飛ぶ様にならざる — flügge は飛ぶ力を有するなり、geworden は werden の過去分詞にして「なりたる」なり
- 2) sich preis geben 自分を犠牲に供す — preis は之を名詞とするときは捕獲、獲物又は他人の意の儘に打ち委されたるもの、義なり、geben は與ふなり、即ち preis geben は他人の意の儘に打ち委すことなり
- 3) einen irre führen 或人を迷はす — irre は迷ふて又は迷ふ様になり、führen は導くなり
- 4) auf Nimmerwiedersehen 跡形なく — Nimmerwiedersehen は nimmer (決して何々せぬ)と wieder (再び)と sehen (見る)とを組み立てたるものにして「決して再び見ことは出来ぬ」との意なり、auf は「様に」の義なり

危険は動物を考深くなす。鴨や鷓鴣及び他の地上に巢をくふ鳥が手負の如く水の上又は地の上でも獵師の眼前にて飛び廻ることの、その事が往々現はる、此者(獵師)を未だ飛ぶ様にならざる雛を持つたる巢より誘はん

が爲に、彼等が人間を迷はさんが爲に、左様に外見上自分を犠牲に供す。鷓鴣、亦狐も往々死んだ假裝(フリ)を爲し、静に自分を獵袋の内へ入れしむ、然れども然る後になるべく早く遁れ出で跡形なく消え失せる。

### 166. 象の復讐

- 1) Gouverneur (知事) は佛語にして gubernöhr と發音す
- 2) etwas in Empfang nehmen 受け取る — in Empfang 受け取ることに於て、nehmen は取るなり
- 3) der Rüssel 鼻 — 象の鼻又は蚊、蠅杯の吻に限りて用ゐらる
- 4) um etwas betteln 或物を乞ふ — betteln は前置詞 um を望む動詞にして「乞ふ、乞食する」の意なり
- 5) genommenes Bad なされたる沐浴 — Bad は沐浴なり、genommen は nehmen の過去分詞にして取られたるなり、沐浴することを Bad nehmen と云ふ

東印度に於ける或知事の別荘に總ての人の愛者でありし所の、小なる甚だ馴れたる象がありき。彼は全き家の内を歩き廻るべき自由を持ちし、而して食事の後客から美味に於ての彼れ(象)の租税を受け取らむが爲に、食堂に於て來るべく、慣されてありき。或日、大なる集會がいま後食(食事の後に菓子又は菓物杯を供することを云ふ)に坐わりし時に、象が時刻を違へず復た入り來りし、食卓を繞りて彼れの巡廻(圓く廻ること)をなし、彼れの鼻を客の間へ挿し入れ而して菓物及び甘き物(菓子杯を云ふ)を乞ひし。然るに客の一人が動物に何も與へやうと思はぬ、而して此者(象)が其場所から去らぬ故に、彼は怒りて肉叉を取り而してしつこき乞食に鼻に於て一つの刺衝を加へる。固より少しく怒らせられたが、併し静に

動物は他の客の處へ進み行き而して食卓の周りの彼れの巡廻を完了す; 然る後にそれ(動物)が庭の内へ出で行き黒き大なる蟻の群から群がる所の、樹枝を折り取り、部屋の内へ歸り來り而して今かの(鼻を刺したる)紳士の頭の上にて其枝を振り落とす(枝を振りて蟻を落とすとの意)、暫くにして(最も短き時に於て)あの者(紳士)が刺す蟻を以て蓋はれてありし、それ(蟻)は充分速に彼に毛の内に、頸筋の處を降り而して袖の内へ這ひ込みし所の(彼に毛の内云々は彼れの毛の内云々の意なり)、彼(紳士)は自分を振り、拂ひ、足踏みをし、罵りき——無益なり、同席の客の限りなき大笑の下に彼(紳士)は急いで逃げ去らねばならざりし、而して只直に爲されたる(取られたる)沐浴が彼(紳士)を彼の悪しき客(蟻を云ふ)から免かれさせ能ひき(直様沐浴して漸く蟻の難を免かれしとの意)

### 167. 多過ぎざる靴下

- 1) sonderbar finden 奇異なりとす——sonderbar は奇異にして、finden は見出すなり  
 2) Salomo は David の子 Israel の王にして舊約全書中の箴言及び雅歌を著したる人なり  
 3) über etwas Beschwerde führen 或事に就いて苦情を云ふ——Beschwerde は苦情、führen は導くなり

有名なる獨逸の理學者 Friedrich von Schlegel は有爲なる女を妻とせり甚だ教育ありしとは雖ども、然れども彼女は常に彼女の家庭の業務に、特に編物に、勵みし。彼女の友達は此事を奇異なりとし而して或日間ひき、彼女はそれに(著述に)まで非凡なる才能を有するのに、何故に彼女は其夫の如く著述せぬ(書物を書かぬ)かを。彼女は微笑

し、靜に續いて編み而して言ひき: 世界に餘り多くの靴足袋があることを未だ嘗て (noch nie) 讀みも (oder) 聞きもせなかつた、然れども餘り多くの書物が書かれることの、其事に就いて己に Salomo が苦情を云ひき

### 168. 支那の死刑

- 1) einen mit etwas bekannt machen 或人に或事を知らせる、告知す——einen mit etwas は或人と或事とをにして、bekannt machen は識り合ひにさすなり  
 2) unter Höflichkeitsbezeigungen 敬意を表しながら——Höflichkeit は敬意、Bezeigung は表はすことなり

法律が死刑を命ずる場合に對して支那人が持つ所の、觀念及び習慣は眞に奇異なり、犯罪者が法廷の判決を告知せられてあるや否や、處刑の日が確定せらる、多くこれは翌日なり。此日に死刑宣告を課せし所の、判事は被告者の檻房に赴き而して彼に四百の銅錢、一ツの手拭、一ツの雨傘及び一ツの提灯の贈物を與ふ、其際彼は敬意を表しながら悲みて國法に従うて彼れの宣告を斯様に重くなさねばならなかつたことを云ふ。彼れ自らは犯罪人に對してどんな (teinerlei) 憎惡も持たぬ而して彼をして冥府への道を見出さしむるであらう所の、此贈物を取る様にと願ふ

### 169. 支那に於ける地方郵便脚夫

- 1) Probe bestehen 試験に及第す——Probe は試験、bestehen は堪ゆるなり

支那に於ては地方郵便脚夫の地位を得ることの、それがさう容易ではない。候補者は先づ、力強く勇敢に而して健脚家(よき走者)であることの、證據を示さねばならぬ;

彼は確實に定められたる期限内に斷崖絶壁(險しく殺げて居る岩壁)及び猛獸(引き裂く獸)及び盜賊が住む所の、危険な森を持つたる連山を越えての一つの道を経過せねばならぬ。又人民の信ずる所によれば悪魔が彼等の怪異をなす所の、悪評ある地方に於て人が彼れを送る。尙ほ一つの試験は斯う云ふ事である(一つの他の試験は此内に成り立つ)、候補者は重き荷物を距りたる場所へ擔はねばならぬ事の(其内に成り立つに反る)、彼は彼に課せられたる總ての試験に及第する(試験を堪える)時には、其時には彼は其地位を得、而して彼は彼れ(地位)を然る時には真に辛酸にて得たるものなり

### 170. 非常に簡單

やあ、私の友よ、私は不思議にも救けられました。私の仲間の十三人は「ボート」の轉覆に依つて波浪の内に彼等の死を見出しました

して、あなたは溺死せざりしとは、どう云ふ次第でしたか(溺死せざりしことの、そのことが如何に來りしか)

非常に簡單です——私は家に留まつて居ました

### 171. 或觀察者

少き Arthur は彼れの新しき自宅教師に就き地理學に於て彼れの最初の授業を持つ(受くとの意)。此者(自宅教師)は指を以て地圖の或場所の上を示し而して問ふ:

これは何ですか

Arthur が答へる:

不潔な指

### 172. これも一つの認め方

1) Tour (旅行、漫遊)は佛語にして tuhr と發音す

2) Rad は元來は車輪のことなれども亦 Zweirad と等しく自轉車の意義に用ゐらる

3) mein Lebenslang 是れまで——Lebenslang は生活の間、即ち生れてより今日に至る生活の間との意なり

或若き亞米利加人は彼れの自轉車に乗つて (auf) 南佛蘭西を通して旅行を爲しき。彼が丁度、彼れの自轉車を自分の傍に牽きながら、稍々險しき岡を攀ち登りし時に、一個の驢馬車を追ひし所の、或農夫から追ひ越されき、動物(驢馬)は一生懸命に(體力から)牽きし、然しながら彼(驢馬)は夥多の骨折の爲に最早先へ(進み)能はざりき。そこで親切なる憫み深き亞米利加人は共に手を掛けき、彼れの自轉車を左の手で牽きながら、彼は右の手でその荷車(驢馬車)を押しき。今やそれが良く進み行きし、而して間もなく岡の絶頂が達せられてありき。そこで恩を知る農夫が云ひき、且那、誠に御親切に(貴君から甚だ親切に、私の君よ)。私はこの岡を是れまでたつた一匹の驢馬で登らなかつたであらう。然るに亞米利加人は非常に呆れたる顔を爲しき。(農夫は申譯の積にて「是迄一度も一匹の驢馬で此岡を登つたことはないのに、今日に限り一匹にて登らんとし計らずも御厄介を掛けました」との意にて云ひしを亞米利加人は誤解して「此岡に登らんとする時には、いつも他の驢馬が來て助けて呉れるから未だ一度も一匹で登つたことはない」と云ひたるものと信じ大に呆れたるなり、蓋し Gjel と云ふ詞は馬鹿者と云ふ意味をも有すが故なり)

### 173. 耳の難澁

- 1) Gehörleiden 耳の難澁 — Gehör は耳、聽官、Leiden は憐みなり
- 2) der Halbtaube 耳の遠き人 — halb は半分なり、der Taube は聾者なり
- 3) Eustachische Röhre 歐氏の管 — は口より耳に通ずる管にして、羅馬の「プロフェツソル」Bartolommeo Eustachio 氏の發見せるより此名あり

耳の遠き人は口を開けば(開きたる口に依つて)、彼が此もの(口)を閉ちて居る(閉ちて保つ)時よりは、能く聽くことは、知れ渡つて居る。耳は即ち歐氏の管によりて口と連絡す而して音響が正に腔道を通して聽神經に媒介せらる。往時(以前の年)の重き要塞砲を司りし所の、砲手は往々重聽に(耳が遠く)なりし事の、其事が随分(少なからず)知れ渡つてある、何となればそれ(音波)に彼等の耳が曝されてありし所の、激烈なる音波が鼓膜を破りし故に。此事を防がんが爲に、彼等は口火を(本來は二格)切る(置く)際に彼等の口を開くべき命令を持ちし(命せられて居るとの意)、それを以て兩方(口と耳と)より音響が内部へ入り込む爲に、それに依つて然る時に鼓膜の振動が減せられき

### 174. 得手勝手なる若者

- 1) Aldershot は英國の都名にして aldershot と發音す
- 2) Chef (佛語 chef と發音す)長、頭、司令官
- 3) Ich nicke mir den Kopf ab 私は首のちぎれる程點頭いて居る — mir は「私から」の意、abnicken は點頭き落す、點頭き離す、點頭き挫くなり

面白き話、それは尙其上に (dazu) 事實であると云ふ長

所を持つであらう所の、面白き話は英國の Aldershot より通信せらる。彼の地の一會社は其事務所の爲に田舎よりの若き男を任用せり、社長の不在の時は電話を取扱ふことも亦其務に屬せし所の(若き男に反へる)。今初めて鈴(リン)が鳴る、かの若き男が装置(電話器)の處に駆け行く、「出ましたか」と云ふ普通の問に對して (auf) 承知しつつ點頭す。かの問が再び而して三度反覆せらる、而して其都度若者が相變らず (wieder) 點頭す。かの問が四回反覆せらる、時に、彼(若き男)に遂に堪忍が破れる、而して彼が装置(電話器)へ怒鳴り込む: やい (Mann), おまへは盲目か、已に半時間もおれは首のちぎれる程點頭いて居るではないか(半時間以來私は實に已に私から首を振りちぎる)

### 175. 火薬の發明

- 1) etwas in den Kopf setzen 妄想を起す — in den Kopf は頭の内へ、setzen は置くなり
- 2) der Stein der Weisen (賢者の石)とは原文に註解あるが如く土及び石より金を作る秘術なり

名は Berthold Schwarz と云ふ、Baden の (in) Freiburg の (zu) 寺院に於ける一僧侶を人は火薬の發明者とする。此者は當時の多くの人々の如く、賢者の石、即ち土や石から金を作る、術を見出すべく妄想を起した。そこで彼は彼れの僧房に坐し而して種々のものを混合せし;然しながら、彼が求めし所のものは、いつも尙來らうと思はざりき(彼の發明せんと苦心せしものはいつも成功せざりしとの意)。然しながら或時硫黄、硝石及び木炭を鐵の臼に

入れて粉に搗き碎きし而して此もの(臼)を一つの石を以て塞ぎし。今暗くなりたりし故に、彼は灯を點する爲に、火を燧し；然るに一時に彼の耳の周りに(彼に耳の周りに)閃き且つ轟きし而してかの(臼の上に置きたる)石が臼から破裂しつゝ天井へ飛びし。(即ち)一つの火花が臼の中へ落ちたのであつた(爆發したるは火を燧し際に其火花の臼中へ落ちたる爲なりとの意)。Bertholdが此時に(hier)驚きて(驚きを以て)認めし所のものを、彼は他の者に告げし。人が今や此事を(本來は三格)より深く(より先へ)考へし而して然る後に、斯の如き臼を戦争に於て携ふべく(共に取るべく)而してそれ(臼)から最初は石、最後には鐵の丸を敵に對して撃つべく、始めし。之を要するに、漸次車付きの大砲及び擔ふことの出来る銃が發明せられし、而して寺院の平和なる生活を送る男(寺院の平和の男)なる、Berthold Schwarzは今や戦争に於ける最も秀でたる器械の創造者として看做すべくある。此總ての事は十四紀の中頃に出來し

### 176. 人命の救助者としての犬

1) ½2 Uhr は halb zwei Uhr と讀むべし、一時半のことなり

「ボストン」府の電氣學者 S. S. Gill 氏は先頃(少しの時の前)夜勤の地位を得し時に、彼は其妻に丁抹種の「ドッグ」(犬の一種)と「ベルン、ハルディーネル」(犬の一種)との雜種なる立派なる犬を贈與せり。此犬は前者(Dogge)の注意深きことと後者(Bernhardiener)の忠實とを兼備せり。近頃

朝一時半家の内に何か變でありし(何か正しくあらざりし)ことを、Dufe(犬の名)が氣付きし。彼(犬)は燃ゆる木のばちばち云ふ音を聞き而して煙を嗅ぎ出せし。煙のある所には亦火のあることを、彼に彼れの本能(感能)が云ひき(自然の感應に依つて煙のある處には亦火のあることを知りしとの意)、而して彼は此家の子息たる彼れの保護者(犬が保護すべき者)の臥床の處へ走り而して其重兒が醒むるまで、麻布(敷布に用ゐたるものなるべし)に於て引き搔きし、然る後に彼は暴力を以て Gill 夫人を起し而してやがて母と子とが安全に於てありき(母子共に災害を免れたるを云ふ)。犬は強く火傷せし(焦がされてありし)にも拘らず、彼は其成功したる救助の事業に就いて喜んで吠えき

### 177. 英國の工業

- 1) Wallonen は白耳義及び之に近接せる佛領及び普魯西領内に住する羅馬民族の名
- 2) Bristol は英國内の西南に位する貿易都市及び伯爵の名にして briffil と發音す
- 3) Edikt von Nantes (Nantes の勅令) — Nantes は佛國の都名にして nântat と發音す、Nantes の勅令とは千五百九十八年 Heinrich 四世の發したる勅令にして新舊兩教の同權を公認し信仰の自由を許したるを云ふ。

十八世紀に於て英國は地球の第一の市場となつたりき；今はそれが最大の工場である。Wallonen の殖民は十四世紀に於て Bristol 及び其近隣なる伯爵領地の人民に(本來は四格)羅紗の製造を教へき。Elizabeth 女王の世に(Elizabeth の下に)、Alba 公爵の追撃を避けし所の、和蘭の新教徒等が同じ工業を Norvolf 半島へ持ち來りし、それ(半

嶋)は製造業の上の關係に於て英國の最も繁昌なる地方となりし所の。(千六百八十五年) Nantes の勅令の廢止は此王國に、新しき工業の分科を輸入し而して古き物(即ち在來の工業分科)を完備せし所の、七拾萬の新住民を得し。前世紀(茲にては十八世紀のことなり)の終に器械と石炭とは英國の工業に於て一つの改革を起せし、それは今や最も豊饒ならざる、石炭區に接して横はる所の平地の部分へ遷り行きし所の。始めて其當時に英國は彼れの今日の地位を得し

## Zeitung (新聞)

1. Münster の新大學の法律學及び國家學の分科は普魯西の首相 Bülow 伯爵を國家學の名譽「ドクトル」にまで推薦せり

2. 高價なる街道の敷石. 吾人に (uns)「ニュー、ヨーク」よりの海底電信が報ずる所に依れば (wie), 「バーヂニア」州の Altman 市に於ける一化學者は、彼處にて街道の敷石することにまで使用せらる所の、Ries を試験しき。彼は其際、Ries が一噸の石に付 (auf) 二十弗の價に於ける金を含有することを見出しき。此確定以來已にこの都市の全街道は敷石を(二格)奪ひ取られたり、即ち結局警察が干渉せねばならざりし位

3. 獨逸皇帝陛下は普魯西王の資格にて (als) 伯林の日本帝國公使館の前一等公使館書記官鍋島桂次郎に第三等普魯西王國王冠章を授與せられたり

1) E. M. は Seine Majestät (陛下)の略字

4. 前の水曜日にまで(前の水曜日に參會の筈にて)皇后陛下は宮内省に依つて(宮内省をして)青山御所に於ける觀菊御宴にまでの招待狀を發せしめたり。三時には蓋し一千の來客がかの立派なる庭苑に集りてありき

1) S. M. は Ihre Majestät (陛下)の略字にして、女帝又は女王に對して用ゐらる

2) das Hausministerium 宮内省 — Haus は茲にては帝室の義にて Ministerium は執政省の義なり

3) die Feier des Chrysantemumsfestes 觀菊御宴 — Feier は祝典、Chrysantemum は菊、Fest は祭典の義なり、故に之を直譯すれば「菊花祭の祝典」となる

5. 三十三日にて世界一週の旅行が露國の鐵道大臣の Chilkow の計算によれば西比利亞鐵道の完成の後は出來るであらう、(但し)それに於ては(三十三日にて世界を一週するには)最急行列車と蒸氣船とが利用せらるゝことは、豫定の條件である(豫定せられてある)。この旅行は、(即ち) Bremen より St. Petersburg まで一日半、St. Petersburg より Vladivostok まで(一時間三十哩の列車速力にて)十日、Vladivostok より San Francisco まで十日、San Francisco より New York まで四日半而して New York より Bremen まで七日、合計即ち(also)三十三日を要す

1) St. は Sanct の略にして神聖と云ふ意味を有す

6. 白耳義の Leopold 王は Laufen の公園に、日本風の (iii) 佛塔、二三の家及び園亭を建築す。彫刻及び金物細工は日本に於て注文せられ而して製作中なり

1) Pagode は佛像を納むる塔のことなり

2) Pavillon (園亭)は佛語にして paviljong と發音す

7. 北海道島の殖民は非常なる割合に於て行はる。本年(この年)の最初の六ヶ月間に於てのみ(allein)二萬五千二百七十人彼處へ移住したり。其内の半數以上は(半分よりより多くは)農夫なり、次にその職務に従へば(職務に就いて云へば)漁夫、商人而して職人が従ふ(之に次ぐとの意)

1) in großer Maassgabe 非常なる割合に於て — Maassstab は尺度の義なり

8. 倫敦陳列會社は千九百〇四年日本の博覽會を倫敦に催さんと計畫す、それ(博覽會)にまで彼(會社)は殊に

千九百〇三年大阪に於て賣れ残りたる(賣られざりし所の)物品を引き取らんと考へる所の(博覽會を云々に反る)

1) die London-Exhibition-Company 倫敦陳列會社 — Exhibition は博覽會、展覽會又陳列所の義にして Company は會社なり

9. 六人の日本士官は、獨逸の兵制を知らんが爲に、近日又獨逸の軍隊へ進み入るであらう；日本の工兵に服役中なる(工兵に於て立つ)所の、一大尉は風船乗の役務に於て修業すと云ふ

1) sich mit etwas vertraut machen 或事を知る — vertraut は親密に、sich machen は自分を爲すなり、即ち或事と自分とを親密になすことにして、或事に通曉するを云ふ

2) sich in etwas ausbilden 或事に於て修業す — sich ausbilden は自分を形作るなり、養成するなり

10. 東京に於ける獨逸學協會學校。昨年十二月六日、即ち一年前の今日(昨年の今日との意)、東京(神田)に於ける獨逸學協會學校は全く焼失せり。日本語にては(japanisch)獨逸學協會學校(即ち獨逸の學術に向つての協會の學校)と名づけらるゝ所の、此學校は、千八百八十三年以來成り立ち而して非常に隆盛なる(輝く所の)時代を見たり。初め彼(學校)は豊に國幣の内より補助せられし、然れども千八百九十二年以來彼(學校)は自立すること、なれり。夫れにも拘はらず彼(學校)は志望者の甚だ多數なることを以て維持したり、即ち彼(學校)は現今四十一人の教師及び八百人以上の(über)生徒を數ふる程(志望者の甚だ多數なること云々に反へる)。此學校は現今、それ(中學校)に於て獨逸語が教授せらるゝ所の、唯一の中

學校なり。夫れ故に、學校の建物が再び建築せられてあることの、それは非常に喜ばしくある、無論他の場所に於て、即ち小石川區關口臺町に(建築せられてある云々に反へる)

- 1) v. J. は vorigen Jahres (昨年)の略なり、vorig は前の、Jahr は年なり
- 2) Sie ist auf sich selbst angewiesen 彼は自立することいなり — 之を直譯すれば「彼女は自分自らの上に指定せられてある」、即ち獨力にて維持せよと指定せられてあるとの義なり
- 3) tüchtige Frequenz 志望者の甚だ多数なること — tüchtig は強く、甚だしく又は盛に、Frequenz は輻輳又は志望者の多数なること杯の意味を有す

先月廿九日に新しき建物(新校舍)の開校式が勳功あり且つ尊敬せられたる男爵加藤弘之氏及び本校舎の幹事谷口秀太郎氏に依つて催されたり。此祝典の際に獨逸公使は、獨逸皇帝陛下が此學校に書籍及び教科用品の一纏(一定の集合)を其用に供せしことの、報告を爲すを得たり

- 1) v. M. は vorigen Monats (先月)の略なり
- 2) feierliche Eröffnung 開校式 — feierlich は祝典の又は祭典のにして、Eröffnung は開會、開設、開通、開校杯總て開始することを云ふ
- 3) zur Verfügung stellen 其用に供す — Verfügung は管理、使用、處分杯の義にして、stellen は置くなり

幹事が開校式の際朗讀せる報告より吾人は次のものを抄録す(抜き取る):

舊校舍が焼失したりし時に、直に神田區内に存在する法律學校が借り受けられ、而して此處にて授業が一時繼續せられき。然る後に本年の三月に小石川に於て上に記載したる土地が買はれし、それは凡そ二千三百坪を測量する所の。直に人が校舍の建築を以て始めき。已に

九月に於て授業が新家屋に於て受け取られ得し位、工事が進捗せられき。成功に従へば建物が凡そ八百五十坪の平面を蓋ふ、其内にて五百五十坪は眞の教場に、七十七坪は講堂に而して、七十二坪は體操室に殘餘は小使部屋及び他の附屬室に配當せらるる所の

此學校は現今四十一人の教師、七百四十五人の生徒及び百貳十人の傍聽生<sup>\*</sup>を數ふ。本年に於て百十人の卒業生が卒業せり

神田の舊校舍の運動場の上に分校の設立が計畫せらる、それ(分校)に於ては一年及び二年の生徒が本校の學級へ準備せらる、であらう所の

II. 數種の國語を授くる(多くの言葉の)學校。世界中の殆ど或他の學校に於ては Rairo の獨逸の學校に於けるが如く左様に多くの異なりたる語學は話されぬであらう(dürfen)。前(最終の)學年に關する(über)公報に依れば此校舍に在學する(此學校を見舞ふ)所の、百八人の兒童から次の國語が容易に(容易なることを以て)理解せられ且つ話さるゝ: 亞拉比亞語は九十一人より、獨逸語は二十四人、英語は二十七人、伊太利語は十六人、佛語は七人、希臘語は四人。此兒童の内て六十四人は童兒にして四十三人は女兒なりき。生れに従へば此兒童等は次の如く分たる: 二十九人獨逸、二十人埃國、十二人英國、十一人伊國、十人瑞西、六人佛國、六人埃及、五人米國、三人希臘、三人土耳其、二人「アルメニヤ」、一人白耳義

\* 傍聽生云々は事實と相異せり、其他にも亦多少の誤謬あり



12. 今も尚役に立つ所の、世界中の最も古き船は倫敦の近傍にて「テームス」河の上で石炭船として使用せらるる所の、True Love と云ふ船であるさうだ。それ(此船)が千七百六十四年に Philadelphia に於て進水せられし時には、それ(此船)は、Delaware 河が其時まで擔つた所の、最大の船でありき。百〇九ヶ年の後に始めてそれ(此船)は、——人が Aluminium の製造に使用する所の、金屬なる——Kryolith (殊に Grönland より産する金屬の名)を以て荷積まれて、遠き Grönland より Philadelphia へ歸りき。其後間もなく(直に其後)それ(船)は、上に述べたる目的(即ち石炭船)に用立つ爲に、倫敦へ賣却せられき

1) vom Stapel lassen 進水する——Stapel は船を造る際に用ゐる枕木及び壱の總稱にして、lassen は放つなり

2) Delaware は北米 Philadelphia の下部に注ぐ河名にして delle-mahr と發音す

13. 昔の一教師. Schwaben の一小都會の一教師 Johann Jakob Häuberle は——古き年代記の報ずる所に依れば——彼れの忠實なる執務の五十七年と七ヶ月の間學校内の彼れの働きに就いて誠實に且つ公明に記録したりき。これに依れば彼は彼れの教育の仕方に就いて區別したりき：911537 回杖にて打つこと、124100 回鞭にて打つこと、20989 回爪(ツメ)ること及び定規を以て打つこと、126715 回手にて打つこと、10235 回頬を打つこと、7905 回横面を打つこと、1115800 回頭を打つこと、12763 回聖書、問答書(耶蘇教の)及び讚美歌の本等を以ての譴責。777 回彼は童兒を豆の上に跪坐せしめた而して 613 回四角の木片の上に(跪坐せしめた)。501 人は驢馬(木製にして犯則者

を坐せしむる道具)を擔ひ而して 1707 人は鞭を差し上げ(高く保た)ねばならざりき、彼が時々止むを得ざる場合に於て臨機に發明したる二三の普通ならざる罰を(二格)除きて。——如何程の時が此秀でたる教師に恐くは元來授業にまで残りしか、と (10) 年代記者が問ふ——而して我等も彼と共に(問ふとの意)

1) u. dgl. ist und dergleichen (等)の略字なり

2) zu schweigen 除きて(言はずに、黙して)——は二格を支配するが故に einiger nicht so gewöhnlichen Strafen は二格なり

### 獨逸文典問題解答

#### 問題 1.

- |         |         |         |
|---------|---------|---------|
| 1. 固有名  | 2. 集合名  | 3. 種族名  |
| 4. 物質名  | 5. 固有名  | 6. 集合名  |
| 7. 種族名  | 8. 種族名  | 9. 物質名  |
| 10. 集合名 | 11. 種族名 | 12. 固有名 |

## 獨逸語學講義規則

一 本社は通信教授の方法によりて獨逸語學の普及發達を謀り學校に入り親しく講義を聽問すること能はざるもの、爲に講義録を發行す

一 本社の講義録を獨逸語學講義と稱し毎月一回二十五日發行す

一 講義録の講義期を二ヶ年とし其學年は五月に始まり翌年四月に終るものとす

一 講義者にして二年の講義を終了し其修業證書を望まるときは試験の上之を送與すべし

一 但試験は通信試験に依る其期日及手續は學年末の講義録に廣告す

一 入會金は金貳拾錢とす

一 入會せんとする者は入會票に住所姓名を(楷書にて明瞭に)記入し入會金及講修費を添へ申込まるべし

一 講修費は一ヶ月金參拾錢とし毎月十日迄に前納せらるべし

一 但し一時に半ヶ年以上を前納せるときは左の割合による(郵券代用は一割増)

一 半ヶ年分 一金壹圓七拾錢

一 壹ヶ年分 一金參圓參拾錢

一 講修費を拂込まるときは引續き講義録を配付するを以て別に受領證を送付せず、特に領收證を望まるとし

一 但し返信料を送らるべし

一 但し講修費盡きたるときは封紙に朱印丸形を押して通知すべし

一 講習者の都合により中途廢學せらるるときは既收の講修費の殘餘ある場合には之に對する講義録を配付し現金の返戻を爲さず

一 講義録中に疑問あるときは通信を以て質問することを得

一 但し質問書は字體明瞭に記し講義録の號數並に頁數を必ず示し返信料を添付せらるべし

一 質問の趣旨不明瞭なるときは講義録の意義了解し易きとき又は講義録以外に涉るときは答案を與へざるべし

一 質問の有益なりと認むるものは其答案を講義録に掲載し各自の參考に供すべし

一 講修者は住所姓名等を變更したるときは新舊住所氏名を併記し直ちに通知せらるべし

## 申込所

東京市牛込區中町三十五番地

獨逸語學雜誌社

谷口秀太郎 立案監修  
辻高衡

# 獨逸語學講義

第九輯

## 附錄

教師 (Lehrer)

贈

獨逸語學雜誌社發行

### 第八輯 義講學語逸獨

#### 注意

廣告料 一行五號活字二十四字詰前金拾錢、半頁前金參圓、一頁前金五圓とす、一回以上連載は二割を減す  
領收證 代金領收證は別に送呈せず、講義の到達を以て其證とす、但し領收證入用の方は別に郵券若しくは端書を送らるべし  
郵券代用 一割増とす但し郵券は三錢以下に限る  
照會 本社への御照會は必ず郵券若しくは端書を送らるべし  
替 郵便小爲替には受取人欄内に牛込區中町三十五番地獨逸語學雜誌社と必ず記入せらるべし  
前金 本誌は前金にあらざれば一切發送せず、前金盡きたる節は帶封に朱〇を押して之を通知す  
定價 一冊金參拾五錢(見本)  
發行日 毎月一回二十五日

●本講義規則入用の方は郵券貳錢送附の事

刻 翻 許 不

發行所 獨逸語學雜誌社  
東京市牛込區中町三十五番地  
印刷所 東京築地活版製造所  
東京市京橋區築地二丁目十七番地  
印刷者 野村宗十郎  
東京市京橋區築地三丁目十五番地  
編輯者 東儀季治  
發行者 東京市牛込區中町三十五番地

明治三十五年十二月三十日發行  
明治三十五年十二月二十九日印刷

明治三十五年五月二十七日第三種郵便物認可

明治三十五年五月二十八日内務省許可

## 凡 例

1. 本誌は之を教科及び教師の二編に頼ちたれば 読者は番號を逐うて雙方を對照すべし。
2. 外國語の修學は其初期に於て正確ならんことを要す。若し之を誤るときは、後に至り、進歩を見ること難し。故に前章を充分に知得せずして後章に移るが如きことあるべからず。
3. 本誌の教科は最も簡明に記述したれば、読者は成るべく自己の力を以て之を攻究し、而して後教師の編を開き、誤なきか否かを質すべし。
4. 獨逸語は之を變則的に修學する者にてても、一通り文法上の知識を養はざるべからず、而して文法の要は應用にあり、故に本誌に載せたる和文獨譯練習問題の如きは決して之を忽にすべからず。
5. 和文獨譯練習問題は重に文法上一部の應用に留まり其數も随つて多からざれば、讀者中餘力ある者は教師の編中にある譯文を獨譯し、之を教科と對照して誤の有無を質すべし。

獨逸語の發音を正確に授けんか爲に作りたる新文字左の如し。

1. 「**オ**」は *ö* の音を表さんが爲に「**オ**」と「**エ**」とを合して作りたるものにして「**オ**」を發する口附を以て「**エ**」と發音すべし。
2. 「**ウ**」は *ü* の音を表さんが爲に「**ウ**」と「**イ**」とを合して作りたるものにして「**ウ**」を發する口附を以て「**イ**」と發音すべし。
3. 「**チ**」及び「**ツ**」は *ti, tu* の音を表さんが爲に作りたるものにして「**ト**」の口の構へを以て「**チ**」及び「**ツ**」と發音すべし。
4. 「**ヂ**」及び「**ヅ**」は *di, du* の音を表さんが爲に作りたるものにして「**チ**」「**ツ**」を濁りて發音すべし。
5. 「**ホ**」は *hu* 又は或る場合に於ける *ch* の音を表さんが爲に「**フ**」と「**ホ**」とを合して作りたるものにして「**ホ**」の口附を以て「**フ**」と發音すべし。
6. 「**ラ**」「**リ**」「**ル**」「**レ**」「**ロ**」は舌端を上顎に着けて而して後「**ラ**」「**リ**」「**ル**」「**レ**」「**ロ**」と發音すべし。

## 178. 一つのよき教訓

- 1) das Schaengericht 飾の食物 — die Schau は見ること、das Gericht は一皿の食物なり、即ち Schaengericht は飾の爲に置きたる食物にして實際は食せざるものなり
- 2) von etwas (davon) Gebrauch machen それを使用す — 或物より(それより)使用を爲す

Sybien の君主の一人は金や銀に向つて斯様に大なる偏愛を持ちし、彼が彼れの臣民を、酷なる、困難なる仕事に依つて貴金屬を彼の爲に (ihm) 山の深みより取る様に、強制せし程、(斯様に大なる偏愛云々に反へる)。此君主は然しながら残酷よりも寧 (mehr) 無考へで爲せし爲に、彼の夫人に — 人民の訴に依つて感動させられて — 彼を此傾心より癒やすべきそのことが達せし、彼女 (夫人) は彼に或時、外見上は驚くべき美で、實際は然しながら全く食すべからずでありし所の、食事を用意せしめつ、(彼を此傾心から癒すべき云々に反へる)、何となれば總てが只だ金や銀からのみ成り立ちし故に!

或旅行より歸り來りて — 空腹でありし所の、君主は夫れ故に、此高價なる飾の食物にも拘らず、満腹することなく起ち上らねばならざりし而して驚かされて直に此黙止して居る教訓の眞意 (知識) を感じき: (即ち) 無益の富を積み重ねることは、若しも人がそれより人間の利益にまで使用することを知らぬ時には、一つの價値をも有せぬと云ふことを。

それより以來彼は此目的なき慾情を(三格)断ちし而して爾後彼れの國民及び國の繁榮に依つて金及び銀に依つてよりもより豊になりき。

### 179. 支那人の新年

- 1) überfüet 鑊められたる — über は蓋ふ、füen は播くなり  
 2) Es geht hoch her それが盛に出来る — hoch は盛になり、es geht her は es geschieht と同意義にして出来る又は爲さるゝなり

元日が支那に於ては常に特に恭しく祝はるゝ、特に盛に朝廷に於て其事が出来る。既に早朝(早き朝に於て)大なる賀を受くることが舉行せらる、其際皇帝は彼れの股肱の臣僚より祝賀を以て積み重ねらるゝ(澤山に祝賀を受くることを云ふ)。此賀を受くることの爲に廷臣の各員が最も美なる祭服に於て現はれねばならぬ(現はるべく持つ)、皇帝自身は燦爛たる寶石より鑊められたる服装に於て玉座の上に坐し而して彼に捧げられたる祝賀を受くる。國の高貴なる者に對しての此賀を受くることが終へて(過ぎ去つて)ある時には、其時には廷臣に向つての本來の祝宴が始まる。彼等(廷臣)は共同の午食にまで集まる、其處ではそれがいつもの威儀正しきことに於て盛に出来る所の(午食云々に反へる。—いつもの通り威儀を正して宴會を催すを云ふ)。

### 180.

- 1) Wort halt n 約束を守る — Wort は言葉、halten は保つ又は守るなり

或紳士は或男、その約束を(本來は三格)彼(紳士)が充分に信せざりし所の、或男に二日若くは三日を期して(二三日中に返済すると云ふ約定にてとの意) — Guine を

貸したりし而して、彼(男)が彼(紳士)に彼れの言葉を非常に正確に守りしことを、見て(見出すべく)非常に驚きてありき。同一の男が暫くの後(二三の時の後に)一つのより大なる金額を借るべく願ひし時に、他の者(即ち紳士)が云ひし: いえ(貸しまん)、貴君は私を一度欺いた(よもや返済すまじと思ひしに計らずも約束通りに返却したるが故に斯くは云ひたるなり)、それ故に(und)私は、貴君がそれ(欺くこと)を再び爲してはならぬこと、決心して居ると(今度貸せば屹度返す氣遣ひはない即ち今度は眞に欺くならんと豫知して斯く云ひたるなり)。

### 181.

- 1) Habe ich vielleicht etwas anders (Habe ich vielleicht etwas anderes gesteckt? と云ふべきを中途にして言葉を轉じたるを以て gesteckt の助動詞 habe 丈け残りたるものなり

教授(一通の手紙を「ポケット」の内に見出して): 合點が行かぬ! この手紙を私は併しきつき郵便函の内へ入れた、私はそれを全く確に覺えて居る(知る)。私はことによると何か外の物を — やあ(驚きの詞)、一體私の「ハンケチ」は何處へ行つたかな(留まつたか)?

### 182. 三つの問

- 1) einen auf etwas aufmerksam machen 或者に或事に就いて注意をさす — 或人を或事の上に注意深くなす、即ち注意することなり  
 2) sich einprägen 認臆する — sich は自分に、einprägen は印象する、感銘するなり  
 3) Ew. Majestät 陛下 — Ew. は Euer の略なり、並にては女性の一格なるが故に Eure Majestät と讀むべし。  
 4) für etwas erklären 何々と説き示す

Friedrich 大王は、彼が彼れの近衛聯隊の一に於て新兵を見し時には、其都度此者に(本來は四格)話し掛けること而して彼に次の如き三つの問を發する(向ける)ことを常としき: 汝は幾歳か. 如何に久しく汝は既に仕へるか. 汝は正確に汝の給料と汝の「パン」とを得るか——或時一の若き佛人が近衛聯隊の一に入りたりき. 其れの(一の聯隊の)大尉は、王が彼(新兵)に(四格)近日問ふであらうことの、其事に就いて彼(新兵)に注意せしめたりし、而して彼(新兵)が獨逸語を理解せざりし故に、此の三つの問に對する答を獨逸語にて暗記する様に、彼に勸告したりき (empfohlen より上の hatte へかゝる). 其後問もなく(直に其後)其軍隊の閱兵がありし、而して王がかの新兵を見たりし時に、いつもの問を爲さんが爲に、彼(王)は彼れ(新兵)の處に進み寄りき. 偶然に王は併し此度は第二の問を以て始めき. 如何に久しく汝は既に仕へるか、と彼(王)は彼(新兵)に言ひき. 二十一年、と若き佛人が答へき. 王が驚いてありし而して先へ問ひし: 汝は果して幾歳か. 四分の一ヶ年! と問はれたる者が答へき. それは眞實か (man は問投詞にして意味なし), 汝が悟性を失ふたのか或は朕か、と王が答へき. 王の此言葉を第三の問と思ひたる、兵卒は速かに答へし! 雙方共に、陛下よ! —— 扱て、朕は朕の全軍の眼前にて狂氣なりと説き示さるゝことの、其事が實際初めてある(「雙方共に」と云ふ兵士の答は「パンも給料も」との意なれども王の問に對しては陛下も私も共に悟性を失ひて居るとの意に聞ゆるが故に王は斯く云ひたるものなり). 汝は朕の言ふことを(私

を)全く理解せぬのではないか(理解せぬか). 兵卒、其れの獨逸語に於ての貯が今や盡きてありし所の、兵卒は靜に黙せし. 然しながら王が彼れの問を反覆せし時に、彼(兵卒)は全く獨逸語を理解せぬことを、彼(兵卒)は彼(王)に佛蘭語にて答へき. Friedrich が心から此の滑稽なる出來事に就いて笑ひし、若き外國人(即ち佛人)に其肩を親しく敲き而して、實に獨逸語を學ぶ様に而して彼れの役務を正確になす様にと、彼れに勸告しき.

### 183. 珍らしき求婚

1) sich zu etwas hingezogen fühlen 或物に對して戀慕の情を生ず —— zu etwas hingezogen 或物にまで引きつけられてなり、sich fühlen は感ずるなり

2) einem hold gefinnt sein 或人に愛戀の情を有す —— hold は愛らしく、gefimmt は考へて、思ふてなり、即ち或人に對して愛らしく思ふて居るなり

3) so は下の nichtedestoweniger と共に「しかも」と譯すべし

露國の Ukraine の二三の地方では男子ではなく、却つて女子が結婚の申込を爲す. 一少女が或男に向つて戀慕の情を生ずる時には、彼女は彼(男)の家へ行き而して彼に彼女の希望を告げる. 其男が彼女に愛戀の情を有せずとも、然も彼女は、口説くこと及び親愛なる所業に依つて彼(男)の歡心を得んが爲に、そこに留まる. 男がその行はれて居る(當時の)風習に對して違犯を爲すものであらう、(若し)彼が求婚女に對して不親切に或は不敬に處置しやうと思ふであらうならば(男が斯の如き求婚女に對して餘り冷淡無禮の舉動をすれば風俗を破るとの非難を免れ難しとの意). 少女の申込を承諾することを、彼(男)が全く厭ふてある場合には、其時には彼は彼れの家を去

り而して、彼を懇望せし(好んで持たうと思ひし)所の、彼女が去つて仕舞ふまで、其間(それ程長く)遠ざかつて居る。

### 184. 暗示

1) sich Sorgen machen 心配する — 自分に心配を爲す

患者: 先生、私は眠ることが出来ませぬ。

醫師: フム、ちよつと (mal) 貴君の舌をお見せなさい。— さあ身體の上には何もおわるい所はない様です(貴君に何も缺ける様に見えぬ)。多分貴君は昨年 of 勘定を未だ私にお拂ひなさらなかつたことを、御心配なさるのでしよう。

### 185. 學校より

1) Zwischenfall 中間の出来事 — zwischen は間に、Fall は出来事、事件なり、即ち或事の進行中に起る出来事を云ふ

Baden の或地方に於ける學校視察の際に博物學に於ける試験に際して次の如き出来事が起つたと云ふ (soll)。麒麟は何であるかを、汝は知るか、と幹事が問ふ。答: 二階に於て覗き込み能ふ位、大なる、亞弗利加に於ける一動物なり — 旨い、と視學官の賛辭がありし、それ (視學官) は教師に同時に彼れ (視學官) の會釋を爲せし所の (視學官) は生徒の答美事なりしを以て教師の薰陶其宜しきを得たるものと爲し之に默禮したるものなり)。第二の間 (先への間): 汝は尙亞弗利加に生存する一動物を知るか。 — 駱駝です。 — よし、駱駝は如何程大きくあるか —

幹事様より少しく小さいと、答が響きし — 一體私よりはなせ小さいか — 幹事様は最大の駱駝だと、先生様が云ひましたから。(Kamel は亦鈍物、愚者杯の意味をも有す)。

### 186. 伶俐なる犬

- 1) nach は上の ging と關係するものなれば隨ひ行くと譯すべし
- 2) steif und fest auf etwas sehen 眼を据へて或物を視つめる — steif は凝りて、動かすに、曲らずに、fest は堅くなり
- 3) weg は waschen (去る) の gehen を略したるものなり
- 4) Vogel は本來は「鳥」の意なれども諧謔的に「ひやうきん者」「狹猾者」杯の意に用ゐらる

巴里にて、演劇を(本來は三格)見物せし所の、一紳士に「ポケット」より「ハンカチーフ」が引き抜かれき(一紳士が「ハンカチーフ」を盗まれたとの意)。彼はそこで彼れの犬に、彼(犬)が紛失物(即ちハンカチーフ)を探すべき様に、言ひき。此もの(犬)が去りし、彼れの主人も彼に隨ひ行きし、遂に犬が美服を着したる一紳士の前に立ち止まり而して眼を据へて (steif und fest) 彼れの上着の「ポケット」を(彼れに上着の「ポケット」の上を)見し迄(隨うて行きし云々に反へる)。紳士(犬を曳きたる方の)が彼に(四格)話し掛け而して、彼が彼れの「ハンカチーフ」を拾ふたかと、問ひし、而して其れを返して呉れる様に(彼に返すべく)、願ひき。然るにかのものは拒み、彼れの高貴なる身分に就いて大騒ぎをなし(苟しくも紳士に盗名を負はしむるとは以ての外なり杯と大に論じ附けたとの意)、而して杖でなぐると云うて (mit) 脅しき。此事に就いて多くの人々が駆け集まり而して兩人を取巻きて(兩

人の周りに)立ちき。犬は其男から離れようと思はざりき。遂に紳士(犬を連れてたる方の)が發議せし、彼(疑はれたる男)が其「ポケット」を明けたらよからう(空にすべし)と、其れ(ポケットを明けること)をも彼は復た爲さうと思はざりし、如何となれば其事は彼れの名譽に反してある故に(「ポケット」を明けて示すとは紳士の體面に關するからとの意)。併し彼は周圍の者からそれを爲すことを(それにまで)強制せられし、而して其處に人は彼れの「ポケット」の内に十一枚の「ハンカチーフ」を見出しき。人は彼等(ハンカチーフ)を投げ出せし而して犬は直ちに彼れの主人の爲に彼れ(主人)のを探し出しき。かの美麗なる野郎は亦數個の(一ツよりはより多くの)時計を携帶せし、而して之が爲に役所へ引き渡されき。

### 187. Zieten の「サーベル」

- 1) das Familiengut は一家族に屬する領地を云ふ。
- 2) der Zieten は複數の二格にして累代の Zieten を合稱したるものなり、即ち Zieten 家のと云ふが如し
- 3) insofern.....als 何々する點で、何々するだけそれだけの點で
- 4) sich sehen は sich befinden 又は sein と同意義なれば「在る」と譯すべし
- 5) refo. noszieren reiten 騎馬にて偵察する — refo. noszieren は偵察する、reiten は騎するなり
- 6) der Haubegen は元來 hauen (切る)と Degen (劍)とを結合したるものにして「切る劍」(刺す劍の反對)の意なれども往々勇將の意味に用ゐらるることあり、即ち茲にも此意味に用ゐられたるものにして Zieten を指示せり

老 Zieten の「サーベル」それを彼 (Zieten) が七年戦争の間  
に佩用せし所の「サーベル」は Zieten 家の舊來の領地なる、  
Rufrau に於ける Zieten の半身像の臺の内に在る。Friedrich

大王が第二回目の「シレジヤ」戦争の後に此雄將に贈つた所の、此「サーベル」は、Zieten が此もの(サーベル)を至七年戦争の間に唯一回而も (und zwar) 自衛の爲に(彼れの身體の防禦の爲に)引き抜いたと云ふ、點に於て珍らしきものなり。千七百六十年十一月二日、(即ち) Torgau 附近の戦闘の前の日に、彼 (Zieten) が一人の傳令使を從へて騎馬にて偵察せし時に、Zieten は不意に六人の奥地利の輕騎兵より取り圍まれてありき。老將軍は勇猛に切り抜けし而してその刀身の上に今も尙明瞭に現はれて居る赤褐色の鏽は、Zieten が此機會に注ぎし所の、奥地利人の血液に就いて證明す。

### 188. 奇異なる争論

- 1) im Anspruch nehmen (genommen) 請求する — in Anspruch は請求に於て、nehmen は取るなり
- 2) sich weder zu raten noch zu helfen wissen どうすることも知らぬ — sich raten は自分に良策を與ふ、sich helfen は自分に助くる、weder.....noch は何々も何々もせぬ、wissen は知るなり、之を直譯せば「自分に良策を與ふることも尙助くることも知らぬ」なり

Brüssel の馬車鐵道の車に於て近頃二人の老いたる貴女  
の間にその窓を(本來は二格)開くことに就いて争論が  
起りき。その一人は主張せし、若し車掌が窓を開くなら  
ば、彼女は其爲に死するであらう(死を持つであらう)と、  
他の者は説明せし、若し窓が尙久しく閉ぢた儘であるな  
らば、彼女は卒中發作から襲はるゝであらうと。雙方か  
ら請求せられたる車掌はどうすることも知らざりし、同  
乗せる旅客がこれを救ふべき考の上に思ひ付きし時に



(旅客がこれを救ふべき方法を思ひ付きし時は丁度車掌が之を如何ともすることを知らざりし時であつたとの意)：貴君は窓を只だ静にお開きなさい、よき朋友よ、と彼(旅客)は云ひし、然る時にはその一人が死ぬる、その後で貴君はそれ(窓)を再びお閉ちなさい、然る時には他の者(他の一人)が死する、此方法に依つて我等は遂に安寧と平和とを得るであらう。

### 189. 愚鈍

この暑さは真に堪へ難いと、或馬鹿者は、額から汗を拭ひながら呼びき；私が天氣を造るならば(天氣を造るべく持つであらうならば)、其時は私はそれ(天氣)を遙に都合よく造るであらう。——さう——してどうするか、と彼は問はれき——私はそれ(氣候)を冬に於ては暖く而して其代りに夏に於ては冷たくあらしむるであらう、何となれば其時には(夏には)人は實に暑さを要せぬから！

### 190. 寶石

- 1) fein Gold 純金——は本来 feines Gold とすべきなり、形容詞は中性の名詞と結合する時は一格及び四格に於て往々斯の如く變化することなくして結合することあり、fein は茲にては rein (純粹なる)の意なり
- 2) der Heiltraut 水藥——heilen (癒やす)と、Traut (飲料)とを結合したる名詞

藥品の中にて昔(古き時に於て)は貴金屬も石も亦特別の地位を占めて居りし。純金、金箔、銀箔が極細密に刻まれて水藥の中へ混ぜられき。寶石には尙十九世紀の始めに至る迄も、之を疾患ある身體の部分の上に置

く時には、不思議なる効驗を有するものであるとして居つた(不思議なる効驗を歸せし)。即ち Sapisatuli (青色の寶石)は熱病を癒やし、綠玉は出血を止め(血を静め)、青玉は心臟を、土耳其玉は目を強め、金剛石は敵視する惡魔を和解する効力を有するものとしたさうだ(和解させつ、作用するさうだ jollte)。粉碎せられたる眞珠は、飲料に混ぜられると、青年の力を再び與へし、即ち (denn) 佛國の Ludwig 十四世が此藥に依つて、彼が恐れし所の、死を遠けんことを試みたるが如し。

### 191. 確實なる療法

- 1) ein einziges Mal 一度——einzig は唯一の、Mal は度なり、單に ein Mal と云ふよりも其意強くして邦語にて「たつた一度」と云ふが如し

或る若き夫が富貴なる舅の處にて烈しく己れの妻の品行に就いて訴へき。——さて、さて御安心なさい、と舅が言ひし。私の娘が左様に甚しく悪くあるから(da)、彼女があなたにね、婿殿、只尙一度でも訴に迄の原因を與へるや否や、私は私の遺言書を變じ而して彼女を廢嫡して仕舞ひましよう。此の脅嚇が奏効せし、如何となれば其時以來若き妻の品行が變せし、然らざるも(oder)兎に角彼女の父は最早彼女の夫から訴を聞かざりし故に(若し舅が娘に財産を譲らぬこと、なれば其夫に取り大に不利益となる故に「娘に財産を譲らぬ」と云ふ舅の一言は能く夫の妻に對する不平を醫し夫婦の和合を保たしむる確實なる療法となれり)。

## 192. 衣服が人を造る

(美服は人を貴からしむとの意にして邦語にて  
馬子にも衣裳杯と云ふが如し)

- 1) Philipp der Großmütige は Hessen の方伯 Philipp 第一世のことなり、der Großmütige は其異名にして寛大なるもの、大量なるもの義なり
- 2) von allen Seiten her 諸方より — Seite は側、方面、her は此方へなり
- 3) sich um etwas kümmern 或事に就いて頓着する
- 4) alle Welt 總ての人々 — Welt は世界、社會なり
- 5) voller Mut (女性二格) 大に怒りて — voll は充分、Mut は激怒なり、名詞を副詞狀に用ゐるときは二格とするものなり

千五百二十七年方伯 Philipp der Großmütige は Marburg 大學を設立したりし時に、彼 (Philipp) は諸方より最も博識なる人々を新教教會の爲に新築せる高等學校の (an) 教師に呼びし。即ち (beim) 此もの (教師) の内に亦、Westfalen の貴人にして、著名なる男 Hermann Busch もありき。此者が Marburg に到着したりし而して初めて Barfüßerstraße (街の名 — 跣足者の街との義) を通して此方へ市場を越へて來りし時に、彼 (Busch) が考へし、各人が彼 (Busch) に於て知れ渡りたる且つ著名なる「ドクトル」Busch を見識り而して尊敬するであらうと。然れども Marburg の市民、其れに大學の設立が決して別段なる喜悅であらざりし(別段に大學の設立を喜ばざりしとの意) 所の、市民等は未だ曾て「ドクトル」Busch に就いて何も聞かなかつた而して彼 (Busch) の博識なることに就いて何も頓着せざりき。即ち彼 (Busch) は都市を半分程も (半分の都市を通して) 行きたりし、而して誰も彼に (四格) 只會釋すらもなさざりき(亦只會釋しなかつたりし)。そこで彼が彼れの住宅に

歸り來り、彼れの不斷着を脱ぎ、立派な騎士服なる、彼れの禮服を着し而して今尙一度 Barfüßerstraße 街を通して市場への道をなしき (尙一度行きしとの意)。そこで彼を各人が脱帽と深き敬禮とを以て會釋せし、而して總ての人々が問ひし：あの立派なる紳士は誰れかと。併し Hermann Busch は大に怒りて再び家へ急ぎ、彼れの美なる衣服を身體より剥ぎ取り、其れを地上に投げ、兩足を揃へて(等しき足を以て)其上を飛び廻り而して叫びし：汝が一體「ドクトル」Busch であるか或は私が其れ(「ドクトル」Busch)であるかと(衣服に對して斯く云ひたるなり)。

## 193. 一秒時に一千の鼓打

- 1) Was eine Person (oder eine Sache) anbelangt, so ..... 或人(又は或物)に關しては

最も鋭敏なる覺認を人間は聽官に依つても尙視官に依つても感受せず、却て觸官に依つて、感受するものなり、此事を次の例が證明す。皮膚が鈍を以ての輕き電氣作用の鼓打によつて觸れらるゝときには、一秒時間に尙一千の鼓打を分離せる觸接として感受せらるゝ。耳に關しては、一つの耳を以ての覺認は兩方のもの(耳)を以てよりも鋭敏なり。齒車の鼓打(打ち合ふこと)は一の耳を以てすれば、其數一秒時間に六十を超過せざるときは、尙分離したる音として感受せらるゝ；兩耳の補助に依つては只だ一秒時間に十五に至る迄の鼓打が明瞭に覺認せらるゝのみ。視官は聽官に尙少しく劣る；例令ば、半分は黒く半分は白き、一の盤が回轉せらるゝときには、既

に一秒時間に二十四回の回轉にて、盤を灰色に現はれしむる光學上の錯誤が起る。

### 194.

- 1) Borderhuf は元來前蹄の義なれども茲にては諧謔的に手の意味に用ゐたるなり
- 2) Doktorchen 醫師——此語尾の chen は親愛の意味にて附したるものなり(五輯の91参照)

醫師 Dr. は、石灰坑の中へ落ちたりし所の、左官の親方なる、彼れの患者に挫折したる指を最も鄭重に副本を當て而して石膏詰にした。それでよい (jo), 數週間の中に總てが再びよくなるであらうと、彼(醫師)が言ひき。——綑帯を施されたるものが思案げに其白き手の上を凝視しながら、言ふ、ふむ、どう云ふものでしやうか(貴君は一度言へ)、先生、私は此後恐らくは洋琴をも奏することが出来ましやうか——如何にも、私は夫れを確信する(それに就いて私は確信してある)——へー、それは誠に結構です、今まで私はそれ(洋琴を奏すること)を能ひませんでした。

### 195. 誰がその「ビール」を得るか

誰でも最もよく虚言をつく所の、其者に私はこの「ビール」を買つてやる(支拂ふ)と、或紳士は二人の有名なる大言家に向つて言ひき。

私は生れて以來(私の生活に於て)未だ虚言をついたことはありませんでした(虚言しなかつた)と、その一人が言ひき。

而して私は彼の言ふことを信じます(それを彼に信ずる)と、他の者が附け加へき。

### 196. 義足(人工の四肢)を持つたる動物

- 1) um etwas kommen 或物を失ふ

稀なる場合に於て動物にも亦義足(人工の四肢)が好結果を以て應用せられたことの、それは一般には知れ渡つて居らぬであらう。

或貴女の愛猫は一つの不幸に依つて一本の脚を失つたりし、彼れの女所有者(即ち貴女)は彼(猫)の爲に(ihr)或熟練なる獸醫より一つの輕き木製の脚を作らしめき。已に暫く(短き時)の後にこの猫はその脚を固有のもの(脚)の如く使用し能ひし; 彼は今は加之鼠獵の上へ出掛けることの、それが物語らるゝ、其際彼は鼠を打ち殺す爲に、義足(人工の脚)を利用する。

只三本の脚を以て生れし所の、或他の小猫は、同様に木製(木より)の補足を得し而して此ものを困難なく使用する。

Dieppe に於て二本の義足(人工の脚)を持つたる或犬は都市中に知れ渡つてある、彼(犬)は或貧しき擦靴夫(クツミガキヤ)に屬する、それ(擦靴夫)は或電氣車より敷かれし(乗り越えられし)所の、動物を心配して看護し而して義足(人工の四肢)を以て備へたりし所の。その動物は此もの(義足)を今や已に三年以來使用し而して充分健康で居る、彼れの主人に對する犬の愛着は全く感動すべくあると云ふ。

最も奇なる感を木製の脚を持つたる或馬が起させる(爲す)。或地主、その愛馬が鐵道列車に依つて一本の

脚を失つたりし所の、或地主は、その動物(即ち馬)を殺さしむべく、決心し能はざりし; 彼はそれ(馬)を健康に看護せし而して彼れの爲に(ihm)一つの義足を作らしめき、それ(脚)を以てその馬は今、全き人民の驚きにまで、彼れの生活の残餘を自由に原野にて暮す所の(脚云々に反へる)。

### 197.

- 1) Die Königin Witwe 皇太后 — Königin は女王、Witwe は寡婦なり
- 2) am Tage darauf 其翌日 — darauf は其次の、am Tage は日に於てなり
- 3) Frau Königin 女王様 — Frau は既婚の婦人に對する尊稱にして邦語にて様と云ふが如し

或る貧窮なる一少女が伊太利の皇太后に其誕辰日に自から編みたる一足の靴足袋を捧呈したりき。女王が貧窮なる小供の友情から深く感動させられてありし而して其禮として他の一足の靴足袋を送りき; 女王が其もの(靴足袋)の一を「ボンボン」を以て、他のもの(靴足袋)を金子を以て満たさしめし而して彼女(女王)の贈物に(次の如き)問を添へし: 親愛なる小兒よ、二ツの靴足袋の孰れが汝により多くの喜を爲した(氣に入つた)かを、私に文通せよと。既に其翌日善き女王が次の如き悲しき答を得し: 親愛なる女王様! あなたが私に贈與した所の、靴足袋は私に只苦痛を持ち來りし而して全く少しの喜をも持ち來らざりし; 金子の入りたる一の靴足袋を父が私より奪ひ取り、「ボンボン」の入りたる他のもの(靴足袋)を私の兄弟が奪ひ取りました。

### 198. 醫者の忠告

或病人は不平勝の醫者に、彼が臥て居ることも立つて居ることも、坐つて居ることも出來ないと、訴へき。——一ツの方法が尙残つて居ります: 貴君は首をお縊りなさい、と醫者が答へき。

### 199. 總てのもの

- 1) Alles (總てのもの)は斯の如き場合には生涯の希望も名譽も快樂も何もかも總てとの意にして人の榮枯浮沈に關する最も大切なるものを表示するに用ゐらる

非常に悲んたる鰥夫は彼れの死したる妻の爲に「此處に吾總てのものが横はる」と云ふ碑銘を持つて立派なる墓表を立てしめき。彼が六ヶ月後に再び結婚せし時に、或滑稽者は Alles と云ふ語の二番目の I を通して一ツの横線を引きて(横線を爲しつ)其碑銘を修正せし、「此處に吾古きもの (Alles) が横はる」と。

### 200. 馬具を着けたる儘にて死せん

- 1) In den Selen 馬具を着けた儘にて(馬具に於て)——とは仕事しながらとの意なり

百年前に亞米利加に於て皆既の(充分なる)日蝕がありし。Connecticut 國の立法議會は、晝に於て充分夜となりし時に、丁度會議に迄集合してありき。議員等が驚きし、如何となれば、世界が滅亡するであらうと、彼等(議員)が考へし故に、二三の者が心配の爲めに戦慄しつゝ、直

に會議を延期すべき提議を爲しき。其處で老議員の Davenport が起立し而して呼びし：最終の時(世界の滅亡する時)が實際來たならば、然るときには私は私の場所にて私の責務を盡しながら見出されんことを希望す；家(議會を云ふ)が其仕事に於て繼續し得んが爲に、人が灯を持つて來ることを、私が提議しますと。

### 201. 蟻の年齢

- 1) Sir は英語にして förr と發音し、獨逸語の Herr (君、様)と同意義なり
- 2) soweit bekannt 是迄知れて居る所では — soweit es bekannt ist (それが知れて居る丈けでは)を縮めたる文章なり

博物學者なる、John Lubbock 氏は、不幸なる出來事に打ち委されてあらぬ所の(天災及び其他の災害を受くることなきとの意)、蟻が如何に長く生活し能ふかを、發見せんが爲に、試験を爲したり。彼が十五年間保ち而して丁寧に養ひたりし所の、一匹の蟻は千八百八十八年の四月八日に絶命しき。これは(dies)——是迄知れて居る處では——或昆虫より達せられた所の(welches)、最高の年齢なり(es は文法上の主言)。同一種類の一匹の他の蟻は彼れの年齢を十三年まで(auf)持ち來りき(十三歳に至るまで生活せしとの意)。

### 202.

einen (ihm) sprechen 或人と(彼と)話す(或人を話す)——は mit einem sprechen と同意義なり

多くの患者を持つこと[其癖 (und doch) 彼はそれ(患者)の非常に僅を持つ]を到る處で誇りし所の、或若き醫者が久しく離れたる友人から訪問せられき、それ(友人)は彼に(四格)然しながら自宅に於て出遇はざりし所の。——夫れ故に(不在であつたから)家政を司る女に(本來は四格)問ひし、いつ彼(友人)が彼(醫師)一人と(本來は四格)話すことが出来るかと、而して此女が答へし：貴君は只規定時間(即ち規定の診察時間を云ふ)にお出でさい、其時には彼は何時でも一人で居ります。

### 203.

- 1) einer Person oder Sache (二格) los sein 或人又は或事を免る、—— los は二格を望む詞にして「免れて」との意を有す

或人は、彼に非常に多くの貴重なる時を奪ひ取るであらう所の、頻繁なる來客を(二格)免れんが爲に、如何にすれば善きかを(それが如何に始むべくあらうかを)、或老人に(四格)問ひき。老人が答へし：貧者に金銭を貸せ、それを以て彼等(貧者)が汝に債務を負ふ爲に、而して汝の爲に(Sir) 富者より或物を願ひ取れ(貸れとの意)、然る時は貧者も富者も汝より避けるであらう(汝を避けて訪問せざるならんとの意)。

### 204. 蒸發する噴泉

- 1) reißenden Laufes 奔逸して—— reifen は引き裂く、奔逸する、Lauf は走ることなり、茲に二格にしたるは名詞を副詞狀に用ゐたればなり(本輯 192 節の註 5 参照)

2) geyferartig は Geyfer (愛斯蘭土に於ける噴出する温泉の名)と artig (Art 「種類」より作りたる形容詞)とを結合したるものなれば「Geyfer の如き」と譯すべし

3) periodische Wassereruption 定時の噴出 — periodisch は時限を定めたる、Eruption は破裂、噴出なり、即ち時を定めて温泉の噴出するを云ふ

暴風雨は夜の内荒れ止みたりし。朝濃厚なる霧が Waikato 河を越へて棚引きし。併し其霧は頓て霽れ、太陽が親しげに谷の内へ輝きし、而して今は何たる光景ぞ！奔逸して、急流の後に急流を形造りつ、(前後に夥多の急流を造りながらとの意)、Waikato 河は狭き、險しく立ち昂がる山々の間に深く破り込める谷を通して落ちし；其水は二つの小なる、河底の中央に存在する岩礁の周りに渦巻き而して泡立つ、而してザワ々々云ひながら溪間を通して射る。併し岸には白き蒸氣が、河の内へ落つる所の、湯瀧より立ち昇る、而して、白き石より圍まれてある所の、沸騰する水一杯の釜(釜状を爲して湯の湧き出づる處を云ふ)よりも(立ち昇る云々に反へる)。

彼處に蒸發する噴泉が上騰する(上に於て昇る)、而して再び沈む、今他の場所に於て第二の噴泉が高まる、此ものも亦止む、其處で併しながら二ツ(噴泉)が同時に噴出し始むる——一は全く下に河岸に於て、他は之に向き合せて段丘の上に、而して左様に此所作(噴泉の噴きては消へ、消へては噴く有様を云ふ)は交る々々持續する。

私は、沸騰する水鉢(鉢状を爲せる温泉の湧き出づる處を云ふ)が見るべくあり、或は蒸氣が一つの斯様なもの(水鉢)を示す所の、總ての個々の場所を數へるとを始めし。

私は七十六の場所を數へし、併し全區域を見渡し得ることなしに(數へしに反へる)、而して其内には定時の噴出を持つ所の、多くの間斷ある Geyfer の様な噴泉がある。

### 205. 奇異なる賭

1) zum は茲にては「から」と譯すべし、元本は aus を用ゐるべき處なれども下に hinaus あれば aus.....aus と重複する嫌あるを以て zum に換へたるものなり

2) gesagt, gethan さう云ふてさうした — は Wie es gesagt wurde, so wurde es gethan (それが云はれし通りにそれが爲されき)を省略したる文章なり

3) in größter Spannung 片唾を呑んで — Spannung は氣を張りつめることなり

或る爽快なる集會に於て此頃一紳士は主張せし、彼(紳士)が其家の内より窓から「やい、野呂間」(お前痴頓漢)と呼ぶであらうならば、或人が遣つて來るであらうことを、彼が賭をしようと思ふと。さう云ふて、さうした(賭をしようと思ふて、本當に賭をしたとの意)、賭したるものが尙二三の證人と共に該紳士の住宅へ赴きし；此者(紳士)は窓を開き而して頓着なく(單に)全く高き聲を以て「やい野呂間」と呼ぶ、然る後に彼は直様窓を閉ぢる。二三分間經過すると(それが二三分間續く)人が急ぎの足音(歩行)を聞く。打ち敲かれ(戸を敲くとの意)而して挟み眼鏡と「シルクハット」とを以たる立派に服裝をなした一紳士が、人が此處より彼に野呂間と呼び掛けたであらうかと云ふ、問を以て入り來りし時に、總てが片唾を呑んで居りし(足音が聞へたから片唾を呑んで待つて居ると一紳士が入り來つて質問をなせしとの意なり)。笑を殆んど制し能はざる紳士等(das Sachen の前の die は Herren の

冠詞)は無論其事を否みし、而して外來の紳士が、外見上眞面目に仕事して居る集會を妨げたことを、尙詫びたりし後に、賭物が直様呑み干されし、それは二三「リツトル」の葡萄酒を總計せし所の(外來の紳士が詫言をするや否や直様勝者は賭物の葡萄酒を呑み干したりとの意)。

### 206. 夫婦和合の戒言

- 1) etwas mit auf den Weg geben 或物を餞する — 或物を道の上に持たせて遣る
- 2) sich zu einem verfügen 或人に従ふ — 或人に自分の一身を委れる
- 3) auf etwas achten 或事に注意する

亞刺比亞の母は其娘を縁附けるときには、彼女が此者(娘)に出發の時に次の如き忠言を餞にする：汝は今、それより汝が出でた所の、其者を見捨てる(父母の膝下を去るを云ふ)；汝は、汝を斯く久しく保護した所の(而して)、それより汝が、歩行することを學はんが爲に、起き上がった所の、巢より遠ざかる、而して汝は一の男、それを汝が識らぬ所の (den), それの仲間に汝が慣されてあらぬ所の (dessen), 一の男に服従せんが爲に、それ(去ることを爲す。彼(夫)が汝に家來であらんことを、汝が欲するならば、彼(夫)に奴隸であらんことを、私は汝に忠告す(夫が汝に對し家來の如くに大切に於て呉る、ことを望むならば汝も夫に對して奴隸の如く仕へねばならぬとの意)。僅のものにて満足せよ。彼れ(夫)の眼が見るであらう (können) 所の、ものに常に注意し、而して彼れ(夫)の眼が決して悪しき所爲を見ない様に、注意せよ。彼れ(夫)の食物に注意し、夫の睡眠に注意せよ；(何となれば)饑は激

怒を引き起し、不眠は悪感を生ずる(故に)。夫の財産の爲に心を配り、夫の姻戚をば親愛を以て待遇せよ。夫の秘密に對しては沈黙せよ；夫が喜んであらば、不快の舉動あるべからず(汝を不快に示すな)；夫が不快にあるならば、喜ばしき舉動あるべからず——斯の如くすれば神は汝に(本來は四格)幸福せん。

### 207.

Isaac Newton 氏の性情は、如何なる (fein) 災害も之を妨害することの出來ない位、左様に沈着に且つ温厚にあつたさうだ (joll), 其れに就いての著るしき一例は、次の如く物語らるゝ： Newton 氏は、金剛石と名づけたる(名づけし所の)、一匹の愛犬を持ちき。彼 (Newton) が或晩彼れの書齋より次の部屋へ呼ばれし時に、金剛石(犬)は残り留まりき(犬のみ書齋に残つて居りしとの意)。Newton 氏は、只三四分間不在であつたりし後に(三四分間書齋にあらざりし後との意)に、歸り來りし時、金剛石が燃ゆる灯を數年間かゝつて(數年間の)殆んど完成せられたる仕事でありし所の、二三の紙(書き物の義)の内へ覆へせしことを、見出して(見すべく)、不快を持ちき。其紙(書き物)は直に焰の中に立ちし(忽ち燃え上りて火焰中にありしとの意)而して殆んど灰にまで燃え失せてありき。此損害は Newton の高齢の爲に償ふべからずでありし、併しながら犬を罰することなく、彼は呼びし：オー、金剛石よ、金剛石よ、汝は如何なる災害を成したかを、知らないが(さてさて實に困つたことをして呉れたとの意)。

### 208.

或醫者は、病に臥したる(病んで臥せし所の)、染物師の處へ呼ばれし、彼(醫者)は來りし而して、病人の全身が眞赤になつて居るのを見て(病人を全身に於て眞赤に見出すべく)少からず驚きし、彼は此病を猩紅疹とし而して甚だ危険なりと (fili) 説き示せし、染物師の妻は然しながら、彼女の夫が赤き色(染料)を入れたる釜の中へ落ちた爲に、それより此赤色が由來することを、告げし、さうか、と醫師が答へし、彼が染物師であることは眞に彼れの仕合せである、然らずんば彼は死なねばならなかつたであらうと。

### 209. 涙の壘

1) Leidtragender 哀哭者 — Leib は悩み、不幸なり、Tragender は擔ふ者、負ふ者なり

2) in ausgedehntem Maße 廣く — ausgedehnt は廣がりたる、Maß は尺度なり

哀哭者の涙を集め而して疾病に對する醫藥として用ゐることの、太古の東國(歐洲にて東國と稱するは主として土耳其、小亞細亞地方を云ふ)の習慣は波斯人の處にては尙今でも廣く行はれて居る、どんな葬式でも(各の儀式立たる埋葬に於て)會葬者の涙を(本來は二格)集むることは葬式の主要なる部分を形成す、哀哭者の各人に清潔なる小さき海綿か與へらるゝ、それ(海綿)を以て彼(哭哀者の各人)が彼れの顔及び眼を、涙の流れが涸れる迄、それ程永く拭はねばならぬ(拭ふべく持つ)所の

(海綿云々に反へる)、埋葬の後に其海綿が集められ而して僧侶に手渡しせらるゝ、それ(僧侶)は此の涙を、後に藥劑として用ゐんが爲に、小さき瓶の内へ絞る所の(僧侶云々に反る) (um の下の tie は涙を指す、彼等をと譯すべし)。

### 210. 上より人は始めねばならぬ

1) verdienen は物を正當に得ること又は勳功に適する賞を得ることを云ふ

Friedrich Wilhelm 一世王の御機嫌取役、顧問 Gumbing は或日その者(王)に、人が廷臣の内にては悲しき顔よりは何もを見ず而して多くの訴を聞くことを、報告しき。

誰が一體訴へるか。

總てのあなたの臣達(輩)が、陛下! あなたは恰ど總ての者に餘り多く彼等の收入に於て削減した。

それは當然である(それは己に宜くある)、彼の輩(廷臣を指す)は、正當に得るよりもより多く得る(手柄不相當にものを得るを云ふ、或は Wolf を指す)、而るに (und) 彼は其上私を欺き而して彼れの義務を只だ半分も或は全くなさぬ、それに於ては私は陛下に賛成する! 私も今日亦斯の如き怒を私の下女に對して持つた、私は彼女に、彼女は階段を掃除すべしと、命じき、彼女は何をなせしか、彼女は先づ一番下の段を掃除する、而して次に第二段、第三段、第四段を、而して彼女が次第により高く (immer höher) 登るに従うて、彼女は彼女の足を以て總てを再び不潔に爲す、それは何の役にも立たぬ(それは何にもにまで助け能はぬ)、上より始めねばならぬ、陛下よ、上より!



隅意(隠れたる意味)を認めたる、王は微笑しながら云ひし：然り、それに於ては汝の言ふことが道理である。私は宮内大臣と相談するであらう。

211.

或亞米利加人は或人より「ピストル」にて決闘を(「ピストル」の上に)挑まれし而して手紙にて(筆頭にて)答へし：私は二つの理由より出席せぬ。私が貴君をか若くは貴君が私を撃ち殺すであらう。此二つのことより(私が撃ち殺されても貴君が撃ち殺されても)少しもよき事は生せぬであらう。貴君は森の内へ行き、而して私の體格程の(體格の)樹木を求めよ。已れを着弾距離に置き、貴君が其樹木を中てるならば、私は、貴君を侮辱したことを、承諾し(甘じて侮辱の罪に服せんとの意)而して謝罪を爲さうと思ふ；貴君がそれを中てぬならば、其時は不正は貴君の方にあるべしと。

212.

auf gleichen Boden sein 相等しき場所の上にある — は五分五分の勝負にて不公平なしとの意

或藥劑師が、劇場に於て彼れの場所を一士官の妻に譲ることを、拒絶したりし時に、士官は侮辱せられたと感せし而して彼に決闘状を送りき。藥劑師は時刻を違へず會合せし(會合に於てありし)；併しながら彼は、彼が射撃することに(射撃すべく)慣らされて居らぬこと、及び彼は、争を片附ける爲に、或他の方法を建議せねばな

らぬ(建議すべく持つであらう)ことを、言ひき。彼は其處で彼れの「ポケット」より丸藥箱を引き出し、二ツの丸藥を取出し、而して彼れの敵に(本來は四格)筒様に話し掛けし：名譽の男として貴君は屹度、相等しき武器ならでは(相等しき武器にてより他の方法にては)私と闘ふことを、必ず希望せぬであらう。此處に二箇の丸藥がある；一は必ず死すべき毒にて(aus)調合せられてあり、他のものは全く無害である。我等は其れ故に、我等各自が一個を呑み込むならば、相等しき(五分五分の)場所にある(平等の方法を以て闘ふものにして不公平なしとの意)。貴君は撰擇を爲すべし(何れにても宜敷方を撰べとの意)、而して私は、貴君が遺す所の、其ものを服用することを、貴君に眞實に誓ふと——此事件が心底からの大笑に依つて片附られし(大笑をして事済になつた)ことを、附言することは、不必用である。

213. 一夫一言(男子に二言なしとの意)

1) mit einem (ihm) Mitleid fühlen 或人に對して同情を感じる — Mitleid は本來は共に憫むとの義にして前置詞 mit を望む名詞なり

2) einen in Freiheit sehen 或人を放免する — in Freiheit は自由に於て、sehen は置くなり

名は Gudmond と云ふ、或若き丁抹の學者は不當にも、政府に反抗の意志を發表したと云ふ、嫌疑に於て立ちし(嫌疑を受けたりとの意)；彼は夫れ故に Kopenhagen にて獄舎の内へ投せられき。善良なる人情深き老人なる、牢番は、若き男が如何に溫和に且つ勉強でありしかを、認めし時に、彼は彼(Gudmond)に對して同情を感じき。若し貴君が

逃げやうとも外界との關係を保たうとも思はぬことの、貴君の誓を私に與へるならば、其時には私は貴君に、明るくもあり且つ庭園への眺望をも有する所の、よき部屋を貴君に指定するであらうと、彼が言ひき。若き男は好んで此約束を與へし而して牢番は彼 (Gudmond) を、見透しの垣を有する庭から全く取り圍まれてありし所の、閑靜なる街道の上への眺望を有する一つの愉快なる部屋の内へ彼を連れ行きし。此部屋の窓が決して格子を附けられてあらざりき。星學に於て大なる楽しみを見出せし所の、かの若き男は、夜の大部分を星の輝きたる天を(本來は二格)觀察することを以て過ごしき。彼は或夜に餘り烈しく(餘り遙に)窓より屈みたりし時に、彼は街道の上へ轉び落ちし; 然しながら彼は幸にして一つの怪我をも招かざりき。落つることに依つて呼び起されたる彼れの最初の狼狽が過ぎ去つてありし時に、彼は蓋し何を爲せしか。自由を得んが爲に、彼は其機會を利用せしか。お一否(彼は此機會を利用して逃走せざりしとの意)、何となれば彼は彼れの誓言を破り而して義侠なる牢番を悪しき境遇中に陥れたであらう故に。彼は行きし而して獄舎の小門を(小門に於て)敲きし、而して直に彼れの獄舎の内へ歸りき。王が此行に就いて聞きし; 彼れ自らが Gudmond の事件を吟味しやうと思ひし; 其際(吟味の際)彼(王)は、若き男が犯罪に於て無罪でありしことを、認めし、それに就いて(犯罪に就いて——本來は二格)人が彼を罪せし所の、彼(王)は彼を直に放免せしめし而して彼を惠みを以て積み重ねき。

## 214. 何故に人間は飲むか

- 1) sich は茲にては einander (互に)と同意義なり
- 2) sich wach halten 覺めて居る —— 已れを覺めて保つ

飲むこと(飲酒)の主因は人間の眞似る心である。最初の(生れて始めて飲む)一杯の「ビール」は一本の葉巻煙草と同様に味はないものである(最初の葉巻煙草の如く一樣に味せぬ)。人間は、他人が飲む故に、飲むのである。然るに一度飲むことに於て慣れたる時には、續いて飲むことの理由は決して乏しくない(理由に於て一つの缺亡があらぬ)。人間は、再會する時にも、袂別するときにも飲む。彼等(人間)は、飢ゑてある時には、飢を忘れんが爲に、飲み; 彼等は、満腹してあるときには、食慾を引き起さんが爲に、飲む; 彼等は、寒くある時には、温むることの爲に、暑くある時には、納涼の爲に、飲む; 彼等は、不眠の場合には、眠むらんが爲に、飲む; 彼等は、睡くある場合には、覺めて居らんが爲に、飲む。彼等は、悲しくある故に、飲み; 彼等は、愉快である故に、飲む。

## Zeitung (新聞)

1. 日本の文部大臣は、新速射砲を發明し而して大學にそれに就いての論文を呈出したる(送つたりし所の)、有坂將官に工學博士の稱號を授與せり。

2. 水師提督 Stackelberg に卒ゐられて (unter) 吾人の海の方へ航行中なる(途中にある所の)、露國の分艦隊は、二艘の戦闘艦、三艘の巡洋艦及び四個の水雷艇より成り立つ。水師提督 Stackelberg は露國の分艦隊の司令を茲にて(東洋にて)擔任するならむ。

3. 日本の皇帝陛下は「プロフェッソル」Ludwig Sanjon 氏に彼れの千八百八十年以來 (von.....an) 教師として而して東京大學の農科に盡したる勤務に對し第三等瑞寶章を而して京都大學文科の「プロフェッソル」Dskar Göritz 氏に第五等旭日章を授與せられたり。

1) S. M. は Seine Majestät (陛下)の略字

2) für seine は下の Dienste へ掛かる

3) die 3. Klasse des Ordens vom St. Schab 第三等瑞寶章(神聖なる寶の勳章の第三等)—— St. は Heilig の略なり茲にては男性三格なるが故に Heiligen と讀むべし

4. 急行列車は緩慢なるもの(列車)よりも、多くの關係に於て、より利益である。鐵道官吏は二十五「プロセント」の利益を算出す。機關車は緩慢なる進行に於ては速なるもの(進行)に於けるよりも前に損耗する(早くわるくなるとの意);車輛は遙により長く途中に在り而して使

用せらる(使用に於てある)(車輛の途中に在ることも使用せらる、ことも亦急行のものより長しとの意);人員はより長き勤務を有す而して緩慢なる進行の後により長き休息時間を(二格)要する。此原因よりして車掌自らは急行列車を辯護する。

5. 先頃死去したる東京に於ける米國公使 Buch の後任者として Teheran に於ける是までの公使 C. Griscom が任命せられたり(任命せられてある)。此者は已に久しき以來合衆國の外交上の職務に従事せし(屬せし)。彼は先づ Konstantinopel に於ける公使館書記官でありし而して一時亦事務擔當者でありき; 彼處より彼は其後二三年前に Teheran に來りし。

6. 大阪の市會に於ては三十二人の議員より呈出せられたる建議案が非常なる騷擾の下に三票に對する三十九票を以て採用せられし、それに依れば大阪瓦斯會社は市へ街道及び橋を使用することに對し一定の税を支拂はねばならぬ、之に違反する場合には市は將來自ら瓦斯の布設を擔當するならむ。

1) die Stadtverordnetenversammlung 市會—— die Stadt は市、der Verordnete は代表者、議員、die Versammlung は集會なり

2) ein は Antrag の冠詞

7. 紡績車は十五世紀の末に獨逸國に於て現出せし、但し最初は手車として、千五百三十年に Braunschweig 領に於ける Wattenmil の Jürgens は足にて踏む紡績車を發明しき。

8. 東京に於ける銀行組合は近頃三人の丁度歐洲よ

り歸朝したる知名の日本人、即ち前の大藏大臣松方伯爵、岩崎男爵及び澁澤男爵の名譽にまで宴會を催せり。

9. 昨日福嶋將官は再び東京へ到着せり。吾人は、彼が外貌に依れば (nach) 充分恢復した様に見ゆることを、聞きて大に喜べり (吾等の大なる喜にまで聞く)。吾人は將官殿を心より會釋し且つ、彼に慣れざる印度の氣候が持ち來つた所の、病氣よりの最後の僅なる餘痛をも、彼が吾強壯にする海風に於て直に全く打ち勝つて仕舞はん(打ち勝つたであらう)ことの希望を述ぶ。

1) der Hoffnung Ausdruck geben 希望を述ぶ — 希望に言葉を與ふ、即ち己れの心中に懐く所の希望に言葉を與へて之を發表するとの意なり

10. 東京士官學校の卒業生の内に此度二十五人の支那人がありし、其内にて二十人は湖北省生れにして五人は福建省生れなり。十一月二十八日に卒業生の卒業式が行はれし。彼等(卒業生)の數は六百九十九人を總計す。皇帝は自ら臨席せられし。卒業者の内に久邇宮親王もありし。卒業生の内の優等なるもの(最もよきもの)等は皇帝より各一個の銀時計を受領せし。

1) Tokyo に er の語尾を附して Tokyoer としたるは「東京の」と云ふ意なり、此語尾 er はもと古き複數二格の語尾にして、地名に語尾 -ich を附して作りたる形容詞の代りに用ゐるものとす(第五輯 14 の註 2 参照)

11. 門司と下の關との間の海峡に於て最初の金曜日に(月の始の金曜日に)、船の交通を暫くの間不可能に爲せし所の、暴風がありき(支配せし)。下の關に於ては雪が降りし、而して非常に寒くありき(es は文法上の主言)。多くの船は不幸を受けたり。

12. 十一月廿一日三人の仲間と共に日本船に乗りて

(in) 佐世保より竹敷へ向つて航せし所の、日本人浦初次は先月六日大風より襲はれき。彼れの船は運轉不能となり而して久しき間詮術なく漂泊したりし後に、彼は、日本より上海へ向つて航行中で(航行の上に)ありし所の、獨逸の商船 Suevia 號より認められき。船長 Hermann Borch 氏は直に一艘の「ボート」を卸さしめし、それ「ボート」に於ては一等技師及び若干の水夫等が乗込みし所の、高き海路(波浪の高きを云ふ)にも拘はらず而して己れの生命を賭して(自己の生命を賭することを以て)、日本人等を取り上げ而して無事に Suevia 號へ乗せるべき、その事が彼等(獨逸人)に達せし。そこで人は救けられたる者にあらゆる看護を與へし、彼等を金子の贈物を以て具へ而して上海に到着の後彼等を彼處の日本總領事に渡せし。

吾人は、日本の政府が東京に於ける獨逸公使の媒介に依つて Suevia 號の船長に其謝辭を述べしめたりと、聞く。

1) v. Mts. は vorigen Monats (先月の)の略  
2) der Sturm は東洋に於ける暴風の名なり、「大風」より起りたる名稱ならん  
3) Platz nehmen 着席する、着坐する — Platz は場所、nehmen は取るなり  
4) an Bord der „Suevia“ bringen、Suevia 號へ乗せる (Suevia の船に於て持ち來る) — Bord は元來船縁の義なれども斯の如き場合に於ては船の意なり、故に「船に乗る」ことを an Bord gehen と云ひ、「船に乗せる」ことを an Bord bringen 採と云ふ  
5) einem etwas zu Theil werden lassen 或人に或物を與ふ — 或人に或物を持分とならしむ、Theil は分け前、持分、所有の義なり

13. 伯林に於ける以前の日本公使井上氏は日本經濟會の集會に於て先頃演説をなしたり、それ(演説)に於て彼は二三の前置きの注意の後に稍次の如きことを述べし所の(演説を爲したり云々に反へる):

私は今晚の諸君の招待に對する感謝の辭を述べると同時に、私は亦一つの希望を發言し得る。獨逸國は、私が私の五年間の滞在の間に同地にて知るべき機會を持ちし所では (wie), 吾々の時代に於て、彼れの商業及び彼れの工業を獎勵することを、熱心に勵んで居る、即ち彼(獨逸國)は此範圍内にて(工業及び商業に於て)英國や亞米利加の前に飛躍を爲した(達した)程(彼れの商業及び彼れの工業を云々に反へる)。此外獨逸國は然しながら、二十萬噸以上の(二十萬噸よりはより多くの)大なる船を作りつゝ、彼れの勢力を海上にも亦擴張せんとする(擴張すべく求むる)。日本の事情は獨逸人にまだ殆ど知れて居らぬ、而して夫れ故に屢獨逸人と吾等日本人との間に一種の誤解的の理會が起る、其事は雙方の利益に於ては同様に遺憾とすべくある所のことである、吾々は夫れ故に、直に雙方の交通の獎勵に依つて互により精しく相識ることの、そのことに注意して居らねばならぬ。私は私が此關係に於て諸君の實力ある補助に依頼してもよいとの、希望に身を委ぬる(希望の空しからざるを確信すとの意)、而して私は、此目的を達する爲の手段及び方法に注意せられんことを、切に(全き心より)諸君に(四格)希ふと。

1) Dem Dank Ausdruck geben 感謝の辭を述ぶ。—— 感謝に言辭を與ふ。(本報新聞 9 の駐參照)

2) Platz greifen 起る。—— Platz は場所、greifen は掴む、即ち場所を占領する意にして或事存在するを云ふ

3) uns は「我等を」なれども茲にては uns einander (我等は互に)の意なり

4) sich (mich) der Hoffnung hingeben 希望の空しからざるを確信す。—— der Hoffnung は三格にして「希望に」なり、sich (mich) hingeben は「身を委ぬる」なり、即ち希望に身を委ぬることが出来る、希望の屹度成就するを確信すとの意なり

14. 亞米利加に於ける總ての學校。公立、私立及び共立學校は昨年千六百六十七萬八千六百四十三人の小兒等より見舞はれき。大學及び高等學校に於ては十萬一千〇五十人の若き輩が研究し、神學師範學校、醫學及び法學高等學校に於ては五萬四千二百三十一人が; 教員が養成せられし處の、模範學校に於ては、六萬七千五百三十八人が; 商業學校に於ては七萬九百五十人が(研究せし)。幼稚園は九萬七千七百三十七人の生徒を有しき

1) College (發音「コレッジ」) 高等學校。—— 原文の語尾 s は複数形の形なり

15. 早く高貴なる官職及び地位を占めた所の、亞米利加の政治家。Alexander Hamilton は三十二歳を以て Washington 内閣に於ける大藏省書記官となりし。John Jay は、彼が高等聯邦判事となりし時に、四十五歳でありし(四十五歳を數へし)。Kentucky 國の John C. Breckinridge は三十二歳を以て、John C. Calhoun は四十二歳を以て合衆國の副大統領でありき。Henry Clay は、衆議院が彼を議長に撰びし時には、三十四歳でありき(三十四歳年取つてありし)。James G. Blaine は、(彼が)此地位(即ち議長の地位)に信任せられし時には、只だ五歳より年取つてありき(即ち三十九歳なりしなり)。Grant は、彼に暫くの間に(短き時限に於て)總督の位を擔ひ入れし所の、彼れの最初の桂を戰場に得し時に、彼はやつと四十歳でありし(彼れの四十歳の年齢を達したりし)、而して其後數年にして(其後僅の年に)彼は Washington に於て大統領の椅子を占めき。

# 文 典

## 課題 2. 解答

1. 男性(月の名なるが故に) 2. 女性(tの語尾あるが故に)
3. 男性(mの語尾あるが故に) 4. 中性(動詞を名詞としたるが故に)
5. 男性(方位の名なるが故に) 6. 男性(enの語尾あるが故に)
7. 女性(deの語尾あるが故に) 8. 女性(ichaftの語尾あるが故に)
9. 男性(四季の名なるが故に) 10. 男性(七曜の一なるが故に)
11. 女性(語尾eiあるが故に) 12. 中性(物質名なるが故に)
13. 中性(國名なるが故に) 14. 男性(語尾elを有すが故に)
15. 中性(物質名なるが故に) 16. 女性(語尾heitを有するが故に)
17. 中性(都名なるが故に) 18. 男性(fingの語尾あるが故に)
19. 女性(語尾eiあるが故に) 20. 女性(atの語尾あるが故に)
21. 男性(erの語尾を有するが故に) 22. 中性(nisの語尾を有するが故に)
23. 女性(語尾eを有するが故に) 24. 中性(語尾tumを有するが故に)
25. 中性(語尾falを有するが故に) 26. 女性(語尾ungを有するが故に).

### 獨逸語學講義規則

本社は通信教授の方法によりて獨逸語學の普及發達を謀り學校に入り親しく講義を聴問すること能はざるもの爲に講義録を發行す

本社の講義録を獨逸語學講義と稱し毎月一回十五日發行す

講義録の講義期を二ヶ年とし其學年は五月に始まり翌年四月に終るものとす

講義期にして二年の講義を終るに及ばず其修業證書を望まるときは試験の上之を送與すべし

但試験は通信試験に依る其期日及手續は學年末の講義録に廣告す

入會金は金貳拾錢とす

入會金は金貳拾錢とし毎月十日迄に前納せらるべし

但し一時に半ヶ年以上を前納せるときは左の割合による(郵券代用は一割増)

一 半ヶ年分 一金壹圓七拾錢

一 壹ヶ年分 一金參圓參拾錢

講修費を拂込まるときは引續き講義録を配付するを以て別に受領證を送付せず、特に領收證を望まるとし

但し講修費を盡きたるときは封紙に朱印丸形を押して通知すべし

講習者の都合により中途廢學せらるるときは既收の講修費の殘餘ある場合には之に對する講義録を配付し現金の返戻を爲さず

講義録中に疑問あるときは通信を以て質問することを得

但し質問書は字體明瞭に記し講義録の號數並に頁數を必ず示し返信料を添付せらるべし

質問の趣旨不明瞭なるときは講義録の意義を講義録に掲載し各自の參考に供すべし

質問の有益なりと認むるときは其答案を講義録に掲載し各人の參考に供すべし

講修者は住所姓名等を變更したるときは新舊住所氏名を併記し直ちに通知せらるべし

### 申込所

東京市牛込區中町三十五番地

### 獨逸語學雜誌社

谷口秀太郎 立案監修  
辻高衡

# 獨逸語學講義 附錄

第十輯 教師 (Lehrer)

寄贈

獨逸語學雜誌社發行

## 第九輯 義講學語逸獨

### 注意

●本講義規則入用の方は郵券貳錢送附あれ  
廣告知料 一行五號活字二十四字詰前金拾錢、半頁前金參圓、一頁前金五圓とす、一回以上連載は二割を減す  
領收證 代金領收證は別に送呈せず、講義の到達を以て其證とす、但し領收證入用の方は別に郵券若しくは端書を送らるべし  
郵券代用 本社への御照會は返信用として必ず郵券若しくは端書を送らるべし  
照會 郵便小爲替には受取人欄内に(牛込區中町三十五番地獨逸語學雜誌社)と必ず記入せらるべし  
爲替 本誌は前金にあらざれば一切發送せず、前金盡きたる節は帶封に朱〇を押して之を通知す  
前金 一冊金參拾五錢(見本)  
定價 每月一回十五日  
發行日

刻 翻 許 不

發行所 獨逸語學雜誌社 東京市牛込區中町三十五番地  
印刷所 東京築地活版製造所 東京市京橋區築地二丁目十七番地  
印刷者 野村宗十郎 東京市京橋區築地三丁目十五番地  
編輯者 東儀季治 東京市牛込區中町三十五番地

明治三十六年二月十五日發行  
明治三十六年二月十二日印刷  
明治三十五年五月二十七日第三種郵便物認可  
明治三十五年五月二十八日內務省許可

## 凡 例

1. 本誌は之を教料及び教師の二編に頼ちたれば 讀者は番號を逐うて雙方を對照すべし。
2. 外國語の修學は其初期に於て正確ならんことを要す。若し之を誤るときは、後に至り、進歩を見ること難し。故に前章を充分に知得せずして後章に移るが如きことあるべからず。
3. 本誌の教料は最も簡明に記述したれば、讀者は成るべく自己の力を以て之を攻究し、而して後教師の編を開き、誤なきか否かを質すべし。
4. 獨逸語は之を變則的に修學する者にてても、一通り文法上の知識を養はざるべからず、而して文法の要は應用にあり、故に本誌に載せたる和文獨譯練習問題の如きは決して之を忽にすべからず。
5. 和文獨譯練習問題は重に文法上一部の應用に留まり其數も随つて多からざれば、讀者中餘力ある者は教師の編中にある譯文を獨譯し、之を教料と對照して誤の有無を質すべし。

獨逸語の發音を正確に授けんが爲に作りたる新文字左の如し。

1. 「**オ**」は *ö* の音を表さんが爲に「**オ**」と「**エ**」とを合して作りたるものにして「**オ**」を發する口附を以て「**エ**」と發音すべし。
2. 「**ウ**」は *ii* の音を表さんが爲に「**ウ**」と「**イ**」とを合して作りたるものにして「**ウ**」を發する口附を以て「**イ**」と發音すべし。
3. 「**チ**」及び「**ツ**」は *ti, tu* の音を表さんが爲に作りたるものにして「**ト**」の口の構へを以て「**チ**」及び「**ツ**」と發音すべし。
4. 「**ヂ**」及び「**ヅ**」は *di, du* の音を表さんが爲に作りたるものにして「**チ**」「**ツ**」を濁りて發音すべし。
5. 「**フ**」は *hu* 又は或る場合に於ける *ch* の音を表さんが爲に「**フ**」と「**ホ**」とを合して作りたるものにして「**ホ**」の口附を以て「**フ**」と發音すべし。
6. 「**ラリルレロ**」は舌端を上顎に着けて而して後「**ラリルレロ**」と發音すべし。

## 215. 反響河

- 1) etwas in Bewegung bringen 或物を動かす — 或物を運動に於て持ち來る
- 2) sehnsuchtvoll 追慕の情に堪えざる — Sehnsucht は渴望、追慕、voll は充分なり、満ちてなり、即ち懷舊の情、戀愛の情に堪えざるを云ふ

米國は有名なる岩窟の通路を所有して居る、それを通して、「反響河」と云ふ名の下にて名高き、大河が流る、所の一つの「ボート」に乗つて (in) その河を航し而して水を「ボート」に於て動搖すること(船を揺ぶること)に依り又は擡を以て動かす所の、人々は一種の不思議なる合奏を聞く。最初は銀の鈴の響の如く低くして美しく響く; 然る後に、波が岩壁の最も深き間隙の中まで入り込み而して其處で打ち當る時には、一層強き鐘の音が音律的に(調子よく)其内に(銀の鈴の響の如き低き音に)混ずる。少時の後には多くの教會堂の鐘の響の如くに十分に且つやかましく響く。或深き沈黙の後に(音の全く途絶へたる後にとの意)他の音が響く(聲高くなる)——今や奇怪なる耳語する聲、低き拜む聲、嘆く聲、歎息する聲が聞ゆる(人が何々する聲を聞く)。然る後には復た靜になる(本文には動詞を略せり)。而して今最も深き底よりの如くに一つの快き、追慕の情に堪えざる音が浮び出る; 全き岩窟の洞が不可思議なる調音より反響するまで(總ての岩の間隙より反響して遂に岩窟の全空間に音響の満つるに到るまでとの意)、凡ての間隙より彼(音)が反響する。



### 216. 畫像の説法

- 1) Christi は Christus (耶穌)の二格なり、此字は羅典の變化に従ふものにして Christus, Christi, Christo, Christum, Christe (此最後の格を呼格と云ふ)と變化す
- 2) sich daran machen 着手する — 自分を或物に於て爲す
- 3) Halt gebieten 制止する — Halt は止まること、gebieten は命ずるなり
- 4) die Tafelrunde は「テーブル」の周圍又は食卓の周りに集りたる人々を云ふ

立派なる美術の都市 Florenz は千五百二十九年に嚴しく攻圍せられし。或日敵が或寺院へ侵入せし、それ(寺院)の壁は多くの立派なる畫像を以て飾られてありし所の(寺院云々に反へる)。殊に彼處には Florenz の畫工 Andrea del Sarto の妙手に成りたる (von), 「クリストの晩餐」を寫せし(所の)、特選の繪畫がありし。傭兵の一群は、指揮者が制止せし時には、將に (eben) 畫像を破壊せんとせし(畫像を破壊すべく、着手しやうと思ひし)。彼(指揮者)は目に立つ程感動させられて如何に根のはへた様に此驚くべき畫像の前に停立せしか(如何にも根がはへたかの如く停立せしとの意)。兵士等も亦畏敬を以て幸福を與へつゝある救世主の姿と嚴肅なる其食卓の周圍の人々を觀し。一つの手も破壊することにまで上らざりし(之を破壊せんとて手を上げたものは一人もなかつたとの意)。敬神の(敬神の意より作りたる)美術品は此人々に於て心情を感動し且つ彼等を威服した(彼等の上に勝利を得たりし)。

表題の Die Predigt eines Bildes (畫像の説法)は畫像が人をして敬神の意を起さしめしとの意より名づけたるものなり

### 217. Franklin の晩食

- 1) das Blatt 新聞又は雜誌 — 此語は紙の葉、枚の義より轉じて上記の意味となれるものなり
- 2) die Zeitschrift 雜誌 — Zeit は時、Schrift は書き物なり
- 3) sich mit etwas begnügen 或物にて満足する — sich begnügen は斯の如く前置詞 mit と結合して用ゐらる
- 4) nach etwas suchen 或物を求め、或物を探す — suchen は往々斯の如く前置詞 nach と結合して用ゐらる

Franklin は嘗て Philadelphia の商人等を己れの雜誌に於て侮辱せし、而して此者等(商人等)は、彼れ (Franklin) の雜誌より彼等の保護を撤回すると、威せしと云ふことが、物語らるゝ。Franklin は彼等を晩餐に招待せし、彼等は、彼 (Franklin) が謝罪を爲すであらうと、信せし、然しながら彼等は、各自の席に粥と乳とを盛りたる (mit) 一つの茶碗を見出せし時に、非常に驚きし(驚かされてありし)。Franklin は、彼等の驚きを見し時に、言ひし、諸君、斯様な食物にて満足することの出来る、男子は如何なる恩顧をも求むるを要しませぬ。斯様な男子等は悪しき政略家の道具とはなりませぬ(自分をなさしめぬ)。

### 218.

- 1) Spafsvogel 惡戯者 — Spaf は惡戯、Vogel は本來は鳥の意なれども諧謔的に「ひやうき人者」又は狡猾者杯の意に用ゐらる
- 2) als sei nichts vorgefallen (宛も何事も起らなかつたかの如く)は als ob nichts vorgefallen sei の ob を略したるものなり、此の場合に於ては本文の如く動詞を als の次に置くものとす
- 3) mit jemandem Mitleid haben 或人に對して同情を有す — Mitleid は mit (共に) と Leid (憐み、悲しみ)とを結合したるものにして同情の意なり、而して此語は前置詞 mit を要し mit jemandem Mitleid haben (或人と共に同情を持つ)として用ゐらる

4) stockblind は「まるめくら」の意なり、blind は盲目の、Stoß は元來は、幹、棒、杖杯の意なれども斯くの如く形容詞と結合する時は ganz (全く)又は völlig (充分に)の意味を有す、stockfinster (眞暗黒の)、stocktaub (から壁の)、stockdumm (から馬鹿の)等も此類なり

先頃倫敦に於て或惡戯者は、犬を麻の紐にて (an) 率ゐ行きし所の、一人の盲目の乞食に街道にて出遇ひし、通行人の大笑を引き起さんことを、欲して、彼(惡戯者)はその紐を鉄を以て切斷せし、(それが爲に)犬は彼れの主人(即ち盲目者)より離れし(犬が彼れの主人より離れしこと程左様に)、彼は併しながら、彼れの頓智の結果に就いて喜ぶべき、基礎を久しくは持たざりし、何となればかの盲目の男は其眼を開き、惡戯者の襟を(惡戯者を襟に沿うて)掴み而して彼を傍觀者の大なる喜悅にまで(傍觀者の喝采する程)杖を以て強く打ちのめし; 然る後に彼は己れの犬の處へ歸り來り、彼(犬)を再び麻繩へ縛り、己れの眼を閉ぢ而して、宛かも何事も起らなかつたかの如くに去り行きし、彼はいつもの様に只だ: 一人の憐なる盲目の男に對して同情を持て、一人の盲目なる男に少しの贈物を與へよと、呼びつゝ、(去り行きしに反へる)。

### 219. 眞正の女人國

1) in hellen Scharen 大群を爲して — helle は熟語に於てのみ ganz (全く)又は völlig (充分に)の意にして Schaar は群なり

2) ein paar ist einige (一二の)と同意義なり、然れども之を大字にて ein Paar と書く時は「一對」の意なり、混ぜざる様注意すべし

眞正の女人國は露西亞の Smolensk 州の數多の村落を包括して居る一地方にある、即ち嘗て有名なる巡禮處で

ありし所の、Wesjufow 寺院の附近に(あるに反へる)、久しき以來州の此部分は「婦人の王國」と稱す。男子、殊に左官は、春が此土地に來ると、大群を爲して Smolensk, Witebsk, Minsk, Moskau, Tula 及び其他の大都會へ出で行く、其處では彼等が澤山なる仕事と善き賃錢とを見出す所の、全き夏及び秋の間男子等は一二の老人を除く外は外國に留まる。この間婦人は郷里にて總ての仕事を爲さねばならぬ、無論、男子に屬する所の、其事(仕事)をも亦(爲さねばならぬ)、而して即ち(jo denn)人は彼等が(本來は四格)畑を鋤き、田野を耕し、家畜を養ふのみならず、亦家を建て、細工をし而して鍛冶業を爲すのを、見る。彼等は亦町村會議をも催ふし、而して其村の事件は甚だ嚴格に處理せらるゝ。

### 220. Roon 伯と其家來

1) läge ist liegen (存在す)の過去可能法なり、「あるであらう」と譯すべし

2) davon kann keine Rede sein そんなことを言ふことは出来ぬ — それに就いて一の話があり能はぬ

3) nach.....zu 方へ、面して — zu は只だ nach の意味を強めたるものなり

Roon 伯爵の侍臣が室扶斯に罹かつた而して抱醫者が、病室は近き騒がしき道路の爲に充分靜にあらぬ、又患者を大臣の邸宅内に入れて置くことは、その傳染の危険の爲に、甚だ氣遣はしくある、此者(病人)は直に病院へ送られねばならぬと、説き示せし時に、大臣(即ち Roon)は之に答へて: そんな事を言ふことは出来ぬ、我家來等は我家族に屬する、而して彼等が病む時には、家内にて看護せ

らるゝと(云へり)。然る後に彼は、醫士を庭園に面して (nach.....zu) ありたりし所の、彼れ自身の仕事部屋へ連れ行きし、而して、これは病室に適して居るか、彼に(四格) 問ひし。いかにも (ja), これより善きもの(これより善き病室)は決してあらぬであらうと、此者(醫者)が云ひし。然らば (nun, ja) 彼(患者)は此處へ來らねばならぬと、大臣が答へし。此事が出来し(患者を此室へ移すことが實行せられたとの意)、而して今や日々彼を彼れの主人 (Koon) が見舞ひ、彼れに聖書の語の中より讀み聞かせ而して彼を慰めし。其他の家族も亦彼に種々の慰を爲せし(持ち來たせし)。

### 221. 試験

1) das schweißtreibende Mittel 發汗劑 — schweißtreibend は Schweiß (汗) と treiben (追ひやる)とを結合して形容詞(即ち現在分詞)として用ゐたるものなり、Mittel は方法、手段又は醫藥の義なり

醫學の或受験者は或非常に厳しき試験官より、發汗劑は何であるかを、問はれし。受験者は彼れに知れて居るもの(己れの知つて居る藥品)を順々に列擧せし。併し若しも此總てのもの(藥品)が役に立たぬ(助けぬ)ならば、然る時には君は何を使用するであらうかと、試験官が一步進めて (weiter) 問ひし — 私はその患者をあなたの許へ試験を受けによこしましやう(貴君にまで試験に於て送るであらう)! と問はれたる者が答へし(試験官が汗の出る程いぢめるが故に斯く云ひたるなり)。

### 222. 墨染の話 (黒く染むる事に就いて)

1) gefärbt bekommen (染められて得る)及び 2) gefärbt haben (染められて持つ)は同意義にして何れも「染めて貰ふ」意なり

或男が嘗て一片の布を、黒く染めて貰ふ爲に、或染物屋に持ち來りし。この染色所は、彼が其後黒き一片の布を持つて (mit) 來り而して之を白く染めて貰はんとせし程(白く染められて持たんと思ひし位)、それ程によく彼に氣に入りし。然しながら染物屋は答へし: 一片の布は人間のよき名聲に等しくある: (即ち)それ(布)は蓋し黒くは染められるが、併し再び白くは染められ能はぬと。

### 223. 幸福なる發見物 (拾ひ物)

1) als は元來「何々せし時に云々」と文尾より反へりて譯すべきものなれども、原文の如き場合に於て之を斯く譯す時は其意味不明となるの憂あり、故にかがる場合には文法には反すれども文尾より反へることなく「其時に何々せし」と譯すべし

2) sich für etwas interessieren 或物を面白しとす — sich interessieren は面白く感ずる、興味ありとするなり

3) um die Erlaubnis bitten 許可を乞ふ — bitten (願ふ)は常に前置 um を望む言葉なり

數年前に或小なる跣足の少年が Georgia 州に於ける小川の岸にてあちらこちらへ逍遙せし、其時に彼は突然一個の奇妙なる石が(本來は四格)己れの面前に (vor sich) 砂中に在るのを見し。其姉妹が自宅に瑪瑙石の小さき標本集を持ちし、夫れ故にその兄弟(即ち上記の少年)は、彼女(即ち姉妹)を彼れの發見物を以て喜ばし得るならんと考へし。夫れ故に (ja.....denn) 彼はその石を「ポケット」

の内へ入れし；家に到着すると、彼はそれを両親及び姉妹に示せし。彼等は皆、その石は瑪瑙でないことを、確信した(瑪瑙であらぬことの、それに就いて確信したりし)；彼(石)が何であるかを、彼等は亦知らざりし。少年は併しこの發見物を保存して置きし。或日 Cincinnati より一紳士がその(少年の住する)町へ來りし、而してかの少年は彼にかの奇妙なる石を示せし；紳士は之を面白しとし(之に向つて興味を起せし)而して、其石を一度試験せしむることの、許可を乞ひし。彼(紳士)はそれを家へ携へ、而してやがて此若き少年は、彼れの發見物が一萬弗の價值ある(im) 貴き蛋白石であると云ふ、報知を得し。

## 224. 皇帝 Wilhelm 第一世の債主

1) sich seine Hofe zerreißen 「ズボン」を引き裂く — 此場合に於ける sich (自分に又は自分に取りて)は己れの身に利益又は損害を蒙むる場合杯に特に用ゐらるゝものなり、邦語にては斯の如き用ゐる方なきが故に、此 sich は譯せざるも可なり

2) Das macht nichts (それが何にもななきぬ)は差支へなし、かまはぬ、どう致しまして杯の意に用ゐらる

3) vergessen haben müssen 忘れて居つたに違ひない — vergessen haben は動詞の過去不定法と稱する形にして動作の完了したるを表はすものなるが故に忘れて居つたと譯し、müssen (ならぬ)は人の推定を表はす言葉なるが故に違ひない、筈なりの意味を有す

4) sich damit „dide“ thun 其事を誇る — dide 又は did は「太く、肥大に」なり、damit は或事を以てなり、sich thun は自分を爲すなり、即ち或事に就いて自分を太くすなり、本來此然語は sich damit groß (大きく) thun とすべきものを殊更に dide を以て groß に換へたるが故に其前後に „“ を附して異例なることを示したるなり

皇帝 Wilhelm 第一世は六歳の一童兒でありし時に、其時に嘗て Bohlman に於て長橋(橋名)の前の小練兵場にて彼れの球を以て遊びし。球が實際墓地の石塀を越えて、飛

びし。Friedrich Siegel と云ふ、十四歳の童兒は之を見たりし而してそこで(mun) 石塀を越えて攀ち登り而して其球を持ち歸りし、併しながら其際彼れの「ズボン」を引き裂きたりし。若き太子は彼に報酬として四「グロッシュェン」貨を與へやうと思ひし、然しながら丁度其時には一ツの金子も「ポケット」の内に持たざりし。差支へはない、又いつか四「グロッシュェン」遣らう(汝は其四「グロッシュェン」を他の度に得る)と、彼が言ひし。太子は併しそれを忘れたるに相違なかつた、Friedrich Siegel はかの四「グロッシュェン」を得ざりし而してその爲に(jo) 皇帝 Wilhelm 第一世の債主となつたりし。好んで彼は其老年に於てそれに就いて物語り而して尙大に其事を誇りし。遂にこのことを皇帝が聞きし、而して直に其事實を再び思ひ出せし(それに直に其事が思ひ付きし所の、皇帝が云々に反へる)。茲に於て(mun) 彼(皇帝)は九十四歳なる老 Siegel に五十「マルク」を贈り而してそれにて彼に對する己れの貸借關係を解きし。

## 225. 皇帝の鐘

1) wie bekannt (世人の知る如く)は wie es bekannt ist (それが知れ渡つてある如く)の略

2) Königlich: Soheit 殿下 — Soheit は形容詞 hoch (高き)より轉じたる名詞にして皇族又は王族に對して用ゐる詞なり、而して皇族の時には之に Kaiserlich (皇帝の)を附し、王族の時には之に Königlich (王の)を附す、Wilhelm は獨逸皇帝なれども又 Preußen の王なるが故に Königl. と云ふ言葉を用ゐたるものなり

千八百七十五年に皇帝 Wilhelm は、Baden 大公爵夫人なる、彼れの娘と共に(彼れの娘の同伴に於て)、Köln の大伽

藍に獻納すべき (Röhm の大伽藍に向つて定められたる) 皇帝の鐘を検分せし、其鐘は (die), 世人の知れる如く、大部分は分捕したる佛蘭西の大砲の金屬にて鑄られてある所の(皇帝の鐘を云々に反へる)、兩人は其巧妙なる製作、并に (wie) 其響の充滿(響の鐘一杯に鳴り渡るを云ふ)と清明とに就いて喜びたりし後に、大公爵夫人は、巧みな鑄鐘師なる、Hamm と云ふ師匠に向つて、皇帝の鐘は貴方に其成效に至るまでには必ずや多くの心配を爲したであらうと、云ひし。——如何にも、殿下、と Hamm が答へし、彼(鐘)は私に多くの睡眠なき夜を爲しました(この鐘を作る爲には眠ることの出来ない夜も屢々ありましたとの意)。——今迄無言で聞いて居たりし所の、皇帝は眞面目なる音調にて中言せし、金屬、それより此鐘が鑄造せられてある所の、此金屬は朕にも亦時々睡眠を奪ひしことを、貴君は只だ信せよ、親愛なる師匠よと(戦争の爲に朕も眠らざりし夜の往々ありしことを只だ信せよとの意)。

## 226. 「ハンカチーフ」

- 1) Stütteleid とは麻布等にて作りたる長き法被(ハツビ)を云ふ
- 2) vor etwas behütet haben müssen 或物を防いだに違ひない —— behüten は前置詞 vor を要する動詞なり、時の關係に就いては 224 節の 3 参照
- 3) sich die Stirn abtrocknen und die Nase putzen の sich (三格)は「自分より」又は「自分に取りて」の意にして茲にては「自分より或物を清め取る」との意より用ゐたるものなり

かの有用なる朋友たる、「ハンカチーフ」(「ハンカチーフ」は吾人に最も必要にして吾人と相親しむものとの意より之を朋友と云ひたるなり)、それを(二格)缺くことを吾等の

中の各人が已に痛ましく感じた(「ハンカチーフ」を持たないと誰でも是迄困却した)所の、「ハンカチーフ」は古代の希臘人及び羅馬人に於ては一般には用ゐられざりし(一般であらざりし)、少なくとも其れは鼻の爲に用ゐられずして、却つて汗を(二格)拭ふことの爲に用ゐられし。それは汗拭と名づけられし。この汗拭は衣服の襜褕(ヒダ)の中に携帯せらるゝか又は首の周りに結びつけられし。斯様に (io) 支那人は尙今日でも彼等の「ハンカチーフ」金子及び必要なる(缺くべからざる)扇子を、彼等の法被を結束する所の、幅廣き帯の中に携帯する。羅馬及び雅典の粧扮者等は常に二枚の汗拭を携帯せしと云ふことである(携帯せしことの、其事が報せらるゝ)。鼻をかむことは古代に於ては非常に不行儀とせられし。南方諸國の溫暖なる氣候は恐らくは鼻をかむことを防いだに相異なる、然らざれば男子は、若しも妻が鼻拭を要する場合には、之を去り得しこと(彼れの妻より別れ得しこと)、及び求婚者はその撰びたる女が鼻をかむことを要せぬかを (ob) 夙に確めしと云ふことは、了解し難くあるであらう。—— Tirol に於て用ゐらるゝ滑稽なる「Fasinetlein」と云ふ名稱は蓋し顔拭と云ふ意味である(顔拭を意味する)而して、額を拭くこと、鼻を拭くこと、の、兩方を許して居る。

## 227. 慈善家としての女王

- 1) Samaritanin は本来は「サマリア」婦人のことなれども慈善家の意味に用ゐらるゝこと屢なり(第八輯 157 節の 1 参照)
- 2) wie bekannt 世人の知るが如く —— (本輯 225 節の 1 参照)

3) als — (本輯 223 節の 1 参照)

4) verbunden の下には hatte を略したるものなり

世人の知る如く、女醫として教育せられたる、葡萄牙の女王は、それにまで(女醫として働くべき)或機會が存在する時には、斯様なもの(即ち女醫)として働く。即ち (10) 女王は一宮女と共に散歩せし(散歩の上でありし)、それ(散歩)は Siffabon の近傍にある森に到るまで伸びし所の(散歩の距離は Siffabon の近傍なる森の處まで達せしとの意)。人が(暗に女王と宮女とを指す)已に引き返さうと思ひし、其時に此貴婦人等の耳へ或叫び聲が響きし、それ(貴婦人)は直に、それより人間の聲が來りし所の、方角へ急ぎ行きし所の(貴婦人の云々に反へる)。茲にて彼女等は、餘り早く倒れたる樹木の爲に重き傷を受けたりし所の、憐むべき樵夫を見出せし。女王は巧なる手を以てこの男の傷を紮帶したる後に、負傷者を其小屋に連れ行かしめし。この高貴なる婦人は、己れの患者の物質的の困難(金錢杯の困難を云ふ)を和ぐるを以て(和ぐべく)、満足せざりしのみならず、却つて、それ(疵の手當)が必要でありし間は、引き續いて亦その者の傷を治療せし。

## 228. 愛 國 心

1) der は Offizier の冠詞

2) einen mit Versprechungen bestürmen — Versprechung は約束、bestürmen は迫る、攻撃するなり、即ち或人を旨き約束を以て己れの意に隨へんとするを云ふ

3) der は General の冠詞

4) der は Mann の冠詞

5) des Weges kundig 道を知れる — kundig は二格を望む形容詞なるが故に des Weges と二格にしたるなり

6) alles aufbieten — aufbieten は集むる、力を盡すなり、alles は總てをなり、即ち總ての力を盡すことなり

或農夫は(千八百〇九年)維也納へ佛蘭西人の最初の侵入の際に(佛蘭西人が初めて維也納へ侵入したる時にとの意)一縦隊の案内者とならねばならざりし、それ(縦隊)を以て人が(暗に佛人を指す)重要なる計畫を夜中の進軍に依つて實行せんと考へし所の(縦隊云々に反へる); 農夫は然しながら否みし。縦隊の前衛を指揮する佛國の士官は烈しく彼に(in ihn)逼りし; 農夫は靜に彼れの拒絶を固守せし(拒絶に於て留まりし)。士官は今や、彼を或約束を以て説き服せんとせし(説き服すべく始めし)、而して彼に遂に金子を以て充分満たされたる彼れの財布を差し出せし; 然しながら總てが無益で(ありし)。其内に縦隊其ものが到着せし、而して之を率ゐる所の將官は、前衛に(四格)尙出會ふことを、非常に驚き且つ怒つてありし。かの士官は、この唯一人の道を知れる男が、彼等の道案内者となることを(彼等の道案内者であるべく)、否むと云ふことを、物語りし。假令彼(士官)が、彼(農夫)をそれにまで動かすべく(彼れの心を其事をする様に動かさんとの意)、種々手を盡したれども(否む云々に反へる)、かの農夫はそこで目通りへ引き出だされし。汝は我々に正しき道を教へるか、然らざれば(entweder.....oder)余は汝を射殺さしむると、將官は彼(農夫)に呼びかけし。——全く宜しい、と農夫が答へし、然らば(10)私は正直なる臣民として死せん而して國賊となることを要せぬと——將官は驚きて彼に手を捧げし(握手せんが爲に手を出せ

しとの意)而して話せし: 歸り行け, 勇敢なる男よ; 我等は最早 (ichon) 案内者なしにて策を施さうと思ふ(我等を助けやうと思ふ)と。

### 229.

數學の開祖(本來の父)なる, Euclides は國王 Ptolemäus Lagi に幾何學に於て教授を爲せし(授業を與へし), 而して彼 (Euclides) が彼(王)の爲に方法を最早平易にすることは出来ぬかを, 此者(即ち王)が問ひし時に, 彼 (Euclides) は高慢に答へし(答にまで與へし): 幾何學を學ぶに(幾何學にまで)王に向つても亦(王様だからと云つても)一つの特別の方法はありませんと。

### 230. 永久

或教師は其生徒の一人に(四格), 其才智を試むる爲に, 「全永久はいか程永くあるか」と問ひし。はつきりと童兒が答へし: 先生様! 全永久は, 半分のもの(永久)よりは, 確に尙一倍程長く續かねばなりませんと。

### 231. Ceylon 島に於ける米作

1) Wie bei uns Getreidefelder は本來 wie bei uns Getreidefelder sind (我々の處にて穀物畑がある如く)の sind を略したるものなり、譯文に之を「我々の處に於ける穀物畑の如く」としたるは文法上の關係を誤りたるものなれども解し易からんことを思つて斯く譯したるなり

2) junge Reisplanze 苗 — jung は若き、Reisplanze は Reis (米)と Pflanze (植物)とを結合したる詞なり

3) leichte Veriefelung — leicht は輕き、Veriefelung は水のとろとろと灌ぎ流るゝことなり、故に leichte Veriefelung は茲にては少しづつ流れ入る水と解すべし

4) vor sich geben 起る、出来る

5) 4-6 は vier bis sechs (四乃至六)と續むべし

6) schnittfähig 刈り取らるゝ様に — Schnitt は切ること、fähig は能力を有して、力を有して、事に堪えてなり、即ち schnittfähig は刈ことに堪え得る様になりてとの意なり

Ceylon 島の土人は有爲なる米作者として有名である; 彼等の米田は我々の處に於ける穀物畑の如き畑ではない、却つて土手にて取り巻かれたる平かなる池である。この池は、土地が和らぎ且つ泥濘となる爲に、水の下に置かるゝ(水にて浸さるゝとの意)。暫くの後この水が排出せらるゝ、而して濕りたる地面が半「エルデー」深く(半「エルデー」の深さに)鋤き反へさるゝ。然る後に再び人が其上に水を引き(走らしめ)、而して、全き土地が薄き粥となつて仕舞ふまで、若干の牛が其中を駆け廻らねばならぬ。この泥濘の粥の中に然る後に米が蒔かれる、而して十四日間にこの泥濘池が芽を出して來る苗の水分多き緑を以て掩はれる(掩はれてある)。この粥を乾かさぬ爲に(乾燥にならしめぬべき爲に)、今は少許の水が引き入れられねばならぬ、これに由つて土地が常に柔かに留まる爲に、而して成熟期が來るまでの間(まで、左様に長く)此事が出来る。米の收穫が始まるべき時には、水が全く排出せられる、而して刈ることが始まり能ふ(刈入を始めることが出来るとの意)。充分に水が存在してある時には、Ceylon 島の土人等は一年に二回収穫することが出来る。一二の米の種類は只三箇月を要し、他のものはやつと四箇月乃至六箇月の後に刈り取らるゝ様になる。米作は泥濘質の土地の爲に甚だ不健康である; 此の眞正の米作地(米作の本場との意)に於ては熱病が恰ど絶へ

ぬ。吾が農民等は夫れ故に Ceylon 島の米作者を其二倍の收穫の爲に羨むには及ばぬ(羨むべく要せぬ)。

### 232. 有力なる辯護

近頃(耶蘇教に)歸依したる「シリヤ」の奴僕は、其信仰せざる主人が彼に強ひんと思ひし所の、勞働を日曜日に爲すことを、否みし。併し、或人に牡牛若くは驢馬が井戸中に落つる場合には、彼(或人)が之を安息日にても亦引き上げ得ることが、汝等の聖書に於て書いてあらぬか(立たぬか)と、此者(主人)が彼に(四格)問ひし。——いかにも、併し其驢馬が、毎日曜日に井戸に落つべき、習慣を取るならば(習慣がついたならばとの意)、其時には或は其井戸が埋められるか或はそんな (jo ein) 驢馬は賣り拂はれねばならぬと、彼に奴僕が答へし。

### 233. 腹藏なき(打ち開きたる)懺悔

1) unmöglich wagen können 敢てし能はぬ、試み能はぬ——は nicht wagen können と同意義にして unmöglich は不可能に、wagen können は敢てし能ふ又は試み能ふなり、下の unmöglich haben können も是に同じ

2) da doch は obwohl, obgleich 又は während と同意なるが故に「何々と雖ども」又は「何々するのに」と譯すべし

第十七世の最も有名なる英吉利の説法師の一人なる、Stillingfleet は、平常は (jamt) 空手で説法せしのに、教會堂に於て Karl 二世王(即ち Karl 大王)を認むるや否や、其都度 (jedesmal) 彼れの説教を朗讀するのを常とせし。王、それに人が此事を物語りし所の、王は彼に(四格)其原因に就

いて尋ねし。斯く高貴なる聴衆の前にては、殊に威厳高き君主の臨御が私に (auf mich) 最も烈しき感動を爲す時には、私の記憶に依頼することを、敢てすることが出来ませぬと、説法師が答へし。王は此答に依つて満足させられてありし。併し陛下も私に恐らく亦一つの質問を許されましやうか(許さうと思ふか)と、Stillingfleet が語を繼いで云ひし。陛下は私と同様の(私の如く同一の)原因(貴人の威光におそる、と云ふ原因)を有せぬであらう (können) のに、何故に陛下は (Sie) 陛下の演説を國會に於て朗讀し給ふかと——貴君の質問は尤である、夫れ故に朕は貴君に全く正直なる答を與へやうと思ふ。何となれば朕は已に朕の聴衆(即ち議員等)より朕が彼等の顔を見ることを(彼等に顔に於て見るべく)、恥づる程、其れ程屢々且つ其程多額の金員を請求した故に、その事が出来る(朗讀するのであるとの意)。

### 234. 千八百七十年九月二日

1) Unter den Linden は伯林の最大なる街の名にして Friedrich 大王の立像及び宮城のある所なり

2) der alte Fritz 老「フリッツ」——は Friedrich 大王のことなり

千八百七十年九月二日に Sedan の勝利及び Napoleon の生擒に就いての報知が伯林へ來りし時に、其時に國民に於ては筆紙に盡し難き歡呼の聲が起りし。諸學校は休業せられ(閉ぢられ)、而して大群の童兒等は、Unter den Linden に Wilhelm 王の宮城の前に立つ所の、Friedrich 大王の紀念碑の方へ行きし。或大膽なる童兒はこの高き立像に(四



格)攀ち登り而して大王の三角の帽子の上へ一つの花環を置き而して獨逸の旗をその(大王の)腕の内へ挟みし。女王 Augusta の注意する所となつた位、大聲なる萬歳の聲が此少年の行爲を歓迎せし。この少年が再び攀ち下つたりし時に、女王は彼を宮城へ來らしめ而して彼に三個の金貨を鍍金したる茶碗に入れて(in)贈りし。如何にしてかの高き紀念碑の上へ攀ち登ることが出来たか(攀ち登るべき、其事が如何に彼に出来得べくあつたか)と、彼(女王)が彼に(四格)問ひし時に、彼は答へし：假令老 Srib が尙三倍程も高く其馬に乗つて居る(坐す)とも、尙私は彼に(四格)花環を被らせ且つ彼に旗を捧げたであらう！別れに臨んで女王は彼に手を與へやうと思ひし。童兒は併しながら狼狽して己れの手を引つ込ませ而して、いえ、陛下、それはいけません！と言ひし。なせいかぬのか、吾子よ。いえ、女王陛下、老 Srib は全く甚だしく不潔でありました！と少年が答へし。

### 235. 人は自助の法を(己れに助くべく)

知らねばならぬ

1) an etwas (daran) liegen は或事に理由の存するを示す言葉にして「爲である」又は「故である」と譯すべし

Emma は誕生日を祝せし。人が(客人がとの意)食卓に着坐せんと思ひし時に、充分に椅子が存在せざりしことが、起りし(椅子の数の足らざりしことがわかりしとの意)。其事(椅子の足らざること)は不都合でありし、然る

に Emma は申譯することを知りし、彼女は云ひし：充分に椅子が存在せぬことの、故ではなく、却つて私が餘り多くの連中(客の總稱)を招いたことの、故であると(椅子の足らざるは其数の少なさが爲にあらずして過多の客を招きたるより起りたることなりとの意)。

### 236. 電信に用ゐられ能はざる語

(打電せられ能はぬ所の、言葉)

- 1) die chinesische の下には Sprache を略せり
- 2) das Ziffersystem 數字の仕組 — Ziffer は數字、System は系統、仕組なり、即ち數字を以て電報を發する様に仕組みたる方法を云ふ
- 3) der Drahtweg 電線 — Draht は針金、Weg は道なり
- 4) den Kopf zerbrechen 腦を痛める — Kopf は頭、zerbrechen は毀はすなり
- 5) die Schriftsprache は譯文に單に「語」と譯したれども本來は「口語」の反對にして「文章語」のことなり

電信に用ゐられ能はざる、語は支那語である。此困難を(三格)救ふ爲に、人が一つの數字の仕組を發明した、それに依れば此語に於ける(此語を用ひてなす)通信を電線に依つて(auf)送達することが出来る(送達することの、其事が出来様にせられてある所の、數字法を云々)。電報を送達する、當該官吏は其もの、(電報の)意味の爲に腦を痛める必要もなく且つ、自己の(er)發する所の、電報の意味に就いては又只最も僅の想像を有することなくとも(電報の大體の意味をすら推測すると能はざるも)、日々打電することが出来る、何となれば彼(官吏)は實際數より外には何も打電せぬ故に。之に反して電線の他の端に於ける官吏にあつては(mit)異なつて居る(全く事情を異

にして居る),彼は制規の字書を手に持ち而して電報の受領の後に,各の受け取られたる数字の代りに普通の文字を書き下しつゝ,此ものを翻譯せねばならぬ.支那語の文字の唯八分の一が電信字書に於て登載せられて居る;然しながら此もの(文字)が一切の實地上の目的には充分足りて居ると云ふことは明白である(足りて居ることの,それが自分を示した).

### 237. 一つの説明

1) unter anderem — は之を直譯せば「他の物の内」にして即ち他の物と打ち混じての意なり、故に言葉の成り立ちに異なれども neben anderem (他の物と相並んで)又は außer anderem (他の物の外に)と同意義なり

物理の教師が其生徒を試験せし而して他の物の外に熱と寒冷とは如何なる性質を有するかと問ひし。生徒は「寒冷は收縮させ熱は膨脹せしむ」と、全く正しく答へし。そこで (nun) 教師は、斯様なること(寒は物體を收縮せしめ熱は物體を膨脹せしむること)を例に依つて證明すべく、生徒より望みし。そこで最後の者(生徒)が答へし:「冬に於ては日が短く夏に於ては彼等(即ち日)が長くある」と。

### 238.

1) unglücklicher Weise (二格)不幸にして — unglücklich は不幸なる、Weise は仕方又は方法なり、而して二格としたるは名詞を副詞形に用ゐたればなり

2) auf etwas losgehen 或物の上へ突進する、或物へ飛びかいつて行く — los は飛び出る又は飛びかゝる意なり、而して此語は通常前置詞 auf を望む

3) alle Wetter! は驚愕、不平杯の場合に發する詞にして「やあしまつた」「やあ大變だ」又は「とんでもない」杯の如き意味を有す

或愚なる召使は其主人に或晩暗黒中にて或物を部屋より取り來らねばならざりし; その室は全く開いて居りし、然るに召使はそれを知らざりし(室は、召使がそれを知ることなく、全く開いて立ちし)。顔を壁に突き當てぬ様に(顔を以つて壁に對して突き當てぬ爲に)、彼は兩腕を延ばして己れの前に差し出せし。不幸にして彼は、戸が(而)彼れ(召使)の差し延ばしたる腕の間をその角を以て通過し(戸の角が差し延して居る腕と腕との間の處に行きしとの意)而して彼れの鼻に(四格)烈しく當たりし様に、丁度開きたる戸へ突進せし。やあしまつた!と彼は痛みの爲に叫びし、此やくざ(忌々しき)鼻が、私の腕よりも、長くあらうとは、併し少しも考へ及ばなかつた!

### 239. 巴里人の商法心

1) unter anderen Erinnerungen 種々の回想談中にて — Erinnerung は記憶、回想又は回想談なり、ander は元來は「他の又は外の」なり、unter anderen Erinnerungen は「他の回想談と打ち混じて」との意なり(本輯 237 節の註参照)

2) des は佛語にして獨逸の von に同じ

大凡十年間巴里に住まひたる、或英國人は倫敦の雜誌に於て種々の回想談の中に、巴里人の商業心に顯著なる證據を示す所の、次の如き小話を物語つて居る: 彼が Saint Peres 橋を渡る(橋を越えて歩む)時に、其都度(jedesmal)一匹の非常に不潔なる犬が彼の前に倒れし而して彼に甚だしく靴を汚せし。直に橋の他の方面より磨靴夫(クツミガキヤ)が現はれし、それは、彼に靴を掃除せんことを、申出でし所の(磨靴夫云々に反へる)。最初は彼

(英國人)は別段其事に注意せざりし。併し其以後毎日この遣り方が續きし(己れを反覆せし)。こゝに於て(immer)彼はその犬を觀察せし而して直に、——この犬が其男に馴れてありしことを、見出せし。其外又それは甚だ狡猾なる犬でありし：(即ち)貧しく服装したる者を彼(犬)は無事に過ぎ行かしめし、然しながら美裝者の靴の上へは眞の狂暴を以て打ち倒れし。

### 240. 無邪氣

或紳士は或高貴なる家に客に招かれたりし；彼は食事の鐘に中々(immer noch)隨はざりし故に(食事を始むる知らせの鐘が鳴つたのに彼の紳士は未だ出席せざりし故にとの意)、人は下女を彼れの部屋へ遣りし、それ(下女)は彼を丁度齒の掃除の際に出遇ひし所の(下女を云々に反へる——下女が彼の紳士の居る部屋へ行きし時に丁度紳士は齒を磨いて居りしとの意)、彼女(即ち下女)は再び其貴婦人(茲にては主婦の意)の許へ、かう云ふ報告を以て來る：あの旦那は直に來ますよ、あの人はちよつと(noch erst)齒を尖らかして居る計り(nur)ですから(彼れの齒を鋭く爲す)と(下女は紳士の齒を磨くを見て食物の良く噛める様に齒を尖らして居ると思ひ無邪氣に衆人の前にて斯の如く云ひたるなり)。

### 241. 三百年後

- 1) es hat gegeben は es gibt の現在過去なれば「あつた」と譯すべし
- 2) einen mit etwas beschenken (或人を或物を以て贈物す)は或人に或物を贈與すとの義なり

- 3) ein Geschenk (贈物)は das war ein Geschenk の略なるが故に「贈物なり」と「なり」を添へて譯すべし
- 4) Gastfreiheit genießen 厚遇を受くる——Gastfreiheit は厚遇、優待、genießen は受くるなり

和蘭に於て新教の信者を甚だ驚くべく追撃したる、西班牙の Alba 公爵より恐らく殆ど曾て宗教改革と聖書とに對する(二格)決心堅き敵はなかつた。一萬八千人を殺戮し而して、六十八年間續きし所の、一戦争を起したと云ふ、名譽を擔つて(mit)彼は Madrid の方へ歸りし、其處にては彼が非常なる名譽を受けし所の(名譽を以て積み重ねられし所の、Madrid 云々)、法王は彼を宗教の防禦者として神聖なる帽子と刀劍とを以て贈與せし、これは以前は唯王のみが得し所の、贈物なり——Alba 公爵の古き宮城に於ては現今、英國及び外國聖書會社の代理人なる、Samejon 氏が住まつて居る。此宮殿の大室の多くは今は全西班牙に對する聖書の本倉庫として用立ち、而して今は新教の多くの僧侶が、新教の多くの從僕を禁錮し、絞殺し或は焦殺したる所の、男の寢室の一に於て厚遇を受ける。

### 242. 伯林の Diogenes.

- 1) Diogenes 希臘の賢人の名——(第六輯 95 節參照)
- 2) Er は眼下の者に對し二人稱として用ゐらるゝ言葉にして「其方、貴様」抑と云ふが如し(第六輯 85 の註 4 參照)
- 3) einen kennen lernen 或人を識る、或人と近づきになる——kennen は識る、lernen は學ぶなり
- 4) im geringsten 毫も——此語は打消の言葉あるにあらざれば用ゐることを得ざるものなり、即ち本文に於て ohne あるが如し、geringst は gering (僅に)の最上級なり

伯林附近の Hagenheide (森林の名) 中の岡陵なる, der Duffere Keller に於て前世紀の初めに或孤獨なる隠士が住家として一つの洞窟を掘りたりし。Schneider, —と (iv) この奇人は名乗りし—は (Schneider より續く) 以前大選帝侯の宮廷にて侍臣であつたりし。此奇異なる男は特に慈善的の施物に依つて (von) 生活せし而して, 人物の如何を顧みず (人物の顧慮なしに) 何人にでも (四格) 「其方」と云ふ言葉を以て話しかける, 習慣を持ちし。Friedrich Wilhelm 第一世も亦 (ebenfalls) この男のことを (von) 聞いたりし而して或日, 彼を識らんが爲に, Tempelhof より (von.....aus) Hagenheide へ騎行せし。久しき談話の後に節儉なる君主はこの隠士に一「ターブル」を贈與せし。併し Schneider は言ひし: 「この貨幣は我に取りては多過ぎる, 其方は只だ之を再び取れ而して其方は我に一二の銅貨を與へよ」と。王が斯の如きもの (即ち銅貨) を携帯せざりし故に, Schneider は彼 (王) に背を振り向け而して, 毫も己れの尊き來客に頓着することなく, 己れの洞窟中へ這ひ戻りし。

### 243. 外交上の一原則

- 1) der expedierende Geheimsekretär 秘書官 — expedieren は文書を調製する、文書を發送する、事務を進捗させる、Geheim は秘密、Sekretär は書記官なり
- 2) warten を文首に置きたるは「待つ」の意義を強めたるなり

嘗て皇帝 Napoleon 一世の秘書官が病氣となりし。宮内大臣は皇帝に適當の代理者を推薦し而して其者の沈黙なることを賞讃せし。Napoleon は頭を振つて答へし: 國

家の秘密を朕の外に尙一人が知つても既に悪くある; 三人—それは行かぬ! 夫れ故に寧ろ, Meunier (秘書官の名) が恢復する (再び健康になる) まで, 待たうと。

### 244.

- 1) Es fehlt einem an etwas 或人に或物がない — それが或人に或物に於て缺ける、此處の es は文法上の主言
- 2) die Stucht ergreifen 逃走する、逃げ去る — die Stucht は逃走、ergreifen は掴むなり

或小さき佛國の田舎の町にて或勞働者は、郵便局に彼宛てたる (für) 一通の手紙が到着したと云ふことを、聞きし; 彼は無論、彼 (手紙) を受け取ること、希望せし、然しながら彼には郵税の支拂にまでの金子があらざりし。然しながら (in des.....doch) 彼は赴きし而して彼 (手紙) を請求せし; 而して郵便官吏が彼れの願に應じた時に、彼は、宛も己れの「ポケット」に於て金子を探すかの如き、假裝 (フリ) をしながら、郵税の金高を問ひし。暫くの後には、彼が読み能はぬと云ふことを、述べ、而して、手紙を開封し而して彼に内容を云うて聞かせる様にと (告げるべく)、官吏に (四格) 願ひし; 此事が出来し、官吏は手紙を高聲に (聞き取り得べき聲を以て) 讀みし、而して勞働者は注意して聞きし; 然しながらかの者 (官吏) が其朗讀を終へた時に、最後の者 (勞働者) は、誠に有難う (私は丁寧に謝する); 金子が出来次第 (私が金子を持つや否や)、私は再び來りて拂ひましやう; それまでの間 (unterdessen) 貴君はその手紙を保管して置いて下さい (保管せよ)! と呼びながら逃げ行きし。

## 245. 腸詰に對するに腸詰を以てす

1) *Stuft wider Stuft* 腸詰に對するに腸詰を以てす — 我國にて賣り言葉に買ひ言葉、暴を以て暴に換ふ、杯の如き意味の俚諺なり

2) *der Strafvogel* 惡戯者 — (本輯 218 節の註 1 参照)

或惡戯者は汽車にて (mit) 旅行せし; 或停車場に停車せられし時に、彼は入口の窓を通して頭を伸ばし而して車掌に手招きせし。彼 (惡戯者) は彼に (四格) 問ひし: 貴君は蒸氣力を發明しましたのですかと。この鐵道の役員が驚かされて彼を眺めし而して、其車に於ける旅客等が彼を冷笑せし故に、怒つて去りし。今や總てが進行にまで準備せられてありし時に (發車の準備が出来たときの意)、車掌は再び此車の處に來り、速に戸を引き開け而して嘲弄者に向つて云ひし: 貴君はお下りなさい、早く、貴君はお出なさい!

此者 (惡戯者) は考へし、彼 (自分) は他の車に乗らねばならぬのであらうと而して直に従ひし。彼が併し漸く地を踏みしや否や、其時に車掌が出發の信號を與へ而して笛吹きし、而して列車は走り去りし。吾等の (吾等の茲に話をして居る) 惡戯者は立ち留まりし而して尙暫時の間 (二三の瞬間) 待ちし、然しながら、何故に人が彼を呼び出したるかを、理解し能はざりし; 今かの嘲弄せられたる鐵道官吏が彼を指して (*auf ihn*) 來りし時に、彼は彼に (四格) 問ひし: 何故に一體貴君は私を呼び出しましたかと。私は貴君に、私は蒸氣を發明しませんでしたことの

みを言はうと思ひましたと、彼 (惡戯者) は嘲弄的に返答を受けし (返答に迄得し)。

## 246. 同情深き昆蟲

多くの昆蟲の相互の補助に就いて (互に補助し合ふことに就いて) 人間は身分に一つの例を取ることが出来る (鑑とすることが出来るとの意); 第一着に (第一の線に於て) 茲には蟻と蜜蜂とが立つ (第一に指を屈すべきものは蟻と蜜蜂とであるとの意)。

若し飢へたる蜜蜂が或食物を以て満腹させられたもの (蜜蜂) を見出す時には、第一の者 (即ち飢へたる蜜蜂) の合圖に應じて、貯蓄を以て備へられたる蜜蜂は其内の (貯蓄中の) 一部分を其飢へたる姉妹 (蜜蜂は女性なるが故にかく姉妹と云ひたるものなり) に與へることを、人は觀察し能ふ。此觀察を人は蟻に就いても爲すことが出来る。補助を受けたる蟻はその恩人 (即ち補助したる蟻) に愛撫することに依つて己れの感謝を發表する。

## 247.

或貴婦人は小路の上にて或乞食より話し掛けられし彼女は彼に二 Kreuzer を與へし。私はこれを以て何をすべきか (此れ計りの金をどうすれば良いのですか) と、彼は不謙遜なる音調と輕蔑したる眼付とを以て問ひし。靜に貴婦人は答へし: それを貧乏人に與へよと。

### 248. して遣られた(其れが成功した)

1) ach Gott! (あー神よ)は驚嘆、希望など種々の場合に用ゐらるゝ間投詞なり、茲にては「あーしまった」と譯すべし

或將官の召使はそれの(將官の)制服を玄關にて叩き拂ひし(制服の塵をはたいて居つたとの意)、其時一人の識らぬ人が彼れの處へ進み而して彼れに一枚の書附を次の如く云ひながら(言葉を以て)渡せし: 貴君は此手紙を直様貴君の主人にお渡し下さい(與へよ)、私は御返事を待つて居ますと。召使は將官の處へ走り行き而して彼に此手紙を渡せし。此者(將官)は彼(手紙)を開封し而して高聲に讀みし: 成功するも良し、成功せざるも亦可なり(それが成功すれば、其時はそれが良くある、それが成功せぬとも、亦良し)。— 此の人は氣違ひに違ひない、彼を入り來らしめよと、將官が呼びし。召使は急き出でし、然しながら直様歸り來り而して呼びし: あーしまった、あの泥棒にして遣られました(其れが彼の盜人に成功した)、あいつは貴方の制服を盗みました。

### 249. 高價なる鬩羊の股

1) die Hammelkute 鬩羊(キンキリヒツツ)の股 — der Hammel は肥満せしめんが爲に睾丸を抜き取りたる羊、die Kute は動物の後股なり

2) Silo は tausend (千)の義にして茲にては Kilogramm (千グラム)の意なり、即ち我凡そ二百六十六匁余に當る

3) die Markthalle は der Markt (市場)、die Halle (堂、廣間)を結合したるものにして一大家屋内に設けたる市場を云ふ

4) einen bedienen 或人に仕へる、或人の御用を聞く — bedienen は四格を望む動詞なり

5) mit ansehen の mit は或事に興かる意なり ansehen は「注視する、熟視するなり」此二語にて熟視する、注視すると譯して可なり

6) denn は茲にては als と同意義なれば「より」と譯すべし

甚だ立派に着服したる一貴女が近頃巴里に於ける某商店に來りし(現はれし)而して自分の爲めに六 Frank の割にて五 Silo の羊毛を秤らしめし。天秤の側に立て掛けられたる(凭れし所の)、袋の上に見事なる鬩羊の股がありし、それを丁度今商人の下女が市場より家に持ち來りたりし所の、(立派なる鬩羊の肉云々に反へる)。此肉片は羊毛の女客に左様に慾望を起させつ、現はれし(肉片は女客をして慾望を起さしむる有様を呈して居つたとの意)、(即ち)彼女は、手代が他の人の(四格)御用を聞きし間に、其れ(肉片)を全く巧に買ひたる羊毛の内に混じり而して或縫をしたる袋の内に隠し(消失せしめ)能ひし程(左様に慾望を起させつ、云々に反へる)。然しながら、店に掛けられてありし所の、鏡に依つて商人は此總ての所業を熟視したりし。かの貴女が今、其買物を(買物の代を)支拂ふ爲に、帳場に近づきし時に、商人は手代に向つて話せし: お前は間違はなかつたことを、確信して居るか。私は、この奥様が五 Silo 以上の(五 Silo よりはより多くの)羊毛を其の小袋の内に持つて居ると信するが。

人は容易にその反對に就いて自分を證明することが出來ます(間違のないことを容易に知ることが出來るとの意)、私はこの全部を再び天秤の上へ置いて見やうと思ひますと、手代が答へし。この事(天秤にて量り直すこと)が夫れ故に直に爲されし而してこの小包が八 Silo 半

あることを(八と而して半 Silo 重量せしことを), 人が見  
出せし。奥さん, あなたの御覧なさる通り(あなたが見る),  
間違つて居りました(それが間違の上に休む)と, 商人は  
充分嘲弄して(嘲弄充分に)話せし。あなたはその超過を  
お拂ひなさいますか或はお返しになりますか。私はそ  
れを貰つて置きますと, かの非常に赤面したる貴女が答  
へるべく急ぎし(急いで答へたとの意)而して——かの鬮  
羊の肉を羊毛の如くに — Silo を六 Franc の割合にて支拂  
ひし, そこでかの股は十八 Franc に當りし(十八 Franc の  
上に立つべく來りし)。商人はかの過剰金を貧者に贈與  
したと, 言ふことである(人が言ふ)。

## 250. 眞に實地的の醫師

亞米利加に於ては最早珍らしからざる(亞米利加では  
斯の如きことは往々ありて珍らしからずとの意)方法に  
て此頃或此地の醫師は己れの一身を結婚の市場で賣物  
に出した。彼は各の身分及び年齢の婦女子に向つて(ど  
んな身分の女でもどんな年齢の女でもとの意), 不具者及  
び黒奴を除くの外は(……の取除けを以て)二十「マルク」の  
富鬮を賣らしむ。この富鬮の當撰者はかの天才ある醫  
師の妻となり而して——彼(醫師)とかの賣られたる鬮  
の利益を分つ。それ(富鬮)から二千乃至 (bis) 三千を賣  
るべき, 彼れの希望は成就するならん。各の New-York の  
下女は、「ドクトル」夫人にならんと, 意氣込んで(決心して)  
居る。

## 251. Friedrich 大王のお抱へ馭者

1) der Leibfischer お抱への馭者 — der Leib は身體, der Reitscher は馭者なり、即ち  
君主杯が一身の爲めに抱へ置く馭者を云ふ、der Leibarzt (待醫) das Reitpferd (御乗り料  
の馬)杯し此類なり

2) mein Gott! (私の神よ)は本輯 248 節の註 ach Gott! に同じ、茲にては「是はし  
たり」と譯すべし

Friedrich 大王は旅行中 (auf einer Reise) 彼れの馬車と共に  
顛覆せられし。彼は固より少しの害をも受けざりし(取  
らざりし)が、然し彼は杖を振り上げて(高められたる杖  
を以て)彼(馭者)を目指して (auf ihn) 走り行き而して彼を  
打ちのめさんと嚇せし程、左様に馭者に對して怒らせら  
れてありし。決心して馭者は怒りたる王に呼びかけし:  
是はしたり、陛下、貴方は世界が見し所の、最も良好なる  
大將である(古今を通じて絶えて無き最良の大將なりと  
の意), 然るに (und doch) 貴方は已に多くの戦に敗北せし(多  
くの戦を失ひし)私も亦今一つ(戦)を失ふた(馬を御し誤  
りたるを云ふ)而して其れは三十年以來初めてのもので  
ある。貴方は只信せよ、私が貴方よりも十倍もより立腹  
してあると云ふことを、(陛下は屢々敗北致さるゝが故  
に私は陛下よりも幾倍疴癘に障るか知れませぬとの  
意)。王はこの滑稽なる比較に就いて笑ひ、其間に起され  
てありし所の、車に乗り、而して先へ車行せし。

## Zeitung (新聞)

1. 日本の皇帝陛下は Sachsen の國王 Georg 陛下に菊花大綬章を授與せられたり。

1) 2) は共に Seine Majestät (陛下)の略なり、但し 2) は三格なるが故に Seiner Majestät と讀むべし

2. 現今東京に於ける士官學校の (an) 教官として勤務中なる(仕事してある所の)、日本の梨本親王は、今年中に修學の目的にて佛國へ赴くならむ。

3. 吳に於ては日本艦隊の (für) 新しき小巡洋艦「對馬」が有栖川親王御臨席の上進水したり。其長さは 102「メートル」、幅は 13,4「メートル」なり(彼は 102「メートル」長く、13,4「メートル」廣くある)而して 4,9「メートル」の吃水を有す。其排水は 3420 噸を、其速力は 20 海哩を總計し、其機關は 9400 馬力を表示す。彼は六門の 15「センチメートル」の速射砲及び 47「ミリメートル」の大砲四門(四つの大砲)を以て武裝せられて居る。

1) vom Stapel laufen 進水する — Stapel は船を造る際に用ゐる枕木及び壱の總稱にして、laufen は走るなり

4. 羅馬の市長 Colonna 侯爵は、皇帝 Wilhelm 及び露帝が四月か或は五月に羅馬へ來るならんことを説き示したり。(其際)催すべき祭典の内に Monte Pincio 山上の Goethe の紀念碑の基石据初もあるならん、之を(基石の据初

を) 皇帝の親しく爲し給はんことを、かの市長は望み居る由(それを、かの市長の希望する處では、皇帝が親しく爲すであらう所の、基石の据初云々に反へる)。

5. 青魚の食物。無数の青魚が日々食せらるれども、然れども、何に依つて青魚は生活し又何よりの美味なる肉が出来るかの、そのことを問ふべき、ことは (es) 必ずや稀に或人に思ひ付く(何人もかゝることに思ひ付くは甚だ稀なりとの意)。故に、Siel に於ける動物學の教授、「ドクトル」Möbius がそれに就いて報告する所のことを、聞くべき、そのことは面白くあるであらう (dürfte)。此學者の觀察に従へば青魚は、巨大なる群となつて (in)「バルチック」海を滿たす所の、極小なる蝦に依つて生活する(蝦を食して生活して居るとの意)。或大なる青魚の胃、それは全く滿されてありし所の、胃に於て呑み込まれたる動物(即ち蝦)の數は確實なる計算に依れば六萬八百九十五匹を總計す、それより小なるものは胃中に一萬九千七百七十匹を有せし。三週の間は Siel の入江に於ては大凡 (gegen) 二十四萬の青魚が捕獲せられたりし。此者の各が日々此小なる蝦の一萬丈けを食するなれば、其時には一日に二百四十億が食ひ盡され而して此三週間に四千三百二十億匹が食ひ盡されしならむ。

1) winzig klein 極小なる — winzig は微細に、klein は小なるなり

6. 一月三十日に獨逸公使館に於て大なる食事が催されき。Sanjon 中將及び Sanjon 夫人、總理大臣桂伯爵并に夫人(總理大臣桂伯爵は夫人と共に)、西園寺侯爵、外務大



臣小村男爵、大藏大臣曾禰男爵、元帥大山侯爵、式部長官三宮男爵及び夫人、佛國及び西班牙の全權公使 S. S. Garmand 及び S. de la Barrera 氏及び東京横濱よりの三十二三人の獨逸の紳士并に (und) 貴婦人が出席したり。

- 1) es は文法上の主言
- 2) v. ist von の略字なり而して此言葉は貴族の性の前に附して用ゐる語なり
- 3) einige dreifsig 三十二三の — einige は二三の、dreifsig は三十なり。

7. 青森縣に於ては現今四萬五千を下らざる(四萬五千より少なからざる)人が饑餓する。困難は三の戸に於て最も大なり、其處(三の戸)にては窮困者の數は一萬三千三百二十三人を總計する所の、縣知事は備荒貯蓄金中より補助金の許可を願ひたり、それ(備荒貯蓄金)は其原因を支那の戦争賠償金に謝する所の(支那戦争賠償金の爲に出來たる備荒貯蓄金との意)。吾人は政府が、此困難を(三格)救助する爲には、總てのことを爲すならむことを、確信して居る。彼(政府)は、今彼處にて納付すべき(支拂ふべき)地租の支拂を三箇年間に割り當つること、せり(三箇年間の上に分配すべきそのことを以て始めた)。

8. 印度に於ける獅子。尙十九世紀の初めには獅子が印度に於ては著しき繁殖をなせし(持ちし)、現今は唯尙此地の一二の西北の部分に於てのみ之を見出す、殊に Kathiawar 及び Gujerat 州に於て(之を見出す)。併し亦こゝにても彼は稀になり出して居る(なるべく始むる)。Bison(水牛の一種)が西部亞米利加の廣き平野より消滅したるが如く、同様に (io) 印度に於ては獅子が獵師の彈丸及び

移住者の斧や鋤を恐れて (vor) 退却する。Kathiawar、その森林は獸類の王(即ち獅子)に尙相變らず (noch immer) 避難所を給する所の、Kathiawar に於ては、この動物の全滅を法律に依つて防がんと、試みんとす(人が試みを爲さうと思ふ)、それ(法律)は此もの(動物即ち獅子)に對する狩獵を六年間の期限にて(六年の繼續に向つて)禁制する所の(法律に依つて云々に反へる)。併し、森林の漸次 (immer weiter) 進捗する所の伐截は一切の直接の追撃なくともかの地方に於ける獅子の住所を(三格)絶やす(住所に終りを爲す)であらうことは、豫期すべきなり(ことの、それは豫期すべく立つ)。

- 1) vor etwas zurückweichen 或物を恐れて退却す — 退く、逃ぐる、恐る杯の意味を有する動詞にあつては名詞に前置詞 vor を附して其恐るべき物體を示すものとす(第六輯 66 の註 2 参照)
- 2) Es steht zu erwarten ist Es ist zu erwarten (それは豫期すべくある)と同意義なり
- 3) einer Sache ein Ende machen 或物を終らす、其物を絶やす — 或物に終を爲す

9. 近頃河内の展覽會を訪問した所の「プロフェッソル」Baelz は日本へ歸り行きたり。此著名なる學者は近き内に、彼 (Baelz 自身) を先づ朝鮮へ、滿洲及び蒙古に於て而して然る後に揚子江の谷中へ導くであらう所の、二ヶ年の修學旅行の途につかんと考へる。後に「プロフェッソル」Baelz は亦南部亞細亞をも訪問せんと考へる。

10. 獨逸の皇太子殿下は、數週間前に爲されたる Nikolaus 皇帝陛下の招待に従ひて(従ひつゝ)、今月中頃露國の宮廷に於て訪問の爲 St. Petersburg へ赴くならむ。

1) Seine kaiserliche und königlich Hoheit der Kronprinz 帝國兼王國皇太子殿下 — 獨逸の皇太子は獨逸帝國及び普魯西王國の皇太子なるが故に斯の如く kaiserlich (帝國の)と königlich (王國の)と雙方を用ゐたるものなり、又 Hoheit は hoch (高き)より轉化したる名詞にして皇族に對する敬稱なり

2) Er. Majestät (陛下)は Seiner Majestät と讀むべし、一格及び四格に於ては E. と略し、二格及び三格に於ては Er. と略記す、茲にては二格なり

11. 地圖上に於ける同一の名稱。如何に屢地圖の上に同一の名稱が反復し來るかの、それに就いては殆ど想像だも及ばざる所なり(人は殆どそれに就て理解をなさぬ)。聖僧より轉用せられてある(聖僧の名に因みたる)所の、地名が特に屢ある、其數は萬國郵便表に於て殆ど六千に達す。殊に聖僧 Antonius, Bernhard, Franciscus, Georg, Johann, Joseph, Laurentius, Martin, Nikolaus, Peter, Paul, Sebastian, Vincent 及び聖婦 Anna 及び Clara の名が到る處に反復して來る、而して人は此名稱の各の下に少なくとも二十乃至 (bis) 三十の場所を地圖の上に見出す。五つの Antwerpen, 二十六の Beaumont がある、而して歐洲の首府の名は殊に亞米利加に於ては殆ど總てが二度も三度も反復して居る。

1) der Heilige 聖僧 — 2) die Heilige 聖婦 — 此語は共に形容詞 heilig (神聖なる)を名詞として用ゐたるものなるが故に男性なる時は聖僧と譯し、女性なるときは聖婦と譯す、本文 1) の場合は男性單數の三格、2) の場合は女性の二格なり

12. 東京に於ける「ペスト」は消滅したるが如し(消滅した様に見ゆる)、兎に角(wenigstens)一週間以來最早(fein... mehr)新なる發病は起らなかつた。遺憾なことには、此惡疫傳播者たる、捕獲したる鼠の交付が著しく減ずる、持參者に與へらる、所の、鬮札は多くの者に引き續ぎて

の捕獲にまでの一つの大きな獎勵であるべきなれども(捕獲したる鼠の交付云々に反へる)。人々は、その鼠の内に「ペスト」菌が發見せらるゝことの、場合に對する自己の不愉快を恐る。閉鎖の充分嚴なる處置は東京に於ても亦好結果を奏したり(最も都合好き結果を持つた)。

1) das an sich harte Verfahren の an sich はそれ丈けにて又は他の力を藉ることなくとの意なり、茲にては充分又は思い切つて採と譯すとも可ならんか

13. 教會堂に於ける一本の栗樹。此稀なる恐らく他に類例なき(唯一に存立する所の)珍事は英國の Worcester に於ける Pemphrey の教會堂に在る。彼處には神卓の側に Edward Wylde の墳墓より一本の栗樹が生へ延びたり。Wylde は教會長の頭でありし而して千六百二十年に起りたる彼れの死の後に上記の教會堂に於て葬られし。已に十年の後にかの栗樹は極小なる枝として彼れの墳墓より發せし而して注意して保護せられし。現今二百七十年老ひたるこの樹は後方が割れて居る、而してその穴に於て十分なる武裝に於ける騎士 Wylde の像が据へられて居る。千八百四十九年に彼は最終に花を開きし(花の咲き納めでありしとの意)。千八百九十五年にこの樹は枯死したる様に見えし、併し先年(過ぎ去りたる年に於て)再び新鮮なる芽を出せし而して再び薄き綠色の飾に於て存立せし(再び薄き綠色を呈して存在せりとの意)。

1) Sir は英語にして fōrr と發音し、獨逸語の Herr と同意義なり

14. 東京に於ける新年祭に就いて吾人に通信せられたり。

日本に於て全く特別なる熱心を以て祝せらるゝ所の、新年は慶賀状及びはがきの爲に郵便局に非常に處理し難き任務を課したり。東京市のみより一月一日に百三十萬六千七百三十四通、二日に四十萬六千七百七十通而して三日に三十四萬七千三百三十六通の手紙及びはがきが地方へ (in) 送達せられ (送達すべくありし)、一日に三十三萬一千二百四十九通、二日に二十八萬三千九百三十六通而して三日に二十萬四千六百五十九通の送達が東京其ものに於て配布せられし (配布すべくありし)。

四日には、此事が毎年且つ殆ど總ての日本の町々に於て出来る如く、消防組は其演習を爲し (與へ) 而して公衆に其腕前を示せり。東京に於ては此演技は三井銀行の後なる空地 (空きたる場所) にて大なる集合したる群集の前にて催されし。人夫等は眞に危険なる技藝を其竹梯子の上にて最もよく演せし、終に臨んで一つの二階の建物が建てられし、その階下は火焰中に立ち而してそれの上の階 (即ち二階) より住民等が救助せられし所の (建物云々に反へる)。

1) in Gestalt (形に於て) 何々の方法にて、何々の爲に  
 2) schwer zu bewältigend 處理し難き — schwer は困難に、zu はべき、bewältigend は打ち勝つ所の又は處理する所のなり

# 文 典

## 課 題 3. 解 答

### 單 數

1. der Tisch	2. der Feind	3. der Arzt	4. das Haar
des Tisches	des Feindes	des Arztes	des Haares
dem Tische	dem Feinde	dem Arzte	dem Haare
den Tisch	den Feind	den Arzt	das Haar

### 複 數

die Tische	die Feinde	die Arzte	die Haare
der Tische	der Feinde	der Arzte	der Haare
den Tischen	den Feinden	den Ärzten	den Haaren
die Tische	die Feinde	die Arzte	die Haare

### 單 數

5. das Tier	6. der Finger	7. das Fenster	8. der Vogel
des Tieres	des Fingers	des Fensters	des Vogels
dem Tiere	dem Finger	dem Fenster	dem Vogel
das Tier	den Finger	das Fenster	den Vogel

### 複 數

die Tiere	die Finger	die Fenster	die Vögel
der Tiere	der Finger	der Fenster	der Vögel
den Tieren	den Fingern	den Fenstern	den Vögeln
die Tiere	die Finger	die Fenster	die Vögel

		單	數		
9. der Wagen	10. der Garten	11. das Bild	12. der Mann		
des Wagens	des Gartens	des Bildes	des Mannes		
dem Wagen	dem Garten	dem Bilde	dem Manne		
den Wagen	den Garten	das Bild	den Mann		
		複	數		
die Wagen	die Gärten	die Bilder	die Männer		
der Wagen	der Gärten	der Bilder	der Männer		
den Wagen	den Gärten	den Bildern	den Männern		
die Wagen	die Gärten	die Bilder	die Männer		
		單	數		
13. der Wald	14. das Glas	15. das Wort			
des Waldes	des Glases	des Wortes			
dem Walde	dem Glase	dem Worte			
den Wald	das Glas	das Wort			
		複	數		
die Wälder	die Gläser	die Wörter			
der Wälder	der Gläser	der Wörter			
den Wäldern	den Gläsern	den Wörtern			
die Wälder	die Gläser	die Wörter			

### 獨逸語學講義規則

本社は通信教授の方法によりて獨逸語學の普及發達を謀り學校に入り親しく講義を聽問すること能はざるもの、爲に講義録を發行す  
 本社講義録の講義録を獨逸語學講義と稱し毎月一回十五日發行す  
 講義録の講義録を二ヶ年とし其學年は五月に始まり翌年四月に終るものとす  
 講義録に於て二年の講義録を終り其修業證書を望まるときは試験の上之を送與すべし  
 但し試験は通信試験に依る其期日及手續は學年末の講義録に廣告す  
 入會金は金貳拾錢とす  
 入會金は金貳拾錢とし毎月十日迄に前納せらるべし  
 講義費は一ヶ月金參拾錢とす  
 但し一時に半ヶ年以上を前納せるときは左の割合による(郵券代用は一割増)  
 一ヶ月年分 一金壹圓七拾錢  
 一壹ヶ年分 一金參圓參拾錢

講義費を拂込まるときは引續き講義録を配付するを以て別に受領證を送付せず、特に領收證を望まるときは返信料を送らるべし  
 但し講義費盡きたるときは封紙に朱印丸形を押し通知すべし  
 講義者の都合により中途廢學せらるるときは既收の講義費の殘餘ある場合には之に對する講義録を配付し現金の返戻を爲さず  
 講義録中に疑問あるときは通信を以て質問することを得  
 但し質問書は字體明瞭に記し講義録の號數並に頁數を必ず示し返信料を添付せらるべし  
 質問の趣旨不明瞭なるときは講義録の意義を講義録に掲載し各自の參考に供すべし  
 質問の有益なりと認むるものは其答案を講義録に掲載し直ちに通知せらるべし  
 講義者の住所姓名等を變更したるときは新舊住所氏名を併記し直ちに通知せらるべし

**申込所** 東京市牛込區中町三十五番地 **獨逸語學雜誌社**

谷口秀太郎  
辻高衡  
立案監修

# 獨逸語學講義

第拾壹輯

## 附錄

教師  
(Lehrer)

獨逸語學雜誌社發行

寄贈

### 獨逸語學講義 第拾輯

#### 注意

廣告料 一行五號活字二十四字詰(前金拾錢、半頁前金參圓、一頁前金五圓とす、一回以上連載は二割を減す)  
領收證 代金領收證は別に送呈せず、講義の到達を以て其證とす、但し領收證入用の方は別に郵券若しくは端書を送らるべし  
郵券代用 一割増とす但し郵券は三錢以下に限る  
照會 本社への御照會は返信用として必ず郵券若しくは端書を送らるべし  
爲替 郵便小爲替には受取人欄内に牛込區中町三十五番地獨逸語學雜誌社と必ず記入せらるべし  
前金 本誌は前金にあらざれば一切發送せず、前金盡きたる節は帶封に朱〇を押しして之を通知す  
發行日 一册金參拾五錢(見本) 毎月一回十五日

●本講義規則入用の方は郵券貳錢送附あれ

刻 許 不

發行所 獨逸語學雜誌社  
東京市牛込區中町三十五番地  
印刷所 東京築地活版製造所  
東京市京橋區築地二丁目十七番地  
印刷者 野村宗十郎  
東京市京橋區築地三丁目十五番地  
編輯者 兼者 東儀季治  
東京市牛込區中町三十五番地

明治三十六年三月二十五日發行  
明治三十六年三月二十日印刷

明治三十五年五月二十七日第三種郵便物認可

明治三十五年五月二十八日內務省許可

## 凡 例

1. 本誌は之を教科及び教師の二編に頒ちたれば讀者は番號を逐うて雙方を對照すべし。
2. 外國語の修學は其初期に於て正確ならんことを要す。若し之を誤るときは、後に至り、進歩を見ること難し。故に前章を充分に知得せずして後章に移るが如きことあるべからず。
3. 本誌の教科は最も簡明に記述したれば、讀者は成るべく自己の力を以て之を攻究し、而して後教師の編を開き、誤なきか否かを質すべし。
4. 獨逸語は之を變則的に修學する者にも、一通り文法上の知識を養はざるべからず、而して文法の要は應用にあり、故に本誌に載せたる和文獨譯練習問題の如きは決して之を忽にすべからず。
5. 和文獨譯練習問題は重に文法上一部の應用に留まり其數も随つて多からざれば、讀者中餘力ある者は教師の編中にある譯文を獨譯し、之を教科と對照して誤の有無を質すべし。

獨逸語の發音を正確に授けんか爲に作りたる新文字左の如し。

1. 「**オ**」は *ö* の音を表さんが爲に「**オ**」と「**エ**」とを合して作りたるものにして「**オ**」を發する口附を以て「**エ**」と發音すべし。
2. 「**ウ**」は *ii* の音を表さんが爲に「**ウ**」と「**イ**」とを合して作りたるものにして「**ウ**」を發する口附を以て「**イ**」と發音すべし。
3. 「**チ**」及び「**ツ**」は *ti, tu* の音を表さんが爲に作りたるものにして「**ト**」の口の構へを以て「**チ**」及び「**ツ**」と發音すべし。
4. 「**ヂ**」及び「**ヅ**」は *di, du* の音を表さんが爲に作りたるものにして「**チ**」「**ツ**」を濁りて發音すべし。
5. 「**ホ**」は *hu* 又は或る場合に於ける *ch* の音を表さんが爲に「**フ**」と「**ホ**」とを合して作りたるものにして「**ホ**」の口附を以て「**フ**」と發音すべし。
6. 「**ラリルレロ**」は舌端を上顎に着けて而して後「**ラリルレロ**」と發音すべし。

## 252. 指 導

- 1) durchnäht 濡り貫きて、下まで濡れて、すつかり濡れて — durch は通してなり、näht 濡れて、濡りてなり
- 2) einem entgegenreten 或人に向ひて進み行くなり、或人を出迎へるなり
- 3) im stande fein は können と同意にして「能ふ」なり
- 4) einen Eimer nach dem andern 桶を一つづ、— 一つの桶を取りたる後又一つを取るとの意

或農夫は或日暴風雨の際に (im Sturm und Regen) 野にて働き而して夕方に疲れ且つ皮膚に至るまで (bis auf) すつかり濡れて歸宅せり (家に來りし)。入口の處にて、終日 (den ganzen Tag) 家に居りたりし所の、彼れの親愛なる妻は彼を (三格) 出迎へし。親愛なる夫よ、と彼女が云ひし、私が水を取り來り能はざりし程、左様に強く絶へず雨が降つた、夫れ故に (jo dem) 私は亦、汝の爲めに「ソップ」を煮ることが出來なんだ (煮るべく能はざりし)。お前さんは一度濡れて居る (濡れ序手にとの意)、どうか (doch) 水を一荷 (一對の桶の水を) 取り來れ; 汝は最早此上 (mehr) 濡れ能はぬと (其上濡れようはないからの意)。此理由に對しては故障の云ひ様がない (何にもが反論せしめぬ — 即ち尤も至極の申分なりとの意)、夫はそれ故に桶を取り而して水を可なり遠く距りたる井戸より取り來りし。— 彼が再び彼れの家へ來りし時に、彼れの妻は愉快げに火の側に坐わりし; 彼はそれ故に桶を一つづ、取つて而して其水を彼れの妻の上へぶつ被せし (水を以て彼れの妻を注ぎかけし)、然る後に彼は云ひし: 今や汝は私と同様に (私の如く左様に) 濡れて居る而して水を自ら取り來ることが出來る; 此上 (mehr) 汝は併し濡れ能はぬと (最早其上濡れようはないとの意)。

### 253. 一實話(眞の出來事)

- 1) die Episode 中話、附添話、一談話中に挿入したる一節の小話を云ふ、純粹の獨逸語で Zwischenrede (中間話) Zwischenjabel (中間小話) 杯と云ふに同じ
- 2) im Begriff sein 將に何々せんとす
- 3) der Fahrstuhl 昇降機(エレベートル) — fahren は通過する、車、舟及其他の運搬機に乗て行くなり Stuhl は椅子、臺なり
- 4) der Aufzug は茲にては Fahrstuhl (昇降機)と同意なり

「夢は泡沫なり」と云ふ諺がある(……と、諺が云ふ)、併し(aber dennoch)人は、夢は來るべき出來事の前兆でありし所の、例を有す。昨年(前の年に於て)Chicagoへの旅行中(auf einer Reise)私は一貴女に(四格)出遇ひし、それは私に彼女の實歴中より次の如き、殆ど信すべからざる小話を物語りし所の(一貴女云々に反へる)。

彼女が言ひし、私は葬式の行列が過ぎ去りし所の、其の瞬間に於て私の住家より進み行きしことを、嘗て夢視し(私に嘗て夢視し)。柩車の馭者臺より一人の男が飛び下りし而して私を目指して來りし。彼は一つの赤き創痕を顔に有せし而して彼れの頭巾の前の方には(前に彼れの頭巾の上に)九と云ふ番號がありし。貴方は一緒に御出でますかと、彼が問ひし。いえと、私は答へし、而してこれにて(hiermit)目醒めし。——凡そ六日の後に私はChicagoの最大なる商館の一つに於て二三の用達を爲せし。私は丁度一番上の階に居りし而して下へ行く爲に、將に昇降機の内へ入らんとせし、其時(als)私に尙或事が思ひ付きし(まだ何か用事が有つた様だがと思ふたとの意)。私は、其他に尙何か忘れたかを、檢する爲に私の手

帳を開きし。指揮者(昇降機を掌る人)が暫時私を(auf mich)待ち而して然る後に：貴方は一緒にお出でなさいますかと、問ひし。いえ、と私は言ひ而して其の戸が閉ざれし。一秒の後にこの建物は恐ろしき響がして(驚るべき響の下に)震動せし。昇降機の繩が切れたりし而して總ての其内に居りし者は驚るべき死に向つて急ぎし(恐るべき死を遂げたとの意)。その昇降機の番人(即ち指揮者を云ふ)は一つの赤き創痕を顔に有し而して彼れの帽子は九と云ふ番號を付けて居つた(番號を以て記號を付けられてありし)。

### 254. 巧なる忠告

- 1) an etwas (daran) nahe sein 何々せんとす、何々は迫て居る — 或物に於て(其れに於て)近くある

倫敦の St. Paulskirche (寺院の名)の圓屋根の塔に於て仕事せし所の、畫工は或日、已れの作を少しく隔りて(二三の距離の上に)眺むる爲に、彼れの足場(支架)の上にて二三步退きし、而して其際殆ど、墜落せんとせし(墜落すべき、其事に近づいてありし)。彼れの近くにて仕事せし所の、左官はこの危険を認めし、それ(危険)に於てかの技術家(即ち畫工)が搖ひし所の(危険を云々に反へる)。彼(畫工)に(四格)呼びかくることに依つて忠告することの代りに、彼(左官)は急いで染料を以て滿されたる毛筆を掴み而してそれを以て最もよき肖像の一を目指して(auf)飛びかかりし、宛も彼は彼(肖像)に一つの線を顔を通して真中に引かんと(爲さうと)思ひしかの如く。畫工は、彼(左官)

が(四格)己れの作を(二格)破毀することに對して妨ぐる爲に、彼れの後より狂氣の如くに駈け來りし、而して此方法にて、彼(畫工)に迫りし所の、かの危険より(三格)免れし。

### 255. 便利な方法

1) einen beschäftigt finden (或人を働いて見出す)は或人が働いて居るのを見出すとの義なり、見る、見出す、聞く杯の意味を有する動詞には此種の語法を用ゐること屢々なり、例へば ich sehe ihn beschäftigt (私は彼を働いてあるのを見る)、ich höre ihn schreiben (私は彼を叫びつゝあるのを聞く) ich finde ihn tot (私は彼を死んであるのを見出す)等

取引を此者(客齋家)と結了せんが爲に、或る富みたる客齋家の處へ來りし所の一外來人が、蠅を捕へんが爲に、彼(客齋家)が(四格)最も熱心に働いてあるのを見出せし一を捕へる、ことが遂に彼(客齋家)に達せし、併しながら彼はそれを殺さざりし、却て注意して砂糖壺の内へ閉ぢ込めし、其れ(砂糖壺)の蓋を彼が然る後にそつと(注意して)塞ぎし所の(砂糖壺云々に反る)。——外來人は質問せし、彼(客齋家)はそんなことをして(それを以て)何を目的としようと思ふかと(何の目的でそんなことをするかとの意)。客齋家が得意然たる笑を以て答へし、それを私は貴君に御話致しましょう。私は、私の召使の者共が砂糖を盗むかを、試して見ようと思ふのです(私は召使どもが盗むかの其ことに就いて好んで自分を慥めようと思ふ)。

### 256.

1) als ところで、然るときに(第拾輯 228 節の註 1 参照)

或醫師は伯林に於て暫く前に一つの住家を探せし而して四百 Schaler の賃賃にて一つの適當なる宿所を見出せし。主人(貸家の)は醫師に(四格)、彼(醫師)が小供を持つて居るかを、問ひし、而して最後の者(醫師)が此事を否と答へし時に、かの主人は、彼にそう云ふ次第なれば(此情態の下に)かの住所を貸さうと思ふことを、説き示せし。そこでそれが署名せられねばならぬ(署名にまで來るべき)時に、(定約書に署名するときに臨むでの意)、かの醫師は主人に(四格)、彼(主人)が子供を持つて居るかを、問ひし、それに對して此者(主人)は、何心なく(何にも豫想せず)、はい、彼(主人)は四人の子供を持つて居ると、答へし。此答が與へられてあるや否や、其時に醫師は、契約書の署名をする爲に既に手に持ちたりし所の、筆を投げ而して主人に署名せられざる契約書を次の如く言ひながら(この言葉を以て)返せし：私はその(家の)主人が子供を持つ所の、家へは引き越さぬと。かく言ひながら(それを以て)彼(醫師)は、己れの借人より、小供なしであることを、望みし所の、かの驚かされたる主人を置き去りにせし(主人を立たしめし)。

### 257. 煙草入

1) Pompadour (發音 pompadur) は佛國 Ludwig 十五世の愛妾にして一時政權を左右する程の勢力を有したる婦人なり 1721 年巴里に生れ 1764 年に死す

煙草入及び高價なる函は、Ludwig 十四世の時代以來、凡そ一世紀半の間(通して)高貴なる且つ富みたる人々の



間にて流行的の進物となりし(進物を形作りし)。人は彼等(煙草入及び高價なる函)を友誼の紀念物として、尊敬、感謝、賞嘆、愛の印として送りし、彼等は高價なる報酬として授與せられし、而して彼等は賄賂の安全なる手段として用立ちし。高價なる煙草入の模範たる國(本場との意)は佛蘭西でありし。彼等は銀、金及び象牙より細工せられ、精巧に彫刻せられ、寶石を以て飾られ又は技術家の手になれる繪畫を以て飾られし。已に Pompadour の時代には巴里に有名なる煙草入の標本集がありし、而して斯の如き標本集の賣却は凡そ百年以來 Drouot「ホテル」に於て行はれて居る(立ちつゝある)。かの古き高價なる標本は次第に稀に (immer feltener) 現はる、(世に出づることは追々稀になるとの意)而して一層高價 (immer höher) に支拂はるゝ。

### 258. 最小の軍勢

- 1) der regierende Graf 政局に當つて居る伯爵 — 伯爵には我國の往時の大名の如く一地方を領し政權を行ひつゝあるものと其爵のみを有するものとあり此區別を爲さんが爲めに前者には特に形容詞 regierend (支配しつゝある)を附するものなり
- 2) das Heereskontingent 及び Truppenkontingent は茲にては帝國軍隊を組織せんが爲に各國より其面積の大小及び人民の多寡に依り出すべき兵員の負擔及び其兵員を云ふ Kontingent は負擔、分擔額、又は出兵の負擔員數の義なり故に翻譯には非ざれども假に之を分擔兵員と譯せり
- 3) die Lehnverbindlichkeit 籍臣と國君との關係、籍臣の國君に對する義務
- 4) die Reichsteuer 帝國稅 — 獨逸帝國へ其各國より納むる租稅
- 5) sich bereit erklären 承諾する — bereit は用意して、合點して sich erklären は自分を説き示す、自分を説明する
- 6) welche Stärke どれ程、何程 — Stärke は元來は強さの意なれども此の如き場合には大さ、多さ杯の義なり

7) einem etwas zur Verfügung stellen は或物を或人の處分又は權内に委ねる — Verfügung は處分、命令、管理等の義なり

皇帝 Karl 五世が以太利に於て戦ひし時に、彼は政局に當つて居る Oldenburg の伯爵 Johann 十六世にも(四格)亦、彼れ(伯爵)の分擔兵員を出すべきことを、請求せしめし。Johann は然しながら皇帝及び帝國に對する籍臣の義務を駁撃し而して軍隊も帝國稅をも送らざりし。そこで Karl はこの小なる北方の君主に向つて千五百二十三年に國外放逐を命せし。皇帝の怒の抑壓の下に一箇年の後に (ein Jahr später) かの放逐せられたる者は、彼れの軍隊の分擔を出すことを承諾せし而して彼れの國及び其收入の大きさに従つて、如何程を Oldenburg の軍隊の分擔が持たねばならぬか、が計算せられし。雙方の一致に従つて皇帝の(三格)指揮に委ねられし所の、立派なる群は丁度(綿密に) — 騎兵八人(騎馬にて八人)と歩兵十二人(徒歩にて十二人)とを計算せし。そこで (hierauf) 千五百二十五年一月十八日に國外放逐の赦免が出来し。

### 259. 復讐

- 1) im Begriff sich zu setzen 坐らんとして — im Begriff は何々せんとしての意なり
- 2) im Begriff sein 何々せんとする
- 3) erster Klasse (女性二格) 第一等にて — 名詞を副詞狀に用ふるときは之を二格にす

巴里より Versailles への列車は五分間の内に出發せねばならざりし。一紳士は、火の付きたる葉卷煙草を口に銜へながら(口に於て)、急いで一等の車室へ乗り込みし。

坐わらんとして、彼は一人の老いたる貴女に向合ふて居ることに氣が付きし(貴女に向合ふて自分を見る)而して、善き教育ある(von)男として、その葉巻煙葉を丁度窓より投げ棄てんと思ふ、丁度其時に(als)彼はその貴女より厳しく談じつけらるゝ：車室、其内に貴婦人が居る所の、車室に於て喫煙するとは、許されて居らぬことを、貴方は一體御存じはないのですかと。是はしたり、貴方の御覽の通り(貴方が見る)私が丁度、貴方の御希望に先せんと、して居つた處であります、併し私は最早(nicht weiter)貴方に御迷惑を掛けますまい(貴方を惱まさせぬ)、とかの紳士が答へし——而して黙禮しながら(黙したる屈身を以て)彼れの對席の人から去る(對席の人を見捨てる)。不平に思ひながら彼は三等の車中に席を占め而して Savana を薫す。然る時彼れの側へ一人の藍襖を着たる、玉葱の様な(nach)臭氣のする奴が坐る。おい君、(私の友よ)、お前は既にいつか一等に乗つたことがあるか(壹等にて車行したか)と、彼(紳士)は此者の方に振り向く。一度も(乗つたことはありませんと意)。それでは來い、私は茲に一枚の餘計な切符を持つて居る、それを私は無効とならしめたくない所の、お前はそれを使用してもよい(famül)と。而して彼(紳士)は彼をたつた今(eben)去りたる車室の處へ導き、彼れにかの(己れか先刻坐したる)席を指し示し而して戸を閉づる。直様(すぐ次の瞬間に於て)列車は出發せし。Verfailles まで一の停車場へも停車せられざりし(それであるから貴婦人は下車することも出來ず閉口したであらうとの意)。

## 260. 勤勉なる人は富む

- 1) zuwege (又は zu Wege) bringen 實行する、ならしむ、出來さす
- 2) denn は als と同意義にして「より」なり
- 3) einen einer Sache beschuldigen 或人に(本來は四格)或事の罪を負はす——beschuldigen は人の四格と事物の二格とを支配する動詞なるが故に本文の der Zauberer は女性の二格なり

羅馬人 Gaius Cestius は其勞役に依つて自分の惡き田野を隣人の良き田野よりは多く實る様にならしめし。人が彼を今其れが爲めに(惡き田野を能く實る様にしたと云ふ理由で)羅馬の議院に(vor)訴へ而して魔術の罪を負はせし時に、彼は甚だ強き彼れの娘と共に來り而して彼れの牡牛を農具と一所に伴ひ(自分と共に持來り)而して言ひし：汝等高贵なる羅馬人よ、人は私に(四格)魔術の罪を負はす；御覽下さい、これは私の魔術品であります！と云ひながら(dabei)彼は彼れの農具を示せし。若し私は汝等に私の勉強なる勞役を御目に掛けることも亦出來るならば！(御目に掛けたならば充分我が無罪を證することが出來るが御目に掛けることの出來ないのは遺憾であるとの意)彼は免訴せられ且つ讃詞を以て放還せられし。

## 261.

- 1) einen hören 或人を聽くは或人の言ふことを聽くことなり故に einen berühmten Prediger hören は有名なる説法師の説を聽くと譯すべし

Jacob 第一世は、最も小なる原因にても烈しく惡口及び罵詈するると云ふ、惡しき習慣を有せし。或日曜に車行せ

し際、街道の近傍に於ける有名なる説教師を(説教師の説法との意)聞かんと、突然彼に思ひ付きし、そのもの(街道)より轉回せしめし而して、其説教師が已に演壇の上に立ち而して今將に彼れの演題を發表したる所の、寺院へ不意に進み入りし。彼(説教師)が併し王を目撃せし時に、彼は己れの説教に直に一つの他の方向を與へ、而して罵詈及惡口の惡習慣に對する鋭き攻撃演説を爲せし。そこで王は神祭の終りたる後に(終りたる神祭の後に)彼れの處へ行き、彼れに彼れ(王)の最も大なる満足を表し、同時に然しながら亦、是程大なる一説法師なる、彼れがかく全く其演題より遠かつたことの、彼れの驚嘆をも(表せし)。 (道が有名なる説法師丈あつて其演説を俄に他に轉じ全く問題外のことを説くを得たるは敬服の至りなりと賞詞を呈したりとの意)。何となれば陛下が陛下の道より遠かつた故に(陛下の踏み行ふ道を脱したるが故にとの意)、私は今日、私のもの(道)よりも亦遠かるべきことを、私の義務だと思ひましたと、磊落なる男が答へし。而して Jacob は彼に(四格)それに對し賞與せし。

### 262.

1) gut dafür stehen 屹度保證する — gut 屹度、確と杯の意 dafür stehen は保證する、引受くるなり

或學生は或旅館に於て己れの種々なる學識に就いて多く話したりし、遂に或客に堪忍が破れ、而して彼は可也鋭く(次の如く)言ひし程 (so daß): 今や然しながら我々は、貴君が能ふ所の、其ものに就いては眞に充分聞きま

した; 貴君は私に、貴君は能はぬ所のものをも、亦一度言ひなさい、而して私は貴君に屹度保證するが、私は其事(貴君の出來ないこと)をしてお目に掛ける。私ですかと學生が言ひし、さて、私は私の勘定を拂ふことが出來ない、而して、貴君がそれをして下されば誠に私は喜ばしいことです(……能ふことの、それが私を甚だ喜ばす)と、一同の大笑の下にかの客は彼れの(學生)の期望に應じた。

### 263. 原色

1) sich herstellen lassen 出来る、成立つ — herstellen は造る、拵へる

原色は Young-Helmholtz の理論に従へば人間の眼に對し只三あるのみ: 即ち赤、綠、紫是なり; 此の三のもの、結合と交換作用とにより總ての其他の色が出来る(自分を造らしむる)。即ち例之は赤と綠よりは甲のもの強ければ橙黄色; 綠強ければ(より強き綠のときは)——黄色。綠と紫よりは綠強ければ青が成立ち; 紫強ければ(優れたる紫のときは)青黛が(成立つ)。綠は人の知る如く青と黄とより成立つ。

### 264. 音樂的の鼠

1) bewohnen (住む)は日本語にては自動詞なれども獨逸語では他動詞なるが故に四格の名詞と結合す、例へば ein Haus bewohnen (或家を住む)然れども be の前綴を省き wohnen とするときは日本語と同一の用法にして in einem Haus wohnen (或る家に於て住む)として用ゐる

2) die Dachkammer 屋根下の部屋 — 屋根の直ぐ下にある最上階の部屋にして旅館杯に於ては最下等の部屋なり又普通の家にあつては通常物置場杯に使用せらる

- 3) der Boden に於ては Dachboden にして上記の Dachkammer に同じ
- 4) sich sehen lassen 現はるゝ——自分を見せしむる

Bremen に於ける一紳士 S. G. Walte は數年の夏季の間(多くの夏を通して)或大なる屋根下の部屋に(四格)住まひし。殊に收穫時に於て彼は多くの鼠より惱まされし、それ(鼠等)は穀物と共に屋根下の部屋へ持ち來されたりし而して夏時の客 (S. G. Walte をいふ) を其休息に於て妨げし所の。若し Walte 氏が晩に Marquette と云ふ笛を吹きし時に、其時には一匹の鼠も現はれざりし。然しながら彼が提琴を取り出し而して此奏樂の術に於ての初學者としてこの樂器より(三格)最も清朗なる音ならずとも引き出だせしや否や、其時には鼠等が總ての隅々より現はれ出で而して嬉ばしく部屋の内を追ひ駆け廻はる、時としては「ピーピー」と鳴きつゝ(駆け廻はる)。舞踏者等(即ち鼠等を云ふ)は、Marquette が再び順番に來りしや否や、(Marquette を吹く順番が來るとの意)消失せし、之に依つて之を見れば(alfo)それ(此實驗)より、少なくとも特に此場合丈は (Walte 氏の實驗した場合丈は)、鼠等は絃樂器の響を管樂器の音調よりも(三格)愛すると云ふことが、決定せられることが出来る。我等の保證人は (Walte 氏)其の鼠等の(四格)歌ふのを聞いた。Schwachhausen に於ける珈琲店の主人 Rasch は歌ふ所の鼠を有して居つた。其の音調は Violoncello のそれに(音調に)比較せらるゝ。

### 265. 猫の勇氣

- 1) die Oberhand behalten 勝を制す

- 2) einen übel zurichten 或人をさんざんな目に逢はす、無慘な目に逢はす——übel は悪く zurichten は調へる、料理するなり

或猫が嘗て蘇格蘭土の村に於て其子と共に春の太陽に於て(春日の日向に於てとの意)一の家畜小屋の戸の前にて遊びし。一羽の大なる鷹が空中より射下り而して小猫の一つを掴みし。母(即ち親猫)は怒つて彼れの上に飛びかゝり而して己れの子の爲に防禦せし。鷹はそれ(小猫)を放棄せし、併し親猫に對して向ひし。双方よりの戦は非常に烈しくありし。鷹は彼れの勢強き羽ばたき、彼れの尖りたる嘴及び彼れの鋭き爪に依つて暫くの間勝を制し、痛ましくかの憐なる猫をつゝき碎き而して彼(猫)に一眼をつゝき出せし。彼(猫)は然しながら勇氣を失はざりし、己れの敵を其爪を以てしかと掴み而して彼に右の翼を咬み切りし。今や彼(猫)は固より彼(鷹)の上により多くの勢力を持ちし(猫の勢の方はよく成て來たとの意); 然しながら鷹も尙依然として (noch immer) 甚だ強くありし、而して争は持續せし。猫は殆ど疲れ切つてありし; 然しながら速に身を轉じて(速なる回轉に依つて)彼(猫)は再び飛び起き而して鷹を抑へ付けし(己の下に持ち來りし)。勝を制して彼(猫)はかの猛き暴惡者に其の頭を咬み切りし; 然る後に彼(猫)は其眼を(二格)失ふこと及び其傷を注意することなく、其無慘なる目に逢はされたる小猫の處へ走り行き、彼(小猫)に血液の(血液から)滴る所の傷を舐め拭ひし、それ(傷)を鷹の爪が柔なる小動物

(小猫)の脇腹(側面)に於て切り込みたりし所の、而して、彼(親猫)は、宛も何事も起らなかつたかの如く、それ(小猫)を愛撫しつゝ、ぐうぐう云ひし。

### 266. 最大なる考

1) einem in den Sinn kommen (或人に心に於て来る)心に浮ぶ、思ひ附く

大政治家にして且つ深遠なる哲學家なる Daniel Webster は曾て「ニューヨーク」へ來りし、而して最も才能ある人人の一團が、彼より成るべく政治及び處世の方法に關する彼れの説の多くを聞かんが爲に、直ちに彼を取り巻きし。來會者の一人は斯の如き (die) 質問を起せし: Webster 君、貴君の心を曾て満たした所の最も大なる考は蓋し何物であるかと。彼れは斯の如き (die) 答を得し: 曾て私に心中に浮びし所の最も大なる考、其れは神に對する私の個人的責任の考であります、此もの(此考)は數百斤の重さがあります(百斤も重く重量す)。

### 267. 眞味ある返答

英國の國王 Jakob 第一世が一公使に與へたる、謁見の後に、王はかの有名なる首相 Baco に言ひし: かの公使は大きな立派な男である、そうではないか。併し貴方は彼れの頭に就いて何を考へるか(彼の頭腦はどうであると思ふかとの意)——首相が答へて言ふには、陛下、かの公使の如きあんな立派な大きな人々は通常四階乃至五階の家

に等しきものです; 最初の三階は澤山借手があります(能く借りられてある)が併し上階は空でありますと(最上のものが空で立つ)。

### 268. 蟻世界よりの新しき奇なる性質

1) der は Tafel の冠詞  
2) aus lauter kleinen Blättchen 只小なる葉の片のみより——lauter は只、のみなり、Blatt は木の葉、Teil は部分、片なり

恐らく動物界に於て何處にも注意深き觀察者が蟻に於けるが如く其れ丈け多くの奇異なることに遇はぬ。無数の性質が既に此小なる昆虫に就いて物語られた、而していつもいつも(常に再び)人は新しきことを見聞す。千四百九十六年 Columbus より發見せられたる、西印度の Tobago 島の方へ近頃旅行が導き行きし所の(旅行したるとの意)、或 New York の通信員は、彼處(Tobago 島)にて全く奇異なる觀察にまでの機會を得し(持ちし)。或森中の道の上にて彼は或日、如何に道を横切りて(横に道を越えて)、通常の運轉紐の幅の、或縁なる紐が除々に、併し規則正しく動くことを (wie) 認めし。能く觀察すれば(より精しき熟視に於て)、此の紐は只小さき木の葉の片のみより成立ししことがわかりし、それ(木の葉)の各はかの大きな赤蟻の一つに多少日傘として用立ちし所の。木の葉の片はヤット半 Zoll の直径を有せし。長き間この奇異なる行列が續きし、それ(行列)は、かの觀察者が最早従ひ行き能はざりし程、繁茂したる森の茂みの中に消失せ

し所の。此の島の住民等の物語る所によれば (wie), 此蟻等はかの木の葉を彼等の巢の裡綿を付けることにまで使用する。此動物等(即ち此蟻等)が麻布の片を捉へる時には、其時には彼等(蟻等)は此物(麻布の片)を半圓形の薄片に噛み切り而して其物を木の葉と同一の方法にて運び去る。

### 269. 學校よりの話

先生は丁度今學校に於て天然の美に就いて話をした而して今一人の童兒に(四格)問ひし: さて私に云へ、Karlよ、誰が總ての此吾等の美なる山を造つたか!—かの童兒は直に答へざりし、併し彼れの隣席者が速に呼びし: 先生、それを此 Karlは知る筈はありません(知り能はぬ)、何となれば此者はやつと前週吾等の村へ來た計りですから。

### 270. 僞物(賈の女)

- 1) die Unrechte 僞物、賈の女—形容詞 unrecht (不正)を名詞に用ひ女性としたるものなり
- 2) der Postwagen 郵便馬車—獨逸の郵便制度は我國と異なり旅客をも取扱ふものなるが故に Postwagen とは旅客用の郵便馬車と解すべし
- 3) daß — —は話を途中より切りたるものにして我國にて近來用ゐる「……」に同じ
- 4) einem platzmachen 或人に席を譲る、席を造る

郵便馬車が或小都市の旅館の入口の前に出發にまで用意して立ちし。一人の若き、非常に美しき少女が車の戸の處に進み而して、尙一人に對して場所があるかを、問ひし。

びつしりです(總てが占領せられて居る)!と、郵便馬車の馭者が言ひし。

何とすばらしい代物だな(如何に嬋娟たる活物ぞ)と、乗客の一人が私語せし。

すてきだな(驚くべし)!と或他の者が言ひし。

恐くは併しまだ、場所が作られ得ること、が出来そうなものですな(出来得べくある)と、かの美人は媚を呈するばつちりした眼つきで(媚を呈する眼の開くことを以て)願ひし。

全くだめです(全く不可能に)と、馭者が確言せし、……車中の旦那方が許されるなら兎も角も(許すを、取り除きて)……

おー、我々は茲に尙澤山の場所を有して居ますよと、馬車の内部より響きし(此は文法上の主言)。

我等はびつしり寄り合ひさへすれば(寄り合ふ、然るときは)樂に (ichon) 行きましやうと(入ることが出来るとの意)、最初に話したりし所の、紳士が言ひし。

誠に有難う!と少女が呼びし、茲に乗車券がありますと。

郵便馬車の馭者は馬車の戸を開き而して促せし: さあ併し早くお這入り、もう時間が切迫しました(それが高き時である)と。

おばあさん、早く入らつしやい(祖母よ、速に來れ)!と今かの少女は或老いたる肥滿したる婦人に呼びかけし、それは丁度家の入口の所に現はれし(視るべくなりし)所の。此紳士達は貴方の爲に場所を作つて下さいましたと。斯く言ひて(此言葉を以て)彼女は老いたる婦人を(三格)車の中へ助け入れし。

これは誤解だ、我等は死ぬる程(死にまで)押し潰さるると、中に坐わりたる者等が呼びし。

然しながら既に鞭が鳴り響き而して郵便馬車は舗石の上を回轉して行きき。

### 271. 支那問題

1) würdest は可能法に用ひたるものにして希望の意味を有す故に würdest erklären は説明して下さいと譯すべし

2) mein Lieb 吾が愛者——形容詞 lieb を其儘名詞として用ひたるなり

3) möchte も可能法の形なれば、何々したがる、何々せんことを希望すと譯すべし

Señ 夫人: Benno (夫の名)よ、お願ですから(私が希望する)、貴方が (Du) 私にちよつと支那問題を説明して下さいな。

Señ 君: よし(好んで)、私の愛者よ!見られよ:露西亞人は支那に於て門戸を開かうと欲せずして(一つの開きたる入口を持たうと思はぬ)、却つてかの國の一部分を全く己れの物となさうと思つて居る(己れの爲に得んと思ふ)。日本人は然しながら門戸を開くとを(開きたる入口を)欲し而して其れによつて、露國が支那に於て根底を固めるとを妨げやうと思ふ。お前に此事は解かつたか(明瞭であるか)。さて、獨逸國は、門戸を閉づることを、日本が露國に妨ぐることを、好んで妨げたがる、然しながら、露國が彼處に根底を固むること、をも亦好んで妨げたがる。亞米利加は之に反して、獨逸國が間接に露國人に助力して居ることに、抗議する、如何となれば支那自身は——人の想像では(人が左様に信ずる)——門戸を好んで開いて置きたがるから、お前は理解しましたか。

Señ 夫人: 充分に(解りましたとの意)! 今や天候が暖くなるから、支那人等が好んで門戸を開けようと思ふことは、又譯の分つて居ること、思ひます(其事も亦解すべく見出す)。只私は、何故に斯の如きつまらない事柄に就いて斯く甚だしく騒ぎが爲さる、かを、理解させぬ。

### 272. 清潔

1) die Katzenwäsche 猫洗——die Katze は猫 die Wäsche は洗ふことなり、故に我國にて猫の手洗をつかうこと、猫の顔を洗ふこと杯と云ふに等し然し茲にては文の意味の上より猫洗と直譯を下し置く方可らん

2) sich über Gesicht und Ohren (之を直譯せば「自分に顔及び耳の上」なれども斯の如き場合には「自分の顔及び耳の上」の義なり

3) die Labe 手、掌(熊、獅、犬、猫杯の前脚の掌骨以下を云ふ)

4) sich von etwas befreien 或物より免かる、sich befreien は自分を自由になすなり

5) der Saugnapf 吻——saugen は吸ふ Nussel は吻なり

猫の清潔なることは善く知れたる事實である、而して「猫洗」と云ふ言葉は誤解の憂なき(誤解すべきとなき)意味に於ける慣用語(語の使用)に於て採用せられた(猫洗と云へば最早誤解の憂なき語となりたりとの意)。獅子及び虎の如き、大なる猫は尙又飼猫と全く似寄りたる方法にて化粧を爲す、(即ち)彼等はその黒き護謨の如き趾裏を唾液を以て潤ほし而して手を以て顔及び耳を越へて撫でつゝ、夫れ故に (somit) 足は彼等に同時に海綿及び刷毛の代用となり(舗ふ)、而して鋭き、粗き舌は身體の其他の部分を通り而して毛皮を滑澤にする。Doppeln は彼れの朝洗(朝顔を洗ふこと)を(二格)爲すことに於ては尙一生懸命である、而して兎も同様に彼等の前足を顔洗

にまで使用する。兎の足は殊に刷毛に適して居る。家禽、殊に水禽を、人は餌及び睡眠の間の中休に於て常に彼等の羽衣の整頓と清潔にすること、を以て勉めて居るのを見る、而して如何に室の蠅が塵及び不潔物より免る、か(塵や不潔物を拂ひ清むるを云ふ)如何に彼がその吻を磨き而して大切にすることを、恐らく既に各人は観察した。

### 273. 父子

- 1) sich als Schlange im Gras erweisen 草の中に蛇の如くに横つて居る — als Schlange 蛇となつて、蛇の如く sich erweisen 自分を示す、現はる
- 2) auf der Hut sein 用心する、警戒する — die Hut は用心、保護なり
- 3) schwere Luft bekommen 呼吸に苦む、ヤツト呼吸する — schwer は困難に、Luft は空氣又は呼吸 bekommen は得るなり

戦場の一個の凄まじき光景(一つの感動させる所の有様)を或英國の中隊長の手紙は Flandrskaagte の戦より敘述する: 吾々は、戦が終へて(過ぎ去つて)ありし時に、負傷者を檢分せし(負傷者の方へ見し)、而して私は或老いたる白髪「ボーア」人の處へ來りし。彼は岩石の後に横はり而して臂の上に凭れて居りし。先づ私は此老いたる壯漢に對して注意して居りし。負傷したる「ボーア」人の二三人は草の中に蛇の如くに横はつてありし(草の中に蛇の如く自分を示した)。人は彼等に最もよき目的に於て(之を救濟せんとする目的にて)近づく、然るに(und)突然彼等は發砲する。夫れ故に私は注意せし、然しながら私は近寄りし時に、彼(老いたる「ボーア」人)は、彼れの銃を取り上げべき、力のない(不能でありし)ことを、見し。彼はやつ

と(困難に)呼吸せし、而して最早長く生存し能はざりし(それが最早長く彼と共に續き能はざりし)。私が彼れの上へ屈みし(身體を前に屈して彼を見たとの意)時に、彼は彼れの側にて闘ふて居つた、十三歳の童兒なる、彼れの子息を探して呉れと(子息の方へ見るべく)、私に(四格)願ひし。私は彼れの願の通りに (nach) 爲せし、而して負傷者の群の内に私は憫なる若者の死したるを(憫なる若者を死して)見出し而してそれを其父(即ち老いたる「ボーア」人)の處へ擔ひ行きし。汝は(此書を與へたる人を指す)實に、私が柔弱でないことを、知つて居る。併しかの老いたる「ボーア」人が彼れの死したる小兒を見し時には、私は顔を反けねばならざりし(汝の知る如く私は女々敷者ではないが如何にも之を見るに忍ばなかつたとの意)。彼はかの身體(死骸を云ふ)を自身に押し付け而して、私の喉が引き絞められた如くにありし位、それ程嘆息せし(私が其嘆息を聞て胸一杯になつて喉が引き絞めらる、如くにありしとの意)。此時に於て私は、初めて戦争と云ふものは如何に驚くべくあるかを見し。私が振り向きて見し時に(再び「ボーア」人の方へ振り向きし時)、かの老いたる「ボーア」人は死してありし、然しながら彼は彼れの死したる童兒の冷き手を固く握つて居りし。

### 274. 生命

- 1) es thut mir leid (其れは私に憐れなす) — 困つた事でありませ、御氣の毒です 杯總て痛み悲しむときに用ひらるゝ言葉なり



或大河を渡らんと思ひし所の、或理學者は「ボート」に(四格)乗りし。航行の間に彼は船頭に(四格)、彼が算術を知つて居る(理解する)かと、問ひし。——算術? いえ、そんなことは私はまだ少しも(全く何も)聞きませんでしたと、答がありし。かの理學者が答へし: それは氣の毒である、何となればお前の生命の四分の一は消へ失せたから。其後二三分間を経て(僅の分其後)彼は再び問ひし: お前は數學に就いて何か知つて居るか。船頭は微笑し而して、いえ! と答へし。——あー! お前の生命の第二の四分の一も消へ失せた! と、理學者が呼びし。理學者の第三の問が響きし(第三の問に曰くとの意): お前は天文學に於ける知識を持つて居るかと——どう致しまして、旦那!——では (nun, ja) お前の生命の第三の四分の一も消へ失せてしまつて居る。

丁度其時(此瞬間に於て)「ボート」は岩の角の上へ突き当たりし、而して沈み始めし。船頭は飛び上り(岩の上へ)、彼れの上衣を脱ぎ棄て、而して心配さうなる顔付を以て問ひし: 貴方は遊ぶことが出来ますかと——いやと、理學者の答がありし。では (nun, ja) 速に私の脊中に乗れ、然らざれば貴方の生命の總ての四分の四が消へ失せて仕舞ます。

### 275.

- 1) es fehlt an etwas (其れが或物に於て缺ける)は或物が不足するとの意なり
- 2) unter andern 他のものゝ中に、數多の者の中に(第拾輯 237 の註参照)
- 3) allons (佛語 ballong と發音す)さあさあ、進め、掛れ、起て杯總て勇氣を鼓舞するときに用ゐる詞

往時 Dresden に於て一つの大なる宮城が焼失せし。それが冬でありし、井戸は結氷してありし而して人々はこの恐るべき寒さを恐れし。見物人は澤山(充分)ありし (gab es), 然しながら手傳する人々は不足せし。數多の者の中に大なる「マッフ」を持つたる一人の肥滿せる紳士が立ちし而して宛も演劇の如くに火事を(三格)見物せし。さあさあ(鼓舞の詞)、あなた(紳士)、貴方は茲で水を運ぶのを手傳ふて下さいと、水を運ぶ人の中より一つの聲がせし(呼びし)。——余は宮中顧問官 M.....であると、「マッフ」を持つたる紳士が答へし。——して私は Skurland の公爵だと、かの水を運ぶ人が答へ、而してかの紳士に神速に充ちたる一桶の水を頭の上へ注ぎかけし。

### 276. 旨くへこまされた

- 1) abfertigen は一言の下に拒絶するなり茲にてはへこます、遣つ附けらる杯譯すべし
- 2) das Billet (發音 biljet) 切符——Billets は複數の形なり
- 3) homerisches Gelächter ホメールの大笑——homerisch は Homer を(古希臘詩人の名)形容詞にしたるものにして「ホメールの」なり Gelächter は大笑なり即ち「ホメール」が神に歸したるが如き大笑との意にして烈しき大笑を云ふ

市街乗合馬車に於て車掌は切符を請求せし。或貴婦人は己れに對しては切符(丸切符との意)而して可なり大きく成長したる童兒に對しては半切符(小供切符)を渡せし。車掌は先づその半切符を而して然る後にかの童兒を熟視せし。これは可なり大きく成長したる小兒でありますな! と、それに對してかの貴婦人が答へし: いかにも、併し貴方は、私の子息が、乗車以來こんなに大

きく成長すべき、時を充分に有せし程、左様に徐々に進行しました(車行した)と。見物人の烈しき大笑(ホメールの大笑)の下にかの車掌はこそこそと去て仕舞ふた。

### 277. 半分

1) das Bäuerlein は Bauer (農夫)に縮小詞leinを附したるものであるが小さき農夫と云ふ意味にあらず斯の如き縮小詞は愛する意味で附したるものなり故に只農夫と譯し置くべし

2) harte Schale 大形のターレル — hart は元來硬きの意なれども貨幣の形容詞となるときは「粗大なる、大形の」杯の意味なり

3) es sei! はそんな事もあるであらうとの義にして、成程、そうかな杯の如く話の應答に用ゐらる

4) sich aus dem Staube machen (塵から自分ななす即ち塵の中から出づる)は「急いで逃走す」との義なり

或老いたる農夫は夜更けて(遅き夜に於て)尙、一つの丈夫なる節瘤だらけの杖を手に持ち(手に於て)、大形の Schale を入れたる袋を肩にして(肩の上に)、淋しき荒地を越えて進みし。突然近く彼れの前に一個の形態(人との意)が顯はれ出る、それ(形態)は真に最も良き感覺を爲さず(一見して餘りよい心持のせない)且又最も好き目的を持つて居ない様に見えし所の。汝は金子を持つて居る、而して私にその半分を與へねばならぬと、かの無頼が云ひし。農夫は自分を耳の後を(自分の耳の後との意)搔きし。そうかなと、彼(農夫)が言ひし、腕力は道理に勝つものである(腕力は道理の前に行く)私は汝にそれでは(demi)半分遣らうと思ふ、が併し、其のもう一人のものは尙何も亦望まぬと云ふ、條件で——もう一人とは

誰の事かと(どの他の者か)、かの無頼漢が問ひ而して驚いて振り向きし(農夫は此の盜賊の外尙一人の賊が其後にあるかの如き虚言を構へたるが故盜賊は驚きて後に振り向きしとの意)。—その人は茲に居るのじや、(そらとの意)! と、農夫が話し、彼れを己れの節瘤ある杖で頭の上に打ち而して彼れの大型の Schale を以て急いで逃げ去りし。

### 278. 羅馬人の愛國心

1) einen in Schrecken setzen 或人を驚かす — Schrecken は驚、setzen は置くなり

2) ein in nach dem Leben trachten 或人の生命を狙ふ。— trachten は物を得んと勉むるなり、einem nach dem Leben は或人の生命の方へ(直譯せば或人に生命の方へ)なり

嘗て羅馬人等は Struſti の王 Porjema と戦争を爲せし。此者(Porjema)は大軍を率ゐて(mit)連戦連勝の勢で羅馬市に向つて進入し、彼(羅馬市)を取り巻き而して、彼(羅馬市)を兵糧攻にする爲に(彼を饑餓せしむべく)、彼(羅馬市)に一切の運送(糧道を云ふ)を断ち切りし。そこで、Mucius と云ふ、或高貴なる青年は、敵を驚かさんが爲に、或大膽なる事業にまで決心せし。彼は、只だ短刀を以て武装せられて(只だ短刀を持ちしのみにてとの意)、Struſti 人の陣營中に忍び行きし而して無難に(襲撃せられずに)王の天幕の前まで來りし、其處には丁度(其時に)兵士等に給料が拂ひ渡されし所の。Porjema を識らざりし所の、Mucius は立派に着服したる男を目指して飛び掛かりし、それを彼は王と思ひし所の、それは然しながら只それの(王の)書記でありし所の(立派に着服したる男に反

へる), 而して彼(書記)に短刀を胸の中へ突き込みし。直に彼は兵士共より捕へられ而して王の前へ連れ行かれし。恐る、ことなく彼は此者(王)に向つて話せし: 私の名は Mucius である, 私は羅馬の市民である而して, 我祖國の敵なる, 汝を殺さんと, 目的を持つて居つた。私に私の企圖が達せなかつたから, 夫れ故に私は汝に白状しやうと思ふ, 私は, 汝の生命を狙ふ所の, 唯一の者ではあらぬことを(白状云々に反へる)。王は驚きし而してこの大膽なる青年に, 若しも彼が彼(王)に直ちに全き徒黨を(汝の徒黨残らずをとの意)打明けぬならば, 彼を焼き殺さんと, 啓せし。そこで Mucius は彼れの右の腕を露出し(裸にし), 一言をも發する(云ふ)ことなく, 其近傍に立てる火鉢の處に進み, 彼れの手を烈火の内へ差し入れ而して彼(手)を顔色を變することなく(變せられざる顔を以て)徐々に其内にて焼きし。其時驚きと恐怖とが周圍に立てる者等を掴みし(周圍の者共が驚及び恐怖の襲ふ所となりしとの意), 而して王が呼びし: 罰せられずに汝等の仲間處へ歸り行け! 汝は私に對するよりも自己(汝)に對して怨恨に舉動した(却て自己に對して恨みがましき舉動をしたとの意)。私は, 斯の如き勇敢が私の爲にも亦戦はんことを, 欲すと(余が爲に此の如き勇士の戦ふものあらんことを欲すとの意)—— Porjema は今や自ら羅馬人等に媾和にまでの手を捧げし(握手の爲に), Mucius は併し彼れの同市民より Scävola 即ち「左手」と云ふ最も名譽なる綽名を得し, 而して此名は彼れの子孫にまで傳はりし。

### 279. 燐寸の發明者

- 1) dreißiger Jahre 三十年代(茲にては千八百三十年代を云ふ) — 世期の十年代を表はすには其數詞に er の語尾を附すものとす
- 2) eine Haft verbüßen 禁錮を受ける, 禁錮に服す — verbüßen は刑罰を贖ふなり茲にては入牢又は服役によつて其罪を贖ふを云ふ
- 3) außer Stande sein 能はぬ, 出来ぬ — im Stande sein (能ふ)の反對なり(本輯 253 節の註 3 参照)
- 4) etwas verwerten 或物を金錢に替へる, 或物の利益を収める, 賣拂ふ
- 5) sich zu nutz machen (自分に利益にまでなす)已れに或物を利用するなり
- 6) zu Geld und Gut kommen 富有になる — Geld は金錢なり Gut は普通は土地の如き不動産なり, 茲にては G. の頭文字にて韻を整へ熟語となりたるものなれば此の如き字義の區別をなすことを要せず

人生に取りて甚だ大なる恩惠となつた所の, 燐寸の發明者は, Kammerer と云ひし。彼は Ludwigsburg に生れ (Ludwigsburg より出生してありし) 而して其發明を禁錮中に爲せし。この三十年代に於ける(茲にては千八百三十年代に於けるとの意)政治上の陰謀の爲に罰せられて, 彼は Hohensperg 城砦に於て一つの長き禁錮を受けし。彼が化學者でありし故に, 彼に溫和なる司令官は, 或小なる化學試験室に於て仕事することを, 許せし。直に Kammerer は, 摩擦に依つて火を發する(興へる)であらう所の, 摺附木を製すべき試験を爲せし; 何となれば既に一の發明, それに依れば木片が或化學上の液中に浸すことに依つて發火せし所の, 一の發明が成されてありし故に, そこで Kammerer は, 摺附木を燐を以て包まんと云ふ, 考案を起せし(考案の上へ來りし)。併し遺憾なことにはかの憫なる囚徒は, 己れの發明の利益を収め能ふことが, 出来ざりし。それ(發明)は全く知れ渡りし, 併し獨逸國

に於ては火災の危険の爲に禁じられし。之に反してそれ(發明)を外國、殊に英國が利用せし。其後この禁制の取消が爲されし(起りし)、而して今や亦獨逸國に於ても各處に燐寸製造所が起りし。この新しき且つ收益多き職業に依つて多くの人々が富有になりし、遂に彼れの牢獄より(三格)放免せられし所の、發明者にのみ(mir)彼(發明)は何にをも齎らさざりし(發明者には何の利益もなかりしとの意)。彼れの研究及び骨折の果實は他人より收獲せられし;彼自らは瘋癲院に於て卒はりし。

### 280. 悪しき誤

1) bei jemand einen Freitisch haben 或人の處にて或る施食を受ける — Freitisch 無料の食事なり

2) einen tüchtigen Schluck nehmen 一杯ギューと呑む — tüchtig は強く、しつかりしたる、Schluck 呑み込むこと nehmen は取る

或非常に貧しき神學の候補者は或職人の家族の處にて一の施食を受けし(一日に一回とか或は二日に一回とか時日を定めて施食を受け居りしとの意)。彼は或時例外に晚餐に招かれし、何となれば主人の誕生日が一の大鉢の米及び一壺の葡萄酒に依つて祝はれねばならざりし故に。總ての者が食卓に着き而して葡萄酒中より既に少しが飲まれてありし時に、主婦が過失より燈火を消せし而して、それを再び點火する爲に、厨へ行きし。それが眞暗でありし;かの貧しき候補者、その前には、彼は生れて以來(彼れの生活に於て)甚だ稀に味ふべく得し(飲むのに貰ふ)所の、そんな液體(葡萄酒を云ふ)を入れた

る(mit)壺が立ちし所の、候補者は此もの(壺)を掴み、それを注意して開栓し、ギューと一口呑み込み(強き一呑を取りし)而してそれ(壺)を靜に再び立て、置きし。やがて(短かく其後)主婦は燈火を以て入り來りし。總ての者は驚き而してかの候補者は色を失ひし;(何となれば)彼(候補者)はその壺を米の料理の眞中に立てたりし(故に)。

### 281. 酩酊して

或丁抹の水師提督は愉快なる(好き)食卓に於ては通常、又少々(etwas)飲み過ごすことを(渴を越へて飲むべく)常とせし。——彼が復(例の如くとの意)大酒したりし所の、斯様な(愉快なる)晩食の後に彼は嘗て狭き街道を通して車行した。突然馭者は(馬車を)止めし、水師提督は彼れの愉快なる微睡より眼醒め、不満げに馬車の窓より頭を差し出し(頭を以て伸び出で)而して罵詈しつつ、言ひし:何事が起つたのじやと(何事があるか)——閣下、茲に酩酊したる水夫が道に横はつて居ますと、かの召使(即ち馭者)は、憐むべき奴を助け起しながら、言ひし。——ブウイ、恥を知れ、汝酔つばらい奴! なせ貴様はこの街道の上に横はつて居るのじやと、水師提督はかの水夫に呼びかけし。——水夫は笑ひ而して答へし: なせかと仰しやるのですか——なせとなれば私は、家へ車行し能ふ爲には、閣下の如く馬車を持つて居らぬからですと。

### 282.

Sparta の有名なる立法者たる、Lyfurgus は彼れの同市民